

城ヶ谷遺跡発掘調査報告書

1990

大東市教育委員会

は し が き

標高318メートルの飯盛山の頂きにのぼれば、眼下に河内を見おろし、さらに前方はるかには、淡路島をのぞみ、一方、左右南北には堺や京の都をのぞむことができるでしょう。

戦国時代の畿内統一者ともいわれる、三好長慶が、その支配の拠点として、城を築きあげたことも、十分にうなずけるしだいであります。歴史の流れは、その後信長の京都上洛にともない、近世の幕あけへと移り変わるわけです。しかし、この飯盛城が南北朝時代から戦国時代を経て、近世へと歴史の流れの中で果たした役割は大きなものであります。

今度四条啜学園短期大学校舎建築に先立ち新規の埋蔵文化財の包蔵地（小字名にちなみ城ヶ谷遺跡と命名）が確認されました。

これにより大学当局のご協力を得て、発掘調査を実施することになりました。

今回の調査により、当遺跡が古くは縄文時代から古墳時代、中世にかけての貴重な複合遺跡であることが確認でき、殊に古墳時代の石室3基をはじめ、中世山城にかかわると思われる遺構等を検出できました。

今回の調査に際しましては、大学当局、地元の方々をはじめ関係者各位には、多大なるご理解とご支援をいただきました。心よりお礼申し上げますしだいあります。

平成2年3月

大東市教育委員会

教育長 中野 昭明

例 言

1. 本書は、大東市教育委員会が実施した。大東市北条4丁目所在の城ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大東市教育委員会技師黒田淳を担当者として、1988年1月16日に着手し、同年5月18日に終了した。
3. 調査にあたっては、学校法人四条暁学園、株式会社鴻池組の多大な援助を得ている。
4. 調査及び整理の実施にあたっては、石井裕己、石田昌世、大谷総、大山清、岡田幸博、北田保弘、北田亨子、玉本雅己、谷崎光子、中村亘登、野村香枝、広瀬悟郎、樋上奉世、東坂宣欣、深沢吉隆、増田耀子、三加茂憲明、宮田八重子、森石千枝子、山村俊之、山口裕弘、山本裕子、山本芳子、吉田すみ子、吉村早苗、渡辺新平、諸氏の協力を得た。また、府文化財愛護推進委員会の今村安和、橋本実、森田実蔵氏、大東市文化財保護推進会、北条古文化同好会の方々からも有益な助言を得た他、奈良大学西山要一、大阪府教育委員会の松岡良憲、三宅正浩、(財)大阪文化財センター三好孝一諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
5. 本書の執筆、編集は、担当者が行った。
6. 調査において作成した写真、実測図、カラーライド等は、大東市立歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望したい。

本文目次

第1章	地理的歴史的環境	1
第2章	調査に至る経過	3
第3章	調査成果	5
第4章	まとめ	65

挿図目次

第1図	周辺の遺跡分布図	1
第2図	調査区位置図	3
第3図	A区地区割図	5
第4図	7区北壁土層断面図	6
第5図	A区自然流路平面図及び土層断面図	7・8
第6図	12区縄文土器出土状況図	9
第7図	12区出土縄文土器	9
第8図	12・13区出土弥生土器	10
第9図	9区出土石鏃	10
第10図	A区古墳時代平面図	11
第11図	1号墳石室平面図	12
第12図	1号墳石室床面遺物出土状況図	13・14
第13図	1号墳石室出土土器	16
第14図	1号墳石室出土鉄製品	17
第15図	1号墳石室出土管玉・ガラス玉	17
第16図	1号墳石室出土土玉	18
第17図	2号墳第1石室実測図	21・22
第18図	2号墳第1石室平面図	23
第19図	2号墳第1石室第2床面平面図	24
第20図	2号墳第1石室平面図	25・26
第21図	2号墳第1石室出土土器	27
第22図	2号墳第1石室出土鉄製品	28

第23図	2号墳第1石室出土太刀	29
第24図	2号墳第1石室出土鉄鍬	29
第25図	2号墳第1石室出土耳環・ガラス小玉	30
第26図	2号墳第1石室出土紡錘車・棗玉	31
第27図	2号墳第1石室出土ガラス玉	33
第28図	2号墳第1石室出土土玉	34
第29図	2号墳第2石室平面図	35
第30図	2号墳第2石室実測図	36
第31図	2号墳第2石室出土土器	36
第32図	2号墳周溝土器出土状況図(1)	37
第33図	2号墳周溝土器出土状況図(2)	38
第34図	2号墳周溝出土土器	39
第35図	S K - 6 土器出土状況図	39
第36図	S K - 6 出土土器	39
第38図	12区出土土器	40
第37図	13区土器出土状況図	40
第39図	13区出土土器	41
第40図	2号墳周溝上面土器出土状況図	42
第41図	2号墳周溝上面出土土器	42
第42図	A区中近世遺構平面図	43・44
第43図	S D - 5 ・ 段状遺構土器出土状況図	45・46
第44図	S D - 5 ・ 段状遺構出土土器(1)	47
第45図	S D - 5 ・ 段状遺構出土土器(2)	47
第46図	S D - 5 ・ 段状遺構出土土器(3)	48
第47図	S D - 5 ・ 段状遺構出土土器(4)	49
第48図	集石遺構-1平面図及び立面図	49
第49図	集石遺構-3平面図及び断面図	50
第50図	集石遺構-4・杭列平面図及び立面図	51
第51図	S E - 1 平面図及び断面図	52
第52図	S E - 1 出土土器	52

第53図	S E - 2 平面図及び断面図	52
第54図	7 区出土銅銭	52
第55図	礎石平面図	53
第56図	西壁・南壁土層断面図	54
第57図	第 1 遺構面平面図	55・56
第58図	第 2 遺構面平面図	57・58
第59図	第 2 遺構面下層遺物出土状況図	59
第60図	第 2 遺構面下層出土土器	59
第61図	第 2 遺構面出土土器	60
第62図	第 2 遺構面出土円筒埴輪 (1)	60
第63図	第 2 遺構面出土円筒埴輪 (2)	61
第64図	第 2 遺構面出土円筒埴輪 (3)	62
第65図	第 2 遺構面出土形象埴輪	63
第66図	C 区平面図及び北壁土層断面図	64
第67図	調査区外採集埴輪	66

図 版 目 次

図版 1	周辺の航空写真
図版 2	A 区遺構
図版 3	A 区遺構
図版 4	A 区遺構
図版 5	A 区遺構
図版 6	A 区遺構
図版 7	A 区遺構
図版 8	A 区遺構
図版 9	A 区遺構
図版10	A 区遺構
図版11	A 区遺構
図版12	A 区遺構

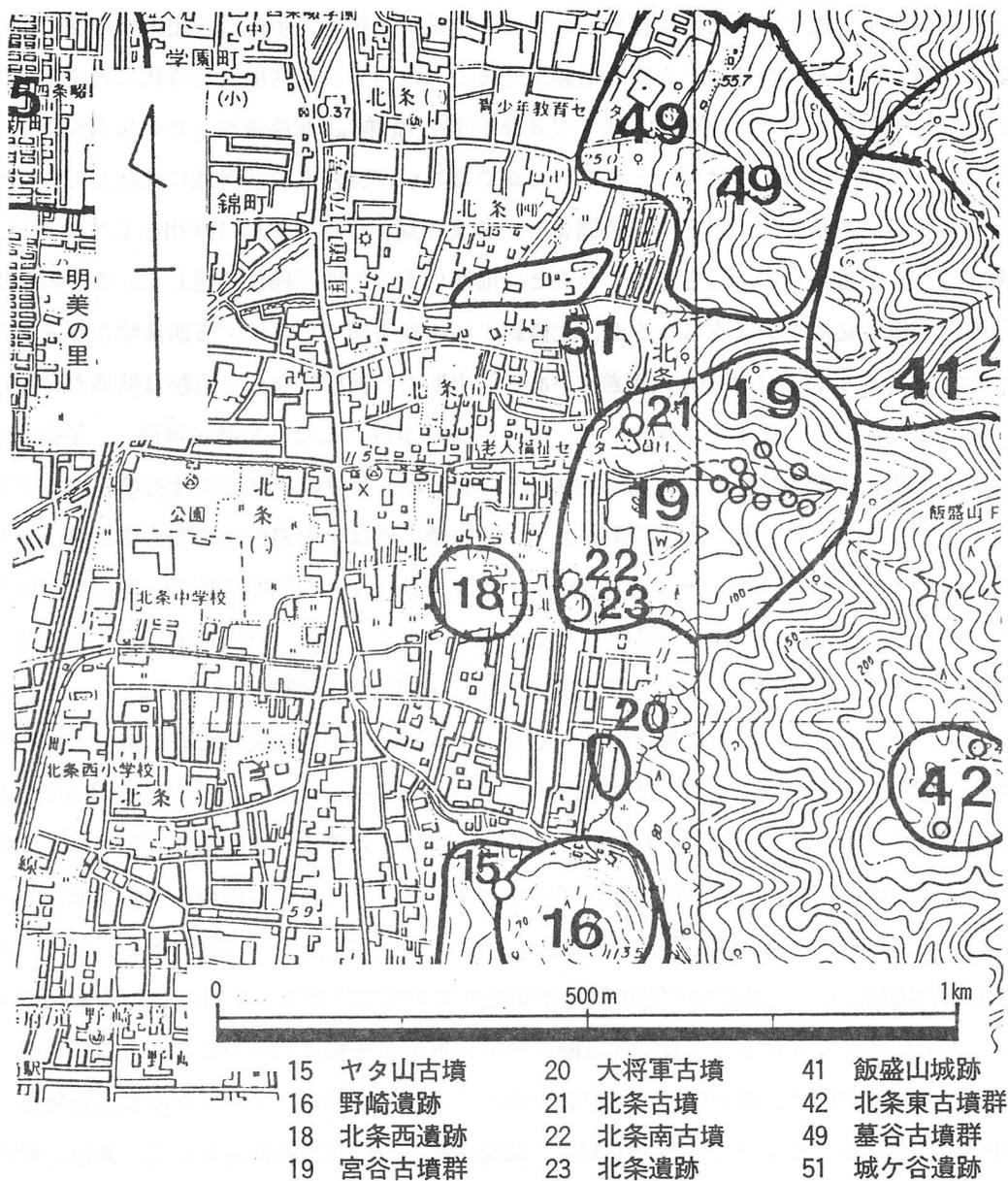
- 図版13 A区遺構
- 図版14 A区遺構
- 図版15 B区遺構
- 図版16 B区遺構
- 図版17 B区遺構
- 図版18 C区
- 図版19 C区
- 図版20 A区遺物（縄文土器、弥生土器、石鏃）
- 図版21 A区1号墳石室出土遺物
- 図版22 A区2号墳第1石室出土遺物
- 図版23 A区2号墳第1石室出土遺物
- 図版24 A区2号墳第1石室及び第2石室出土遺物
- 図版25 A区2号墳第1石室出土遺物
- 図版26 A区2号墳周溝出土遺物
- 図版27 A区古墳時代遺物（SK-6、大甕）及び周溝上面出土遺物
- 図版28 A区SE-1、SD-5、段状遺構出土遺物
- 図版29 A区SD-5 段状遺構出土遺物、銅銭
- 図版30 B区第2遺構面出土遺物
- 図版31 B区第2遺構面下層出土遺物
- 図版32 B区第2遺構面出土遺物（円筒埴輪）
- 図版33 B区第2遺構面出土遺物（円筒埴輪）
- 図版34 B区第2遺構面出土遺物（円筒埴輪）
- 図版35 B区第2遺構面出土遺物（円筒埴輪・形象埴輪）

表 目 次

第1表	1号墳出土土玉計測値	19・20
第2表	2号墳第1石室出土ガラ玉計測値	32
第3表	2号墳第1石室出土小玉計測値	34
第4表	2号墳第1石室出土小玉計測値	35

付 遺物観察表

第1章 地理的歴史的環境



第1図 周辺の遺跡分布図

河内平野の東方にそびえる生駒山地は、南北約20kmにわたり、大阪と奈良の県境を画している。生駒山地は標高約640mをピークにして、北に向かって徐々に高度を下げ、飯盛山へと連なっている。城ヶ谷遺跡は、その飯盛山より派生する標高約30mの尾根上に位置

している。

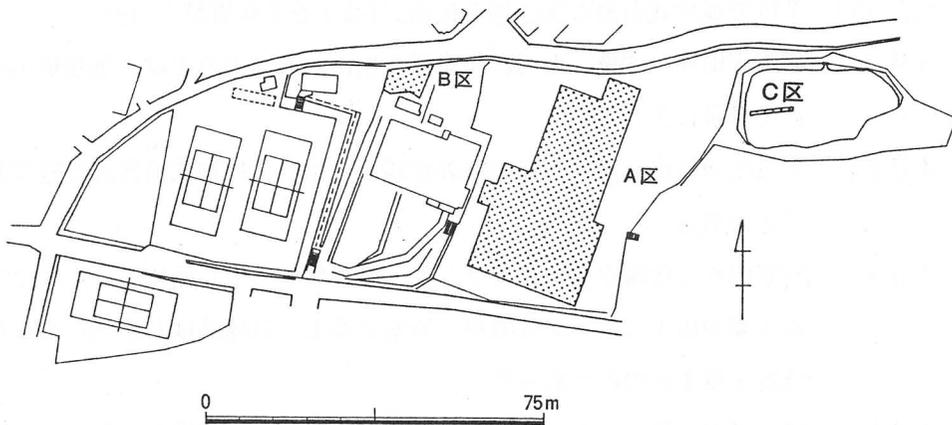
城ヶ谷遺跡の存在する大東市は、河内平野北東部に位置し、古代には、海城が深く入り込み河内湾を形成していた。現在知られている市域の遺跡も、生駒飯盛山系の西麓に集中して存在している。当地に、人間の活動が始まるのは古く、後期旧石器時代に属すると考えられる有舌尖頭器が、当遺跡の南方にある宮谷古墳群⁽¹⁾、北条遺跡⁽²⁾でそれぞれ出土している。縄文時代の遺跡は今のところ明らかではないが、西方の低湿地に立地していた北新町遺跡で、奈良時代の自然河川流路より、縄文中期、後期の土器片が出土しており⁽³⁾、遺跡の存在が窺われる。弥生時代になると、前期にあっては、稲作に適している河内湾周辺の低湿地に立地するようになるが、北西約1kmには中期まで存続する四条畷市雁屋遺跡⁽⁴⁾南へ2.5kmのところには中垣内遺跡⁽⁵⁾がある。中期から後期になると遺跡は低地だけではなく、丘陵地にも立地するようになり、国見高地性遺跡、また、宮谷古墳群⁽⁶⁾、北条遺跡⁽⁷⁾でも後期の土器が出土している。古墳時代になると、西麓の丘陵地には古墳が造営されるようになるが、今のところ、四条畷市忍ヶ丘古墳以外は、周辺では前期古墳は確認されていないが、北新町遺跡⁽⁸⁾、中垣内遺跡⁽⁹⁾、鍋田川遺跡⁽¹⁰⁾で、前期の掘立柱建物群が検出されている。最も古いのは、中期古墳の堂山古墳のようである。堂山古墳からは、大量の鉄製品（鉄刀、衝角付冑、三角板皮綴短甲）と、初期の須恵期が出土している。⁽¹¹⁾後期になると、造営された古墳の数量は増加するが、土取りや、宅地造成のため消滅した古墳が多く、近年の調査では、北条遺跡で3基の古墳（北条1～3号墳⁽¹²⁾、宮谷古墳群⁽¹³⁾で1基の古墳（宮谷1号墳）が確認されている。特に、宮谷1号墳は、片袖横穴式石室を主体部とする径20mの円墳で、大量の埴輪が伴ったと考えられ、円筒埴輪の他、家形、盾形（石見型）、人物埴輪などの形象埴輪などが出土している6世紀後半の古墳である。北方にある墓谷古墳群⁽¹⁴⁾も、土師質亀甲形の陶棺が出土していることから、6世紀後半～7世紀初頭の古墳群と考えられる。奈良時代以降、中世、近世の様相は明らかにされていないが、低地の北新町遺跡で、鎌倉時代の居館跡が検出されている他⁽¹⁵⁾、中世になると、丘陵部の開発が盛んになったようで、寺川遺跡⁽¹⁶⁾、北条遺跡⁽¹⁷⁾、宮谷古墳群⁽¹⁸⁾などで、遺構、遺物を検出している。また、背後にある飯盛山には、山頂の地形を利用した山城が築かれている。⁽¹⁹⁾その起源は明らかではないが、16世紀には、一時畿内統一に成功した戦国の武将、三好長慶の拠点となっていた。当地の小字名である「城ヶ谷」もこれに由来するのであるうか。飯盛城と時を同じくして、麓の深野池に浮かぶ三箇の島には、キリシタンで有名な三箇サンチョの三箇城があったことが知られている。その後、近世の大和川付替え後の新田開発を経て、ほぼ現在の大東市の姿ができあがった。

第2章 調査に至る経過

1987年5月、学校法人四条暁学園より校舎新築の計画が出され、大東市教育委員会へ埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。建設予定地は、周知の遺跡には含まれていなかったが、当市が定める遺跡周辺地域に該当し、周囲の状況から推定すると、遺跡が存在している可能性が高いため、試掘調査を実施することになった。

同年11月5・6日に試掘調査を実施した結果、古墳時代の須恵器、土師器、瓦器、瓦質の羽釜等が出土し、遺構も遺存している可能性が高いことが判明した。直ちに文化庁に遺跡発見届けを進達し、新規の城ヶ谷遺跡として登録した。これを受けて、1988年1月16日から発掘調査を開始し、同年5月15日に終了した。引き続き内業整理を行いすべての作業を1990年3月31日に終了した。

尚、調査は校舎新築部分（A区）、浄化槽設置部分（B区）、そして敷地の東にある池にもトレンチを設定して（C区）実施した。



第2図 調査区位置図

調査日誌抄

- 1988年1月16日 B区の調査を開始。機会掘削及び人力掘削により盛土を除去。
- 1月26日 B区で斜面上に埴輪が検出され始める。
- 1月27日 B区の埴輪は列を成し広がることが判明。須恵器の杯、高杯、甕等も同時に検出。A区の調査開始。
- 1月30日 B区の埴輪群検出終了。写真撮影、実測を行う。A区では引き続き盛土除去作業。
- 2月5日 B区最終地山面まで掘削、調査終了。

- 2月8日 A-3区で土師器の壺が完形で出土。すぐ近くで、石が並んで検出され始める。石の並び方や大きさなどから、横穴式石室の基底部と判断、石で囲まれた部分の土を掘り下げたところ、須恵器の壺、杯、高杯等が完形で検出され、横穴式石室であることが判明。(城ヶ谷1号墳) 玉類の出土が予想されたので、石室内の土は後で洗浄にかけるため、土嚢袋につめてとっておくことにした。C区の調査開始。
- 2月9日 石室床面検出作業、太刀、土玉等が検出される。
- 2月16日 1号墳石室写真撮影。
- 2月22日 7・8区で杭列と溝(SD-3)を検出。
- 2月25日 C区写真撮影。
- 2月29日 C区の調査終了。
- 3月14日 7・8区で段状遺構、SD-5を検出、羽釜、三足が出土し始める。
- 3月23日 A区段状遺構、杭列、溝の全景写真。
- 3月30日 7区で横穴式石室の基底部を検出。(城ヶ谷2号墳第1石室)
- 3月31日 石室床面検出作業、太刀、須恵器を検出。石室内の土は、玉類検出のため土嚢袋に入れる。
- 4月2日 石室床面検出作業、石室の輪郭が現われ始め、片袖式横穴式石室であることが判明。
- 4月4日 石室内から金環が出土、ガラス玉、棗玉類も出土し始める。4区で須恵器大甕が出土した。2号墳第2石室を検出。副葬品は石室内にあった須恵器提瓶1点のみであった。
- 4月8日 第1石室、第2石室の床面検出作業が終了し、写真撮影。引き続き石室と石室内の遺物出土状況の実測を開始する。
- 4月16日 現地説明会を実施。見学者多数。
- 4月20日 2・3区で中世の井戸を検出。調査区の南側では、自然流路が検出された。
- 4月27日 第1石室の羨道部の掃除、須恵器検出。2号墳の周溝を検出。
- 5月11日 12区の北側側溝掘り下げ中に、縄文土器が出土。晩期の船橋式土器であった。12区全体を掘り下げたところ、さらに接合可能な土器片が出土した。
- 5月14日 A区地山面まで掘削。
- 5月18日 現場作業終了。

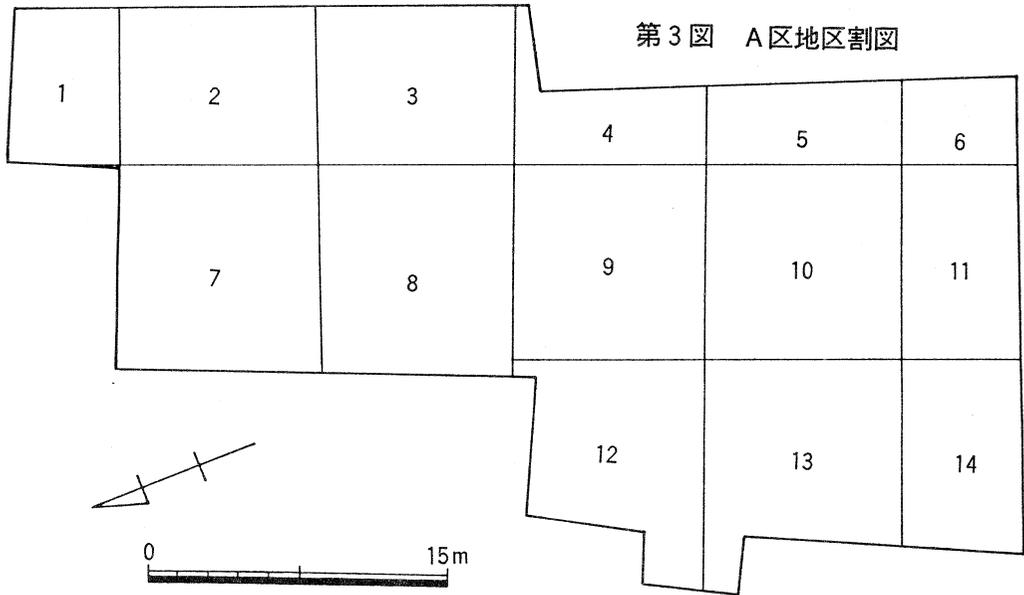
第3章 調査成果

A区

1. 層位 (第4図)

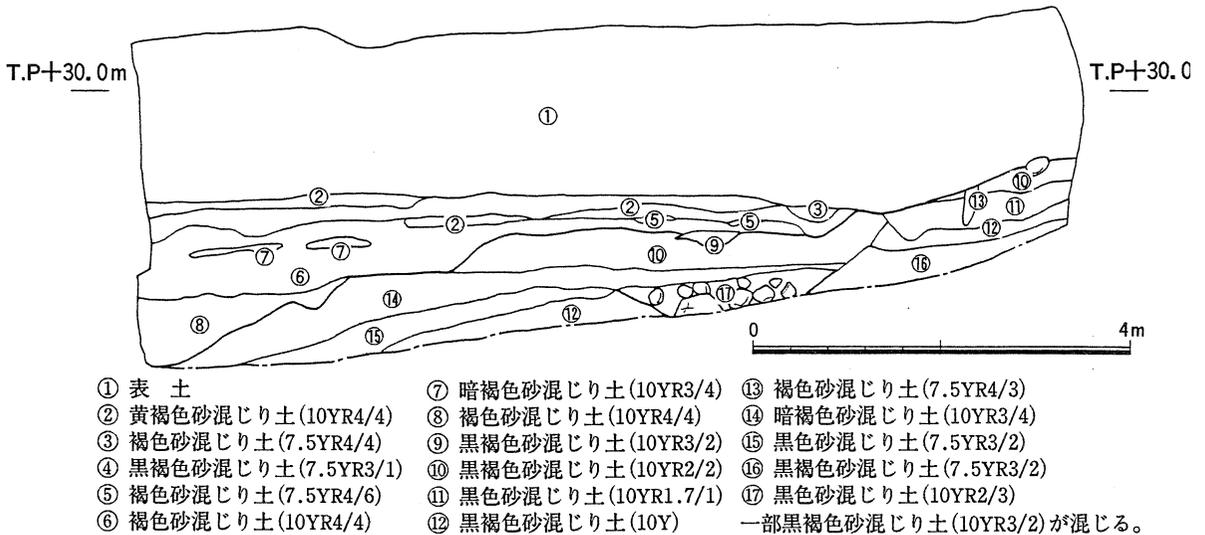
調査当時の地表は東で標高約31.0m、西で30.4mを測る。西向きに傾斜する丘陵斜面に当たるが、調査前の状況は、傾斜地を利用して造られた庭園であった。そのため、庭園造成の際の削平や盛土によって、原地形はかなり失われていた。それでも、第3図のように調査区を14の地区に分けた場合、北半の1～3区及び7・8区では、削平、盛土の影響を受けているものの比較的原地形を留めていたが、南半の4～6区及び9～14区では、築山、池、水路等によって形状が変えられていた。特に南半では、盛土があまり認められず、かなりの削平を受けている様であった。

層位は、傾斜地特有の同色の土が数層にわたる、複雑な堆積を示している。ここでは、調査区の東西方向の層位である7区北壁断面を参考にして、層位について、簡単に説明を行なうことにする。



1層は、表土も含めた盛土で、約1.8mの厚さで堆積しているが、1区では0.7m、調査区の南半ではさらに薄く、0.5m程度である。1層を除去すると、褐色系の土である2・4層が現れるが、地形的に上部にあたる1～3区では、横穴式石室の基底部（城ヶ谷1号墳）を検出している。さらに掘り進めていくと、調査区全体で段状の地形が現れ、中世～

近世に属すると考えられる杭列、溝、井戸等の遺構が検出された。10・11・14層がベースとなっている。これを除去すると、7区では横穴式石室の基底部（城ヶ谷2号墳第1石室）2区では小石室（2号墳第2石室）が検出され、2・3・8区ではこれに伴う周溝を検出した。これら2期の古墳の墳丘は、既に消失していたが、中世の段階での削平か、或いは庭園造成時の削平の影響によるものと考えられる。調査区の南半では、自然流路が検出されているが、時期は不明である。さらに下層に掘り進めていくと、比較的硬い12層や16層が現われる。12区では、この層の上面で縄文土器片が出土しているが、他では遺構、遺物は検出しておらず、地山の土と考えている。



第4図 7区北壁土層断面図

2. 遺構と遺物

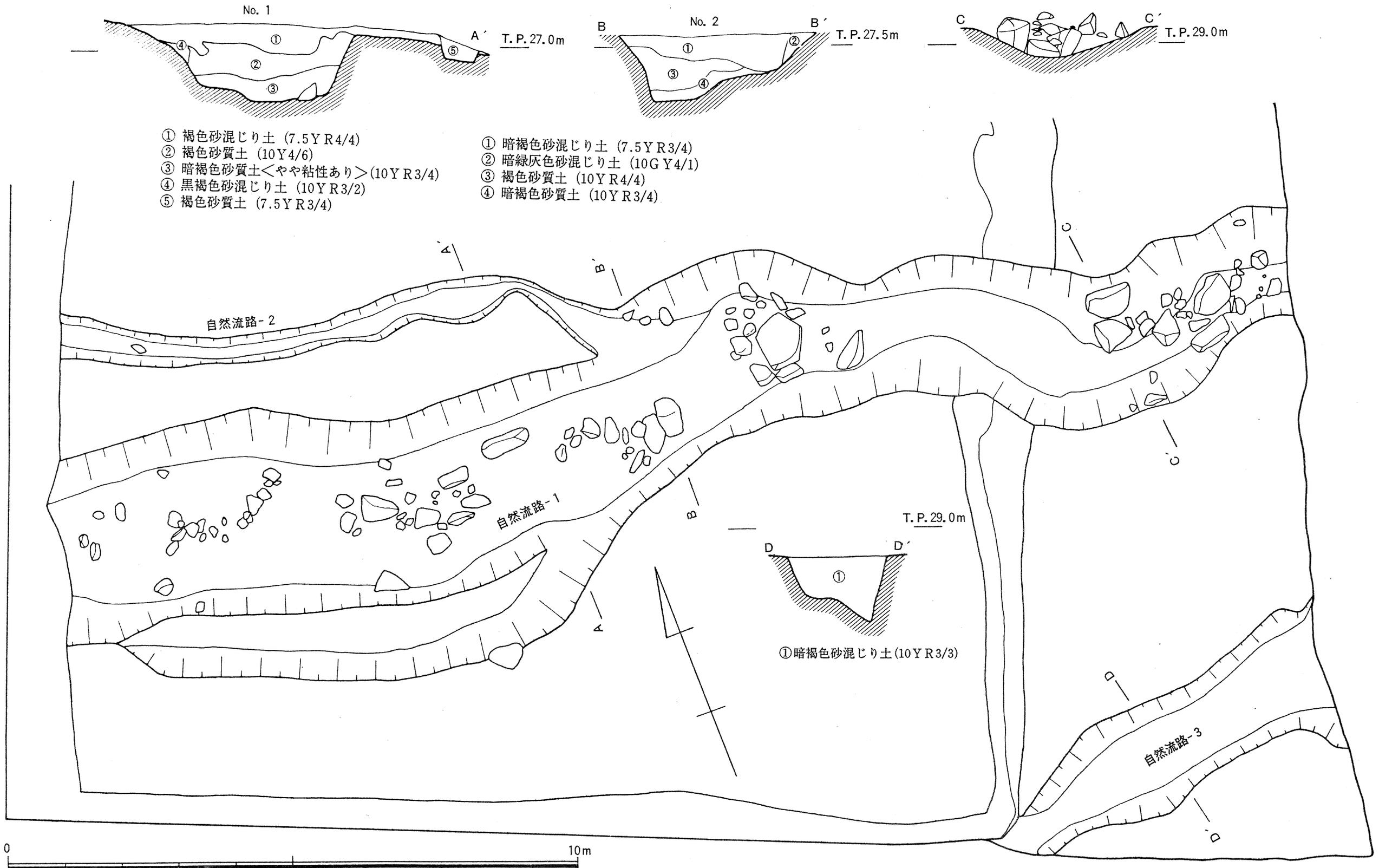
遺跡が丘陵傾斜地に立地しており、しかもこれまで庭園に利用されていたために、遺構の流失と削平が著しく、遺存状態は良好ではなかった。それでも各時代に及ぶ遺構の存在が認められ、主な遺構として、自然流路、石室3基、中近世の溝、杭列、土杭等を検出している。以下、各時代ごとに順を追って、個々の遺構について説明することにする。

(1)縄文～弥生時代

縄文時代、弥生時代に特定できる遺構は検出していないが、遺物は縄文土器、弥生土器が出土している。また、時期は不明であるが、調査区の南側で自然流路を検出している。

自然流路-1

調査区の南側で検出され、東西方向に流れていたと考えられる。5区付近で幅約2.5m、13区で4.8m、深さは約1.4mを測る。埋土は褐色系の砂混じり土、砂質土が堆積しており、流路底には0.5～1.5m大の石があった。遺物は出土していない。



第5図 A区自然流路平面図及び土層断面図

自然流路-2

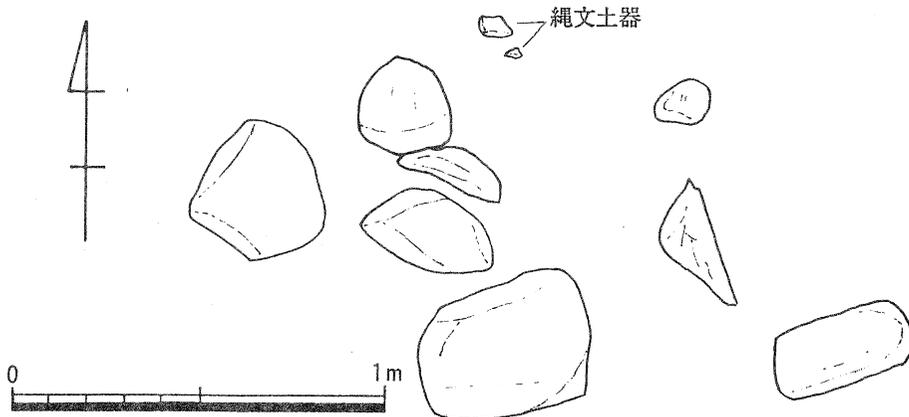
10区で自然流路-1より分岐する。幅は50~80cmと小規模で、深さは30cmと浅い。埋土は褐色の砂質土で、水の流れていたことを示している。遺物は出土していない。

自然流路-3

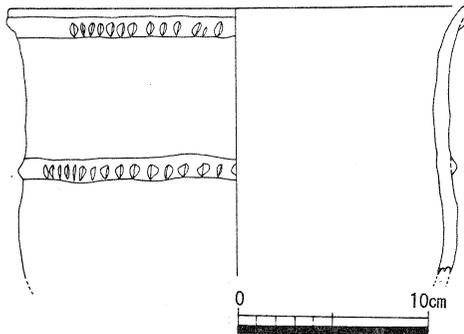
6区で検出している。幅1.8~2.5m、深さ0.7から1.1mを測る。断面は逆台形を呈し、肩から底部までの傾斜は急である。埋土は暗褐色砂混じり土のみで、埋土中には30~80cm大の石が多く含まれていたことから、土砂崩れや土石流によって、一気に埋没したものと考えられる。

これらの自然流路は、遺物が出土していないため時期は不明であるが、地山面から検出されていることから、縄文~弥生時代以前のものと考えている。

縄文土器 (第6・7図)



第6図 縄文土器出土状況図

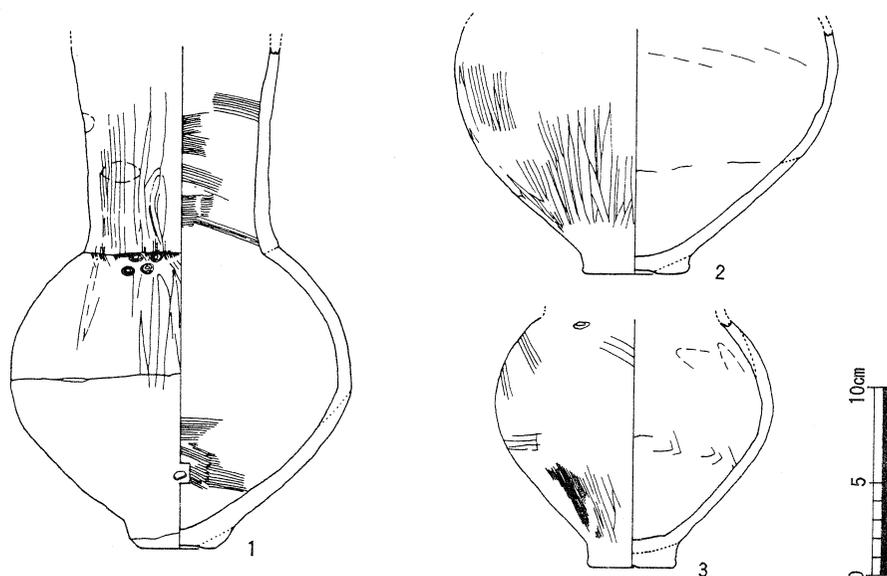


第7図 12区出土縄文土器

12区で地山面検出途中で出土した。共存する遺構は検出していないが、土層中には炭化物の混入が観察された。出土土器は、晩期の船橋式に属する深鉢である。口縁端部よりやや下に1条の刻目突帯を、屈曲する肩部にも同様に巡らす。内外面ともナデを施しているが、指圧痕が残る。縄文土器はこの他に、同じ12区で小片が10数点出土している。

弥生土器 (第8図)

3・8区で出土している。遺構に伴うものではなく、中世の土器を含む遺物包含層からの出土で、いずれも後期に属する土器である。1は長頸壺で、口縁端部を欠く。外面は体部、頸部ともタテ方向のヘラミガキ、内面はヨコ方向のハケ目が施される。外面の肩部には4個の竹管文、底部近くには焼成後の穿孔が認められる。2は壺の体部で外面はタテ方向のやや粗いヘラミガキ、下部に黒斑が認められる。3も壺の体部で、下部はタテ方向のハケ目、肩部は斜め方向のヘラミガキを施す。肩部に竹管文、下部には黒斑が認められる。



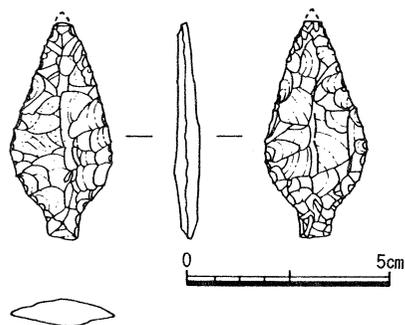
第8図 12・13区出土弥生土器

石鏃 (第9図)

9区より出土している。サヌカイト製の有茎石鏃で、先端は欠損しているが、長さ約4.6cm、幅2.1cm、茎幅0.65cm、厚さ0.5cmを測る。断面はレンズ状を呈する。

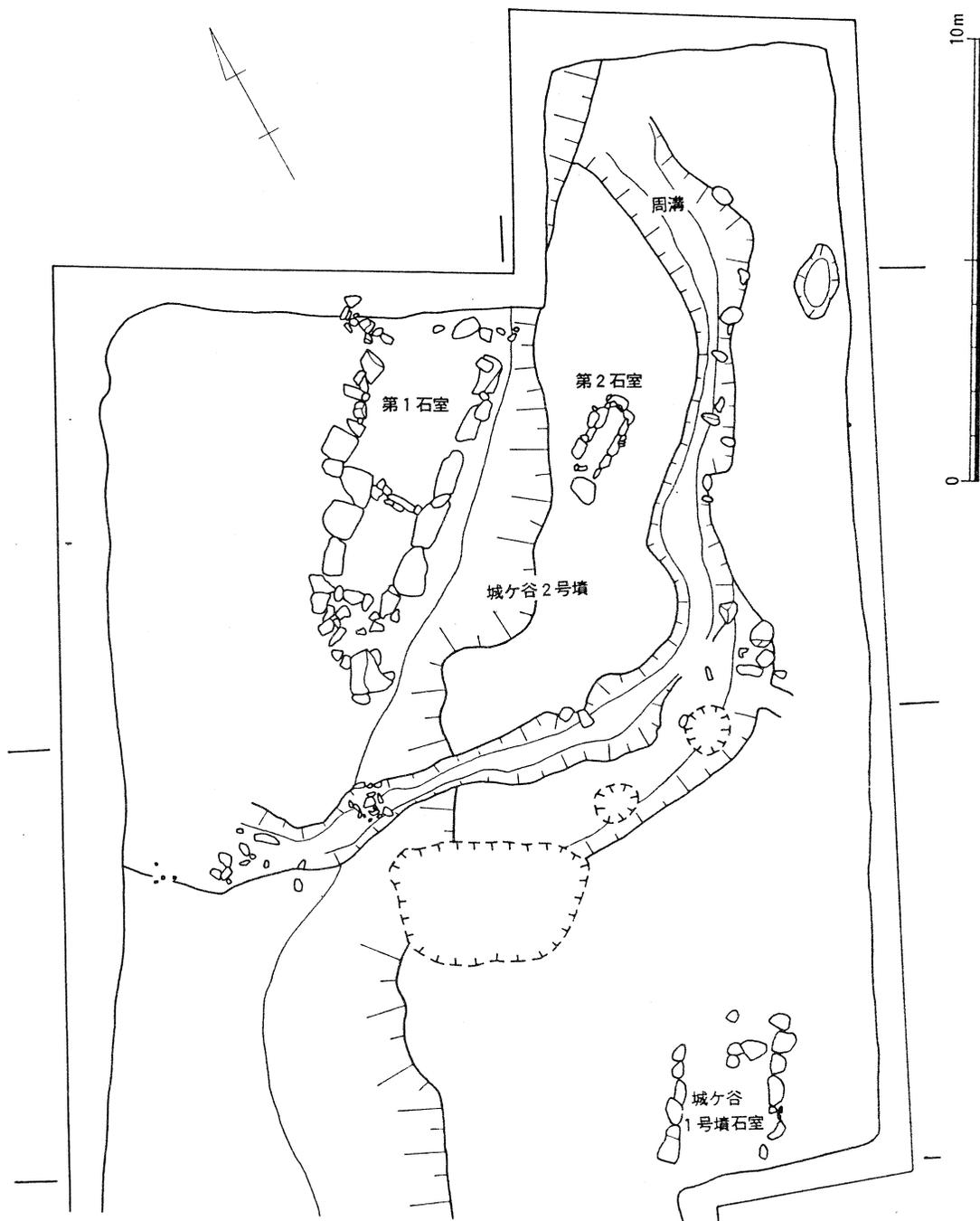
(2)古墳時代

調査前の状況では、地表面には古墳の存在を推定できるような兆候は、何ら認められなかったが、3区では、表土を除去した時点の地表下僅か50cmで、横穴式石室の基底部を、



第9図 9区出土石鏃

2・7区では中世の遺物包含層を除去した時点で、横穴式石室の基底部と小石室をそれぞれ検出している。石室が合計3基、そのうちの2基が同一古墳の主体部と推定され、古墳を2基検出したことになる。



第10図 A区古墳時代平面図

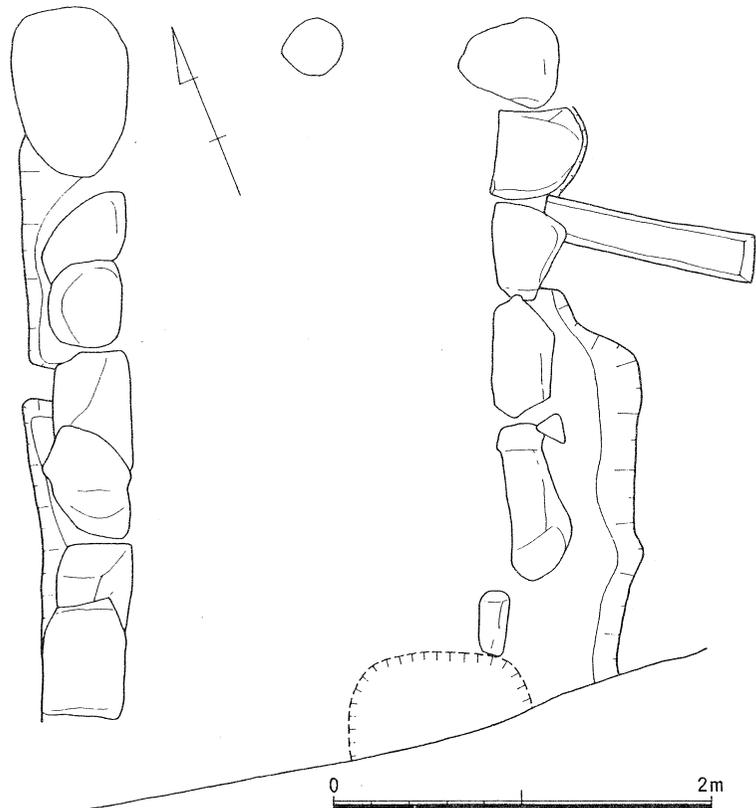
城ヶ谷1号墳

石室

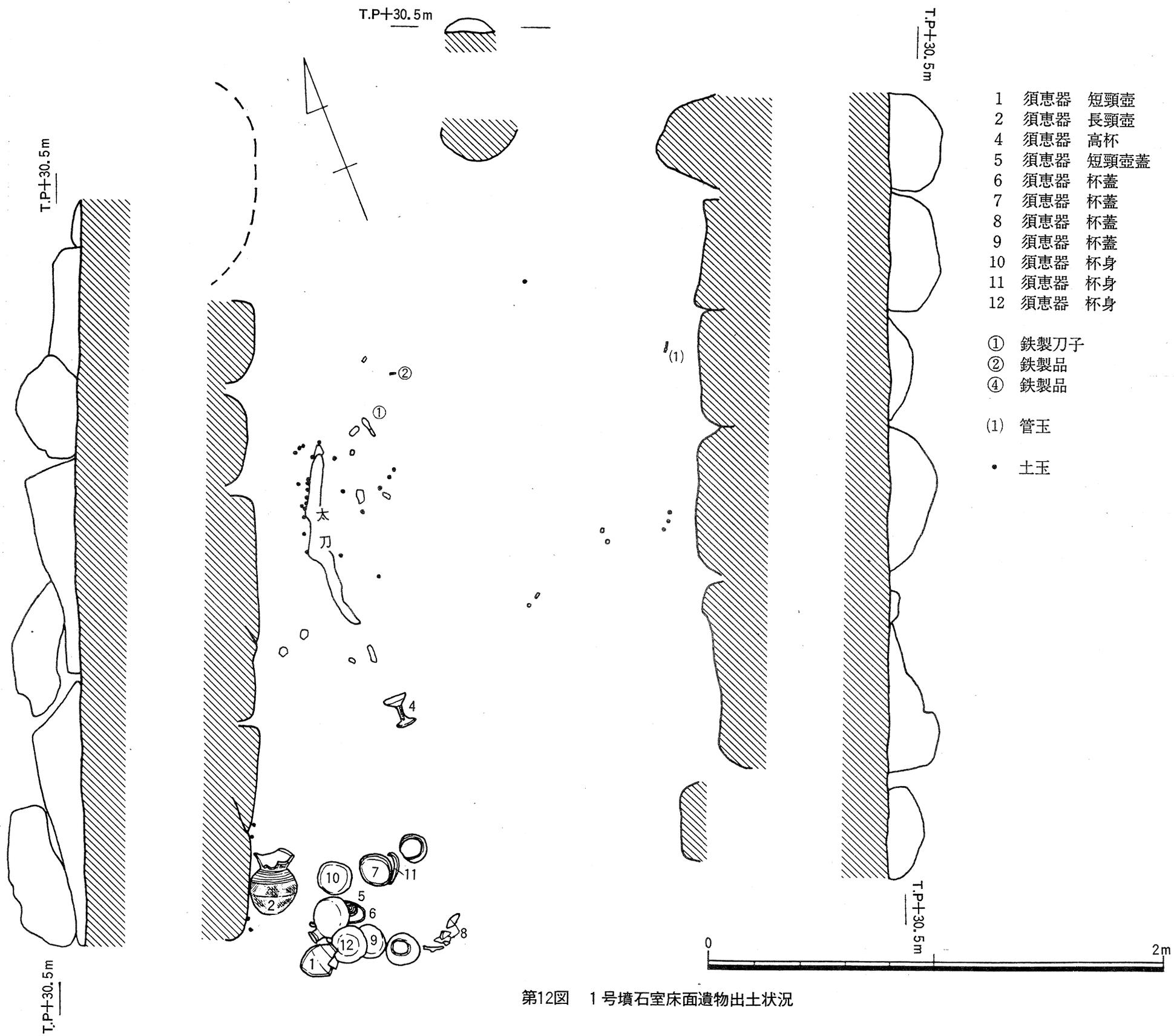
3区で検出した横穴式石室を主体部とする古墳であるが、後世の削平のため墳丘は既に消失しており、周溝も検出されなかったため、墳形や規模は不明である。石室は、主軸がN22°W方向の横穴式石室である。検出されたのは、ほぼ玄室部分に相当し、残りの羨道部分は、調査区外に存在するものと予想された。調査区を拡張して調べてみたが、石室の石材らしきものは確認されなかった。後世の削平のため、消失したのであろう。

石室の遺存状態は悪く、側壁は、1段ないし2段の石材が認められるだけで、奥壁に至っては1つの小石材を残すだけであり、それ以外の石材はすべて消失していた。使用している石材は、花崗岩質で、地元で採取可能な石である。表面は風化が進み、脆くなっている。検出規模は、奥壁付近の幅が2m、玄室入口付近が1.9m、長さは3.3mを測る。右側側壁は、1段のみが遺存していた。大きさの揃った5石を使用しているが、各石材の上面の高さは不揃いである。そのうち、手前にある石材を袖部の石とするならば、片袖式の横穴式石室と推定される。

左側側壁は、辛うじて、2段の石材が遺存していた。1段目は、5石で構成されているが、石材の大きさは不揃いで、高さも揃っていない。2段目の石材は1段目と比較すると、小型で、1段目の各石材に挟まれるようにして置かれていたらしく、2段目で、各石材の上面を揃えるようにした意識が窺える。石室床面は、



第11図 1号墳石室平面図



地面のまま、敷石や棺を置くための石材も認められなかった。

石室内遺物出土状況（第12図）

石室内の遺物は、既に天井石、奥壁、側壁が消失していたにもかかわらず、良好な状態で遺存していた。副葬品の土器類は、1部欠けているものもあったが、完形品のままで、人為的に破碎された様子はなかった。しかし、石室床面を検出する過程において、埋土より瓦器片が出土していることから、中世の頃、既に石室がこのような状態であったか、或いは、石室の再利用が行われていたようで、少なからず、盗掘の影響を受けていると考えられる。

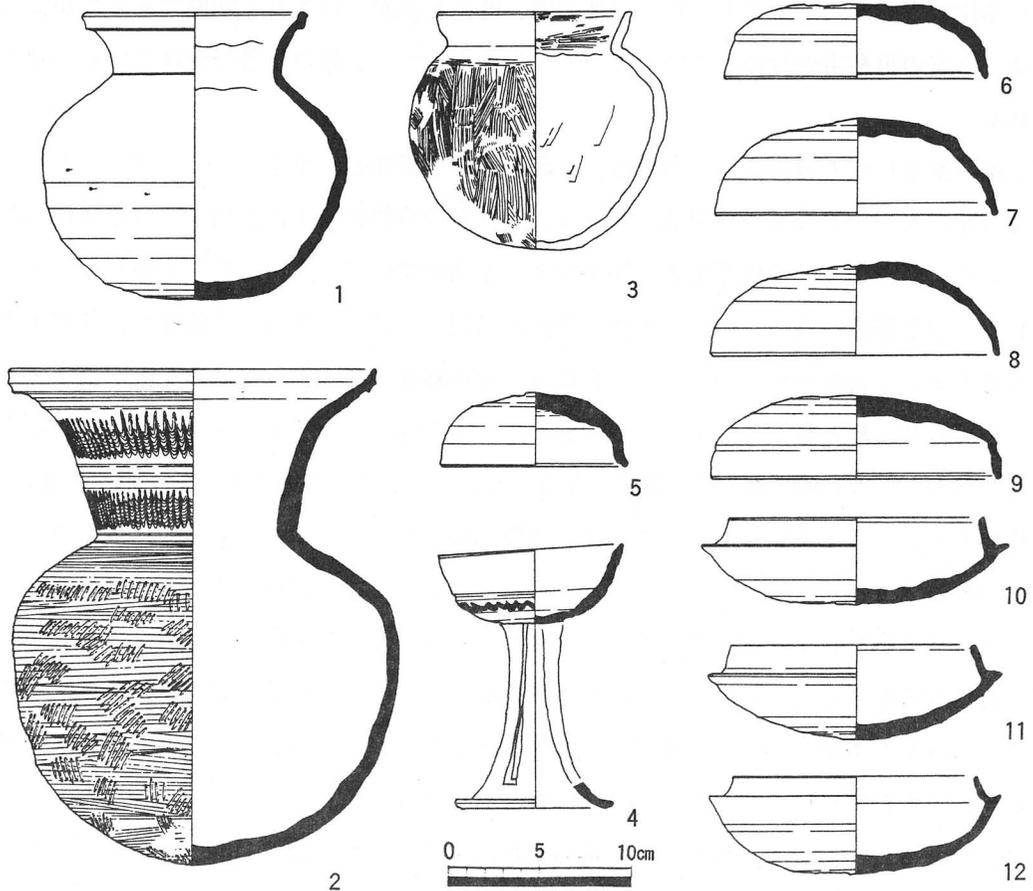
石室（玄室）内の遺物には、須恵器、土師器等の土器類と、土玉、管玉、ガラス玉等の装身具類、太刀、その他の鉄製品とがある。これらの遺物は、主に主軸よりも左側に位置していた。土器類は、須恵器無蓋高杯を除き、左側側壁の玄室入口付近に集中して存在していた。須恵器大口壺は、口縁を奥壁、底部を入口に向けて、横向きの状態で、左側側壁に密着するように置かれていた。その右には、須恵器壺、杯、蓋、提瓶の1群が重なるようにしてあり、杯と蓋がセット関係の状態のまま、1組あった。その他の土器は、提瓶に接して杯が、その右側には、杯、蓋が重なるようにあり、さらに右側には、土師器の壺が、口縁部を上に向けた状態で置いてあった。須恵器短頸壺は、セット関係の杯に接してこれも、口縁部を上に向けて置かれてあった。これらの土器は、意図的にまとまって、置かれているようであり、1次・2次埋葬によるものなのか、石室再利用時のものなのか、或いは、盗掘時のものなのかは、不明である。無蓋高杯は、これらの土器群から少し距離を置いて、口縁部を奥壁に向けて、横向きの状態で検出している。鉄製品は、太刀が玄室中央部より、やや左側壁寄り、主軸とほぼ平行な状態で出土している。太刀は中央部付近で折れ曲がっていた。刀子、釘等、その他の鉄製品は、太刀や土器群の周辺から出土している。装身具類は、土玉が、特に太刀周辺に集中して出土しており、太刀の上下に多く認められた。この状況から土玉は、太刀を覆うようにして置いてあったと推定される。尚、石室内の埋土をすべて洗浄した結果、土玉は完形のものが123個出土している。この他、管玉は右側側壁付近で、ガラス玉は埋土洗浄中に出土している。

埋葬施設であるが、釘を出土しているので、木棺であった可能性が高く、棺台等の施設が認められないため、棺は直接床面に置いたのであろう。棺の位置は、太刀の遺存する左側側壁に、側壁と平行に置かれていたと推定される。尚、人骨は検出されていない。

石室内出土遺物

土器類 (第13図・遺物観察表)

3の土師器壺は、石室埋土掘削中に出土したもので、これ以外はすべて石室床面で検出している。須恵器には1の壺、2の広口壺、4の高杯の他、5～12の蓋、杯がある。5は短頸壺の蓋である。(2)



第13図 1号墳石室出土土器

鉄製品 (第14図)

鉄製品は、太刀の他破片が数点出土しているが、図化し得たのは1部にすぎない。

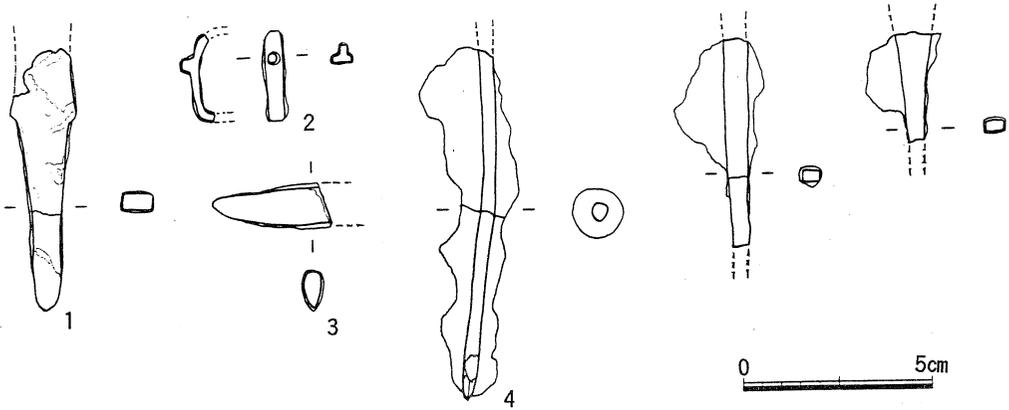
太刀

太刀は錆びが激しく、約7個に折れていた。ここでは法量だけを記しておく。全長70.0cm、幅4.3cmを測る。断面は二等辺三角形を呈する。

その他の鉄製品

1は刀子で、刀身残存部1.9cm、関幅1.3cmを測る。茎部は長さ5.3cm、断面は長方形を

呈し、先端部は舌状に薄くなっている。2は不明製品。鉤状で小さい突起を持つ。3は刀子の刀身先端部で、長さ3.2cm、幅1cmを測る。平棟で断面三角形を呈する。4・5は釘状鉄製品である。4は、長さ9.2cmを測る。5は長さ5cmを測り、断面は長方形を呈する。6は長さ2.9cmを測り、断面長方形を呈する。形状からすると、刀子或いは、鉛の茎部であろう。

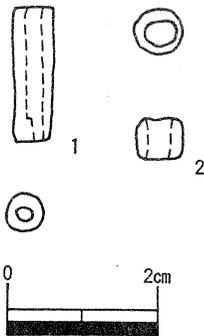


第14図 1号墳石室出土鉄製品

装身具類

土玉 (第16図、第1表)

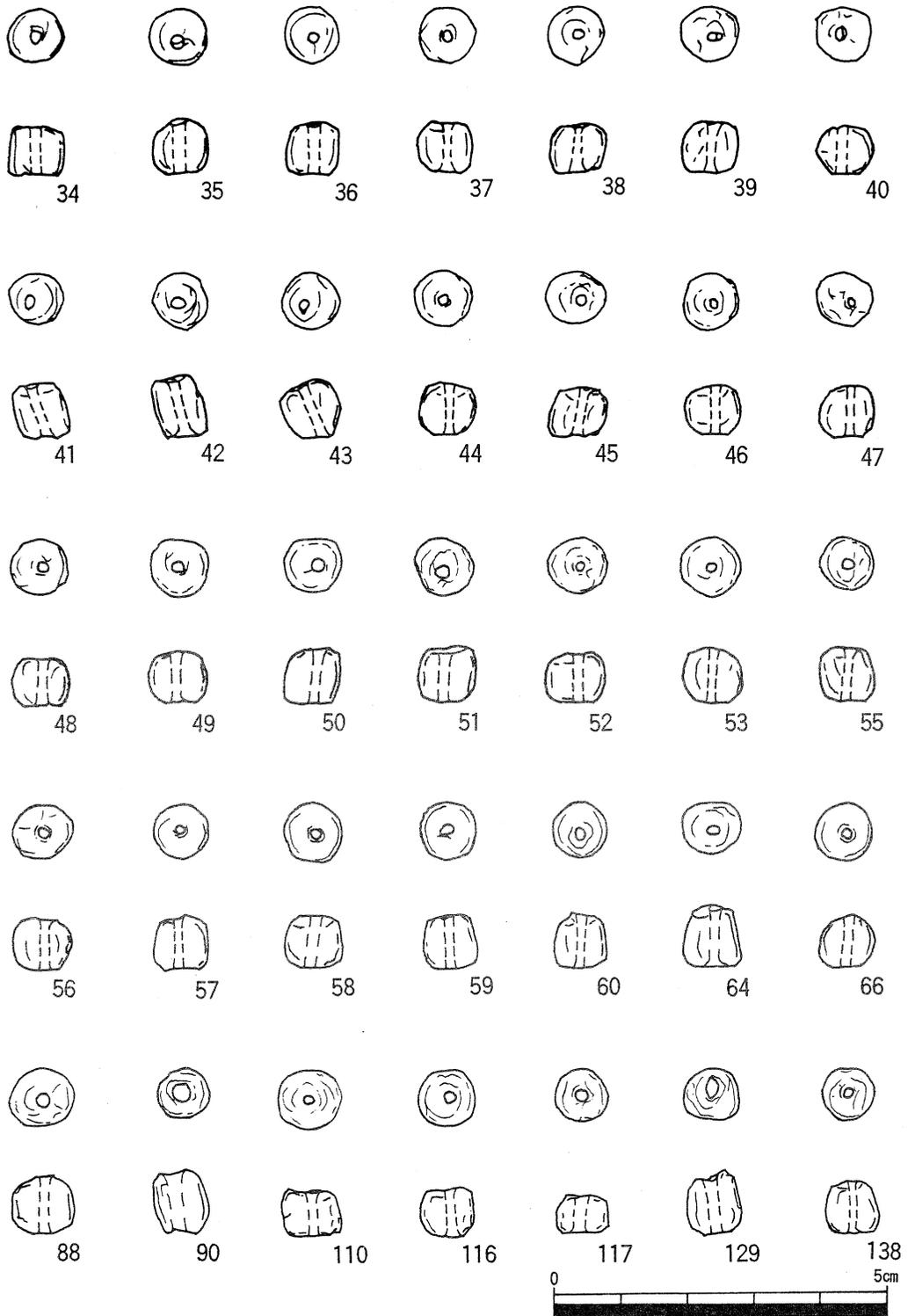
土玉は、123個出土しているが、破片のものを含めると総数はさらに増える。色調は黒色を呈し、中には鈍い光沢をもつものもある。²²⁾形状は球形に近いものと、穿孔部分に面を持つ白型のものがある。材料にはきめの細かい土が使用されており、砂粒の混入はほとんど認められない。出土時には、2個ないし3個が連結した状態のものもあった。



第15図 1号墳石室出土管玉
・ガラス玉

管玉、ガラス玉 (第15図)

管玉は碧玉製で、濃緑色を呈する。穿孔は両側から施されている。ガラス玉は水色を呈し、全体の幅に対して穿孔の径が大きい。



第16图 1号墳石室出土土玉

第1表 1号墳土玉計測値

(単位ミリメートル)

番号	全長	直径	番号	全長	直径	番号	全長	直径
1	8.2	8.95	42	9.4	8.35	83	7.85	8.35
2	7.5	8.75	43	8.8	9.0	84	8.05	8.9
3	8.15	8.2	44	8.0	8.9	85	8.65	8.8
4	6.9	8.02	45	7.75	9.0	86	8.05	9.0
5	7.55	8.9	46	7.45	8.85	87	8.9	8.75
6	8.15	8.25	47	7.9	8.5	88	8.75	9.4
7	8.2	8.55	48	7.6	8.75	89	8.7	9.15
8	8.0	8.55	49	8.0	8.9	90	10.0	8.0
9	8.2	8.1	50	8.85	8.9	91	8.5	9.0
10	8.7	9.1	51	8.4	8.85	92	8.4	8.5
11	8.2	8.5	52	7.65	8.9	93	7.9	8.75
12	7.4	8.4	53	8.55	9.0	94	8.9	8.35
13	8.0	8.25	54	8.85	8.45	95	7.7	8.4
14	8.2	9.25	55	8.2	8.25	96	8.15	8.35
15	8.6	8.4	56	7.95	9.15	97	7.85	8.45
16	7.0	9.1	57	8.4	8.45	98	7.9	8.15
17	8.1	9.1	58	8.0	8.9	99	8.2	8.3
18	8.1	8.5	59	8.15	8.85	100	8.9	8.55
19	7.5	8.1	60	8.2	8.5	101	7.8	8.8
20	6.75	7.8	61	7.9	8.7	102	8.8	8.45
21	5.7	9.4	62	7.95	8.5	103	7.7	9.15
22	7.35	8.7	63	9.25	8.9	104	7.75	8.5
23	8.6	8.5	64	9.55	8.8	105	9.05	8.4
24	7.4	8.2	65	9.0	8.6	106	8.5	9.15
25	6.5	8.9	66	8.0	8.85	107	7.9	8.25
26	7.2	8.5	67	9.2	8.15	108	8.25	8.35
27	6.55	7.95	68	8.65	8.75	109	8.0	8.75
28	7.8	8.5	69	8.2	8.65	110	6.8	9.65
29	7.35	7.4	70	8.2	8.65	111	8.1	8.4
30	8.5	8.5	71	8.2	9.15	112	8.0	8.45
31	7.8	8.7	72	8.5	8.7	113	8.3	9.05
32	7.8	8.6	73	7.7	8.85	114	8.45	8.7
33	7.75	8.55	74	8.15	8.65	115	7.95	8.5
34	7.65	8.6	75	9.0	8.8	116	7.2	8.6
35	8.5	8.7	76	7.75	8.35	117	6.0	8.1
36	8.0	8.7	77	7.7	8.55	118	8.1	8.3
37	7.8	8.5	78	8.0	8.55	119	8.0	8.45
38	7.45	8.6	79	8.05	8.55	120	8.1	8.8
39	7.7	8.6	80	7.55	8.45	121	8.35	9.3
40	7.65	8.45	81	8.35	8.45	122	8.2	8.5
41	8.55	8.25	82	7.8	8.15	123	7.5	8.55

(第1表つづき)

(単位ミリメートル)

番号	全長	直径	番号	全長	直径	番号	全長	直径
124	8.1	8.35	下	8.0	8.5	149上	7.1	8.8
125	8.0	8.45	137上	7.75	8.75	下	7.9	8.55
126	8.75	9.0	下	7.6	9.35	150	8.2	8.6
127	7.7	8.55	138	8.2	7.9	151	8.45	9.2
128	8.45	8.3	139	7.9	8.3	152	8.01	8.6
129	9.1	8.4	140	7.3	8.6	153	8.8	8.3
130	8.85	8.3	141	7.7	8.1	154	8.1	8.15
131	8.4	8.7	142	8.3	8.7	155	8.4	8.8
132		8.65	143	8.7	8.9	156	8.2	8.7
133		8.3	144	7.2	8.4	157	9.5	8.8
134上	7.2	8.4	145	8.7	8.2	158	8.45	8.8
下	7.6	8.3	146	7.9	8.4	159上	7.45	8.5
135上	8.75	8.35	147	8.2	8.9	下	7.9	8.6
下	8.1	8.8	148上	8.0	8.4	160上	7.55	8.45
136上	7.15	8.4	下	7.75	8.45	下	7.65	8.01

城ヶ谷2号墳

調査区の北側1・2・7区で検出している。後世の削平のため、既に墳丘は消失していたが、7区で横穴式石室の基底部（第1石室）を、2区で小石室（第2石室）を検出している。

第1石室

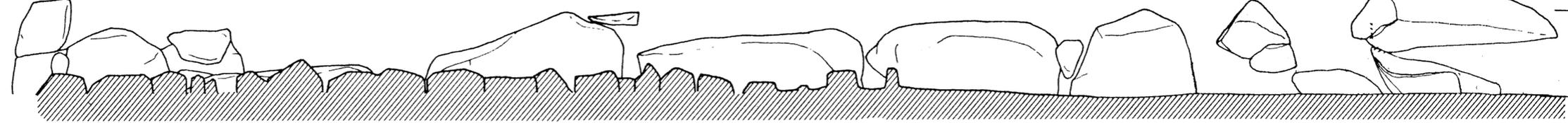
主軸がN37°W方向で、左側側壁に袖部を有する片袖式の横穴式石室である。石室の遺存状態は悪く、側壁は1段ないし2段の石材が、奥壁は右側に小石材が2個残るのみで、石室上部の石材は完全に消失していた。使用している石材は、すべて花崗岩質の石である。石室の規模は、玄室長3.6m、幅は奥壁部で2.1m、玄門部で2m、玄門幅1.3mを測る。羨道長は5m、幅は1.1mで、羨道幅は羨道入口付近左側側壁が消失しているため不明であるが、羨門部付近の幅は、1.1mを測る。羨道入口には、閉塞石と推定される石が残存していた。

玄室は、左側側壁基底部に6石使用しているが、石材の規模は不揃いである。右側側壁は、規模のほぼ揃った石材を4石使用し、奥壁側には、2段目の小石材が残存していた。羨道は、左右側壁とも5石を使用している。

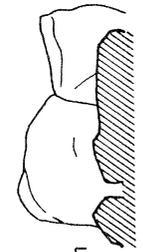
石室床面は、玄室に5～30cmの自然石を2重に敷いてあるのが認められた。また、玄門付近には、幅30cmの自然石が敷いてあり、羨道と玄室の境界を示す枢石であろう。この石

T.P+28.5m

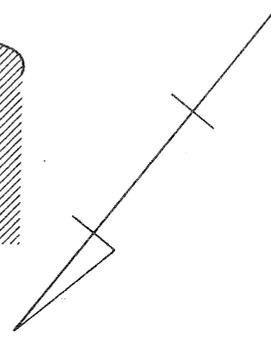
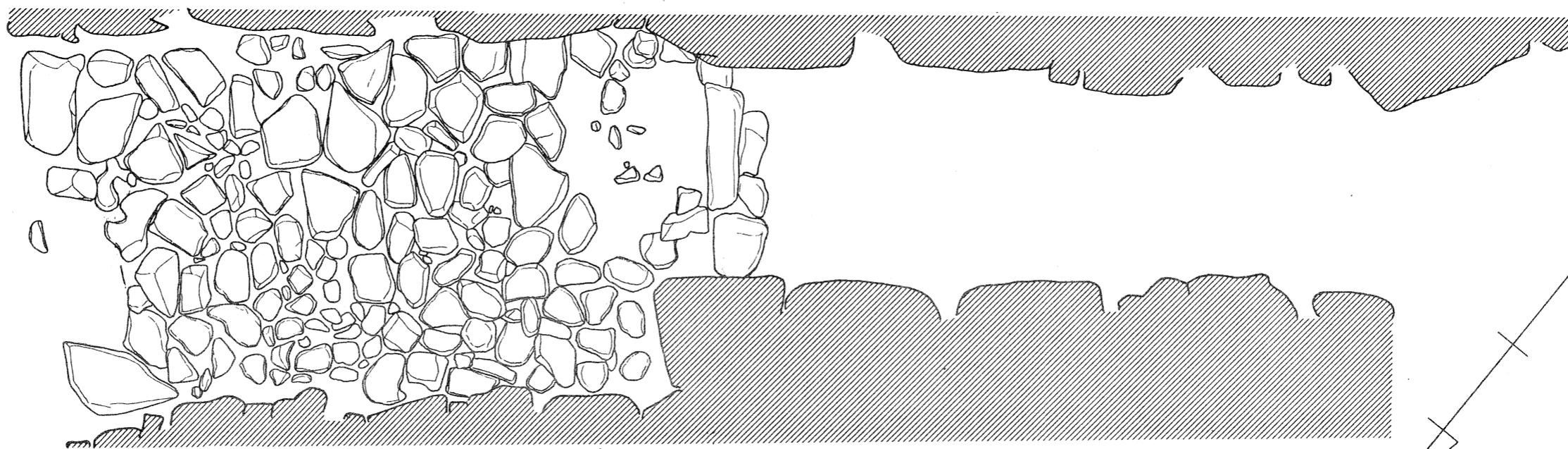
T.P+28.5m



T.P+28.5m

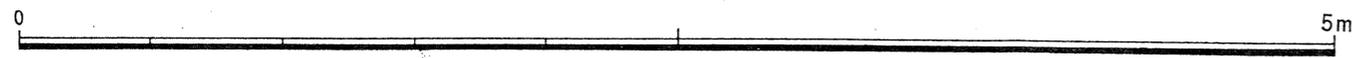
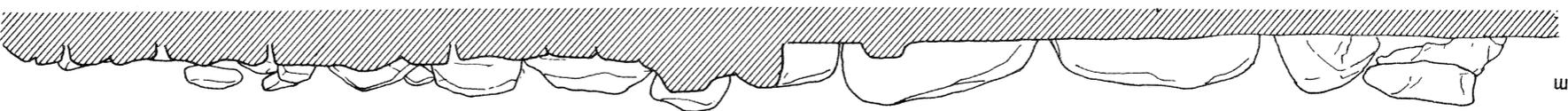


T.P+28.5m



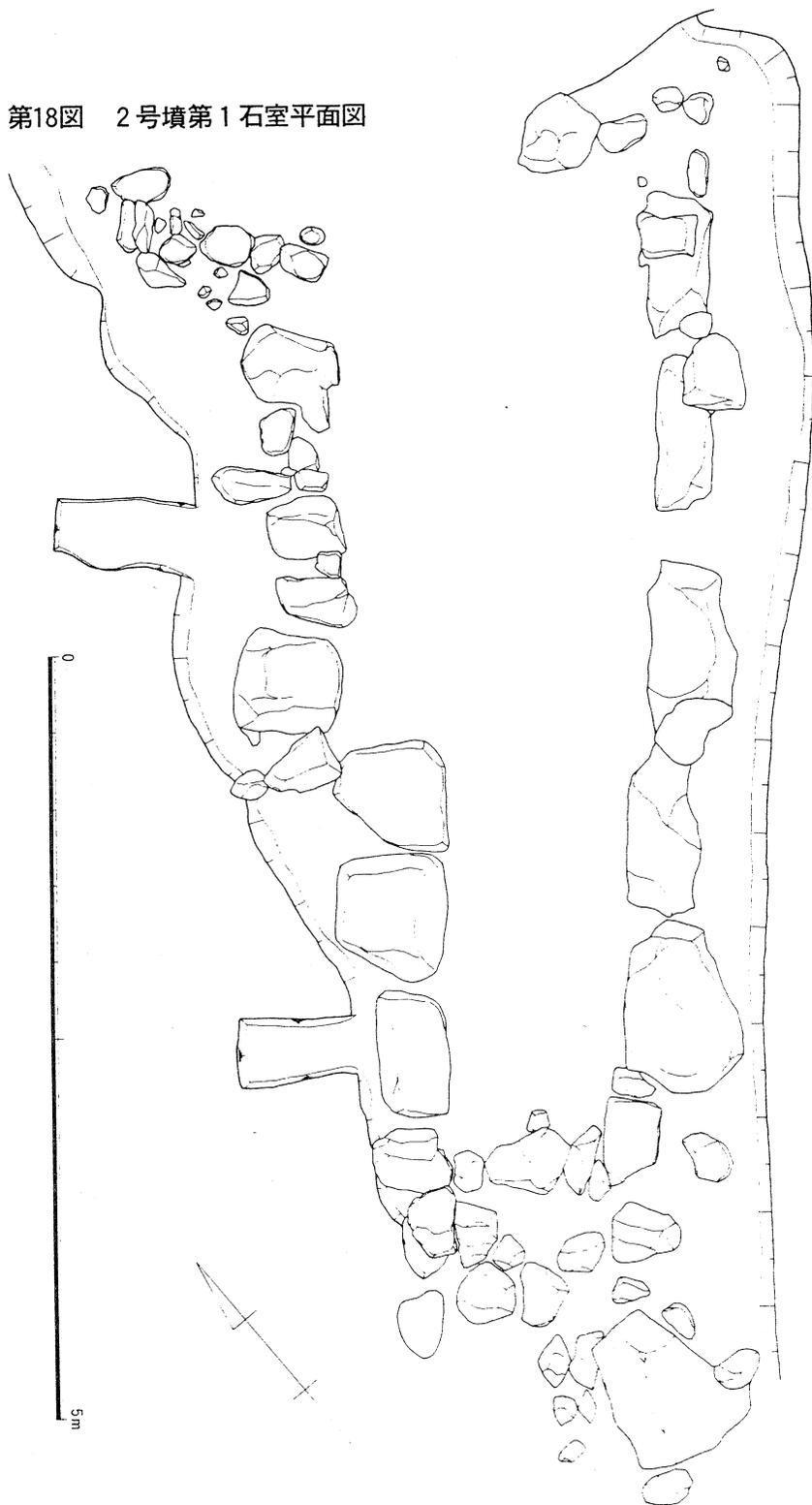
T.P+28.5m

T.P+28.5m

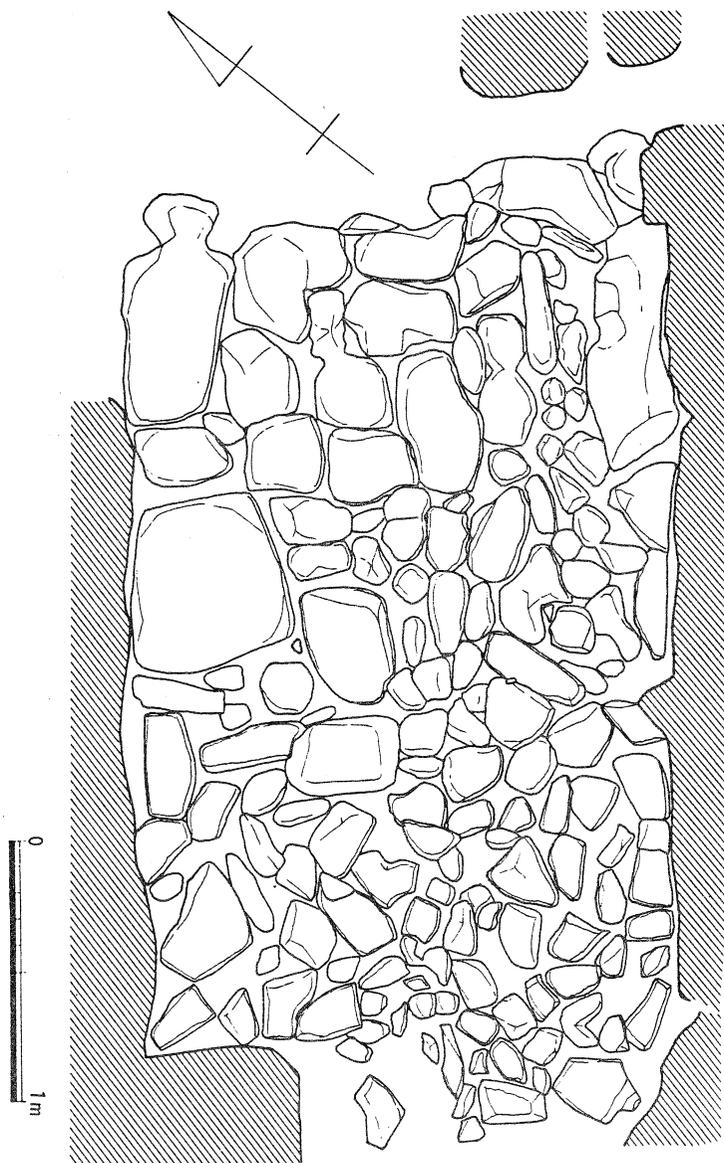


第17图 2号墳第1石室实测图

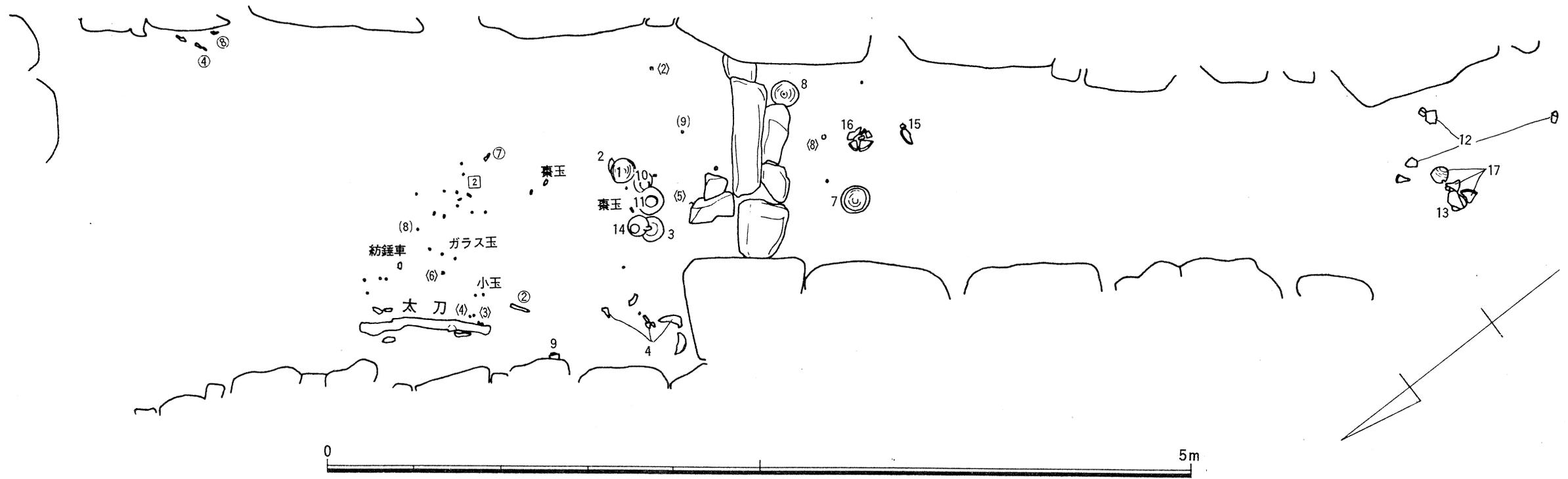
第18图 2号墳第1石室平面图



の上面の高さは、玄室床面の高さとはほぼ同じであるが、羨道床面とは約5cmの段差がある。床面の石は、玄室全体に敷いてあるのではなく、奥壁との間に25cmの間隔が、玄門付近でも約0.7×1.1mの範囲で敷石が認められなかった。玄室の奥左隅から石室外へも、約40cmの幅で石を敷いてあるのが認められたが、排水施設と考えられる。



第19図 2号墳第1石室第2床面平面図



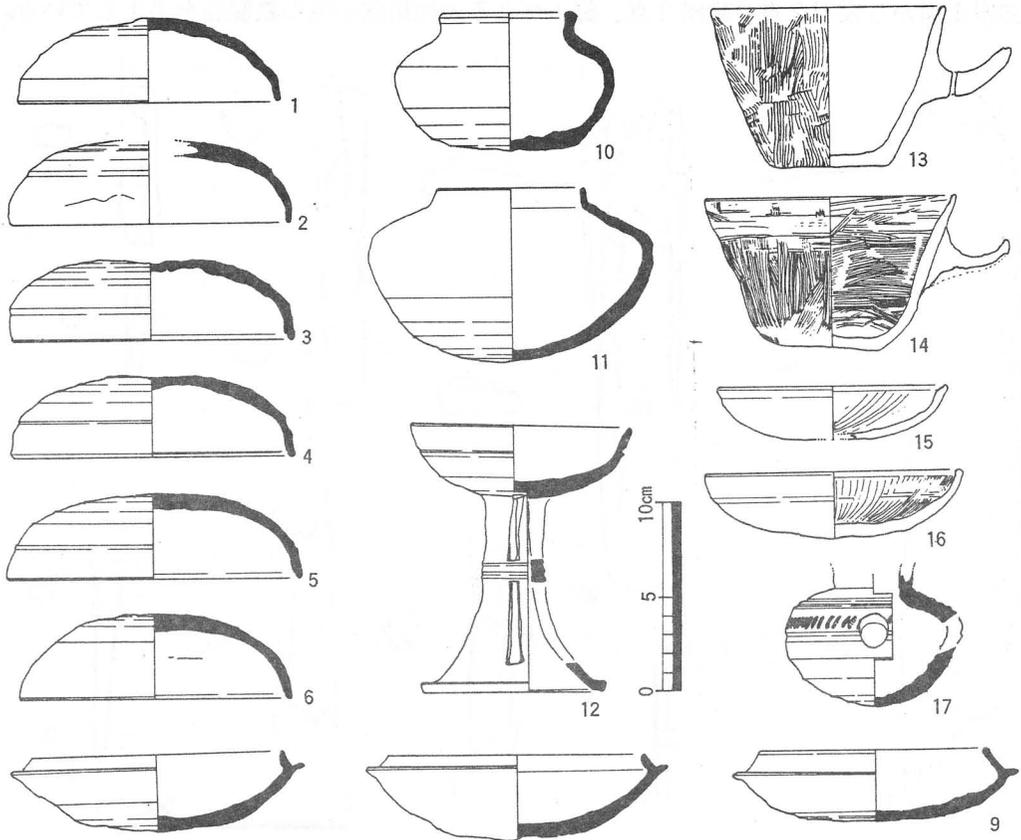
- | | | | |
|-------------|--------|--------|----------|
| 1 須恵器 蓋 | ② 太刀 刀 | (1) 耳環 | ㊦ 棗玉 |
| 2 須恵器 蓋 | ④ 鉄 鏃 | (2) 耳環 | |
| 3 須恵器 蓋 | ⑤ 釘 | (3) 耳環 | |
| 4 須恵器 蓋 | ⑥ 鉄製品 | (4) 耳環 | |
| 5 須恵器 蓋 | ⑦ 太刀 刀 | (5) 耳環 | |
| 7 須恵器 杯 | ⑧ 鉄 鏃 | (6) 耳環 | (8) トンボ玉 |
| 8 須恵器 杯 | | (7) 耳環 | (9) トンボ玉 |
| 9 須恵器 杯 | | (8) 耳環 | |
| 10 須恵器 短頸壺 | | | |
| 11 須恵器 短頸壺 | | | |
| 12 須恵器 高杯 | | | |
| 13 土師器 把手付椀 | | | |
| 14 土師器 把手付椀 | | | |
| 15 土師器 椀 | | | |
| 16 土師器 椀 | | | |
| 17 須恵器 盃 | | | |

第20図 2号墳第1石室床面遺物出土状況図

第1石室内遺物出土状況（第20図）

1号墳の石室と同様、2号墳第1石室も、既に天井石、奥壁、側壁が消失していたが、遺物は比較的良好な状態で遺存していた。

玄室内の遺物には、須恵器、土師器等の土器類と、耳環、ガラス玉、管玉等の装身具類、紡錘車、そして太刀、鉄鏃等の鉄製品がある。土器類は、玄室入口付近に集中しており、敷石のない所に、須恵器蓋3点、短頸壺2点、土師器把手付椀1点がまとめて置かれてあった。これより少し離れて左側袖部コーナーには、須恵器蓋の破片が2個体分遺存していた。鉄製品は、玄室中央左側側壁寄りに主軸と並行に置かれ、太刀の周囲には、その他の鉄製品の破片が散在していた。また、奥壁寄りの右側側壁付近に鉄鏃2点と不明鉄製品があった。装身具類は、太刀の右側の玄室中央と土器群の周囲に散在していた。耳環は、4組8点が出土しているが、7点が玄室にあった。その内の1組が、太刀の近くでまとめて検出しており、埋葬時の位置を保っていると考えられるが、他の5組は散乱していた。玉類は、ガラス玉、ガラス小玉、トンボ玉、管玉、棗玉を玄室床面で検出しているが、紡



第21図 2号墳第1石室出土土器

錘車も含めてほとんどが玄室の手前半分に散在しており、玄室奥では検出されなかった。尚、玄室埋土、羨道埋土洗浄中にも多数のガラス玉、ガラス小玉が出土している。羨道では須恵器杯2点、土師器皿2点が柩石の手前に、須恵器高杯1点、甗1点、土師器把手付椀1点が破片で、羨道部入口付近の閉塞石の下から検出している。玄室床面の敷石は2重になっていたが、上の床面の敷石を除去し、下の敷石を検出する過程でも、棗玉やガラス玉を数点検出している。

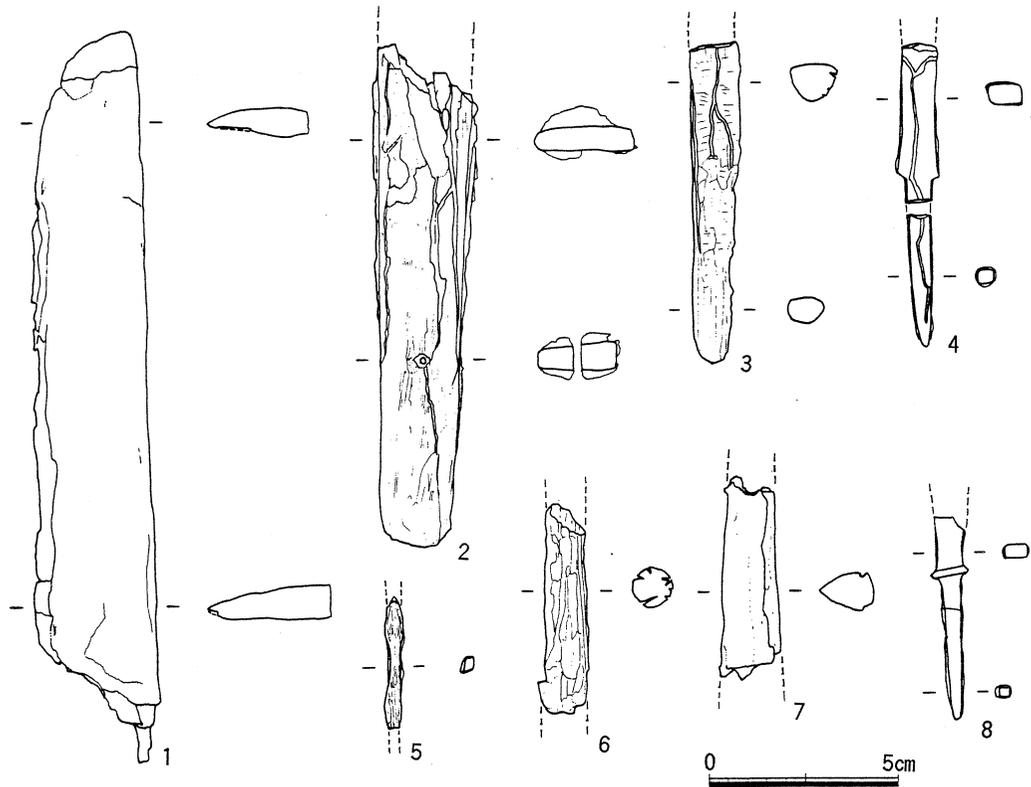
第一石室出土遺物

土器類 (第21図)

1～5、9・10・14が玄室出土、7・8・15・16が羨道出土、12・13・17が羨道入口付近出土土器である。この他、石室上部の埋土から6が出土している。12～17は須恵器で、蓋、杯、短頸壺、高杯、甗等がある。13～16は土師器椀で把手付のもの、そうでないものがある。

鉄製品 (第22・23図)

玄室床面から太刀2点、鉄鏃2点、釘1点とその他用途不明の鉄製品を出土している。



第22図 2号墳第1石室出土鉄製品

(第23図) は太刀で、全長59cm、幅約4cm、厚さ1cmを測る。刀方はほとんど欠落しているが、刀身、背とも長く直行する。断面は二等辺三角形を呈し、平棟である。鋒、茎とも欠損するが、石室上部の埋土から検出したもの(第22図-1)と同一個体の可能性がある。2は太刀の茎部で、木質残存。長さ13.3cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測り、茎尻に向かって細くなっている。径2mmの目釘穴が認められる。3は刀子茎で、刀身部は欠損している。長さ9.5cm、幅1.4cm、厚さ1.2cmを測る。4は鎌の茎で、長さ12.5cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm、関幅は1.2cmを測る。5は釘と考えられる。長さ3.4cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを測り、木質が残存する。6は不明鉄製品。長さ5.6cm、幅1.3cm、厚さ1.1cmを測り、断面は円形を呈する。7は刀子で、刀身の1部であろう。長さ5.4cm、幅1.5cm、厚さ1cmを測る。断面は二等辺三角形を呈する。(第24図) は有茎鉄鎌で、長さ10.6cm、幅0.8cm、厚さ1.1cmを測る。鎌身の断面はレンズ状を呈する。

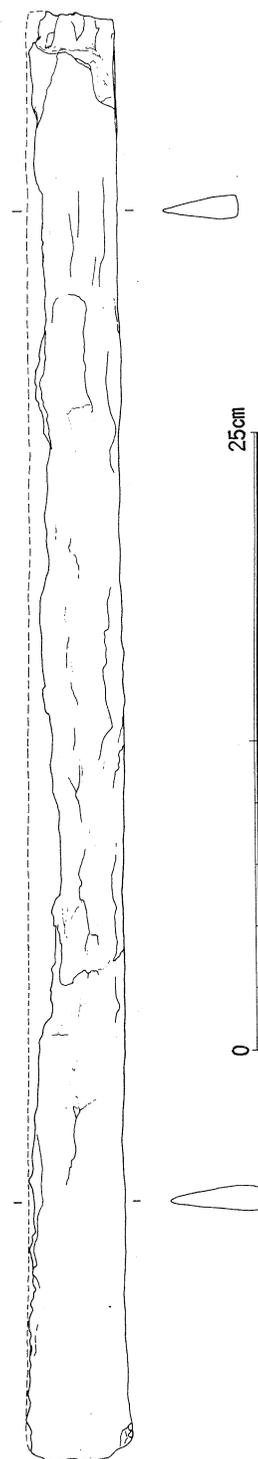
装身具類

耳環 (第25図)

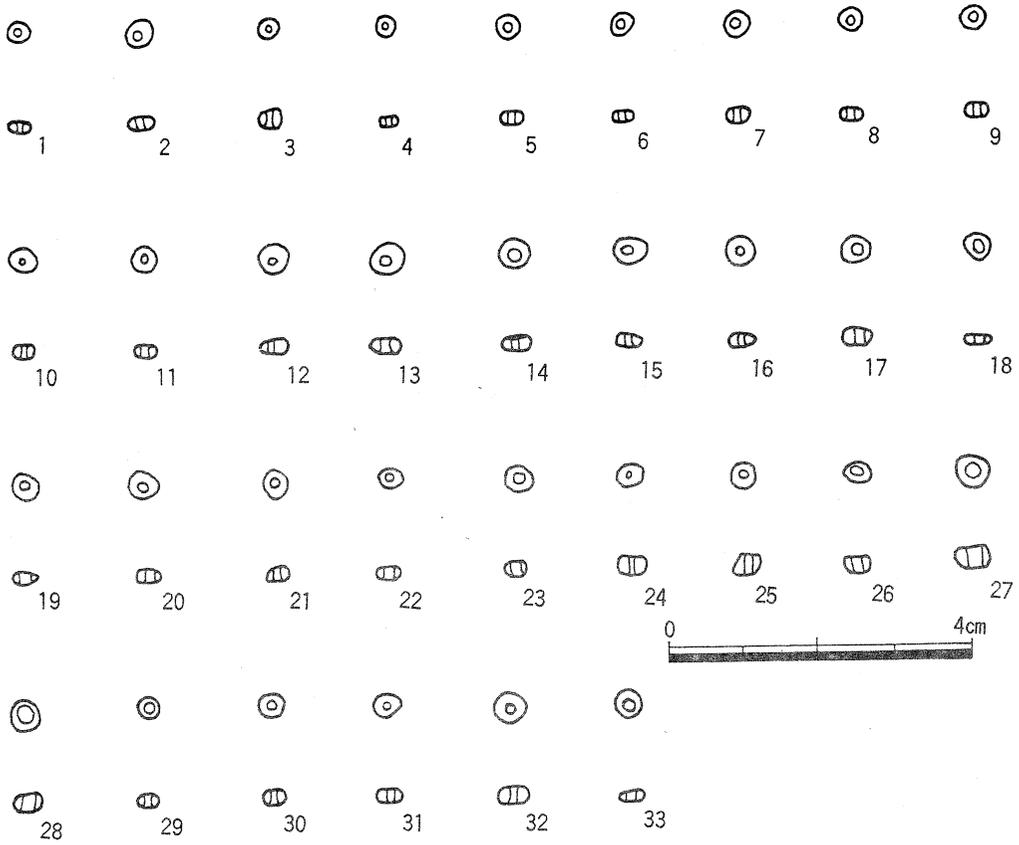
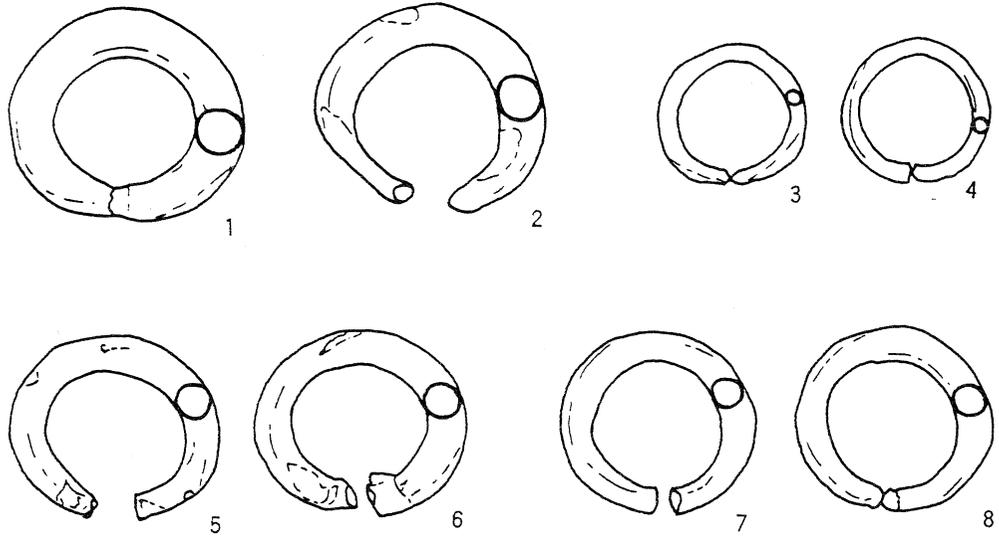
1～7が玄室床面出土、8のみが羨道出土である。大きさ、形状から推定すると、1・2、3・4、5・6、7・8がそれぞれセットになる。1・2、5～8は中実の銅胎に金箔を被せたものであるが、1・2は腐食が進行し、金箔はほとんど認められなかった。細身の3・7は、銅製ではなく鉄製のような。



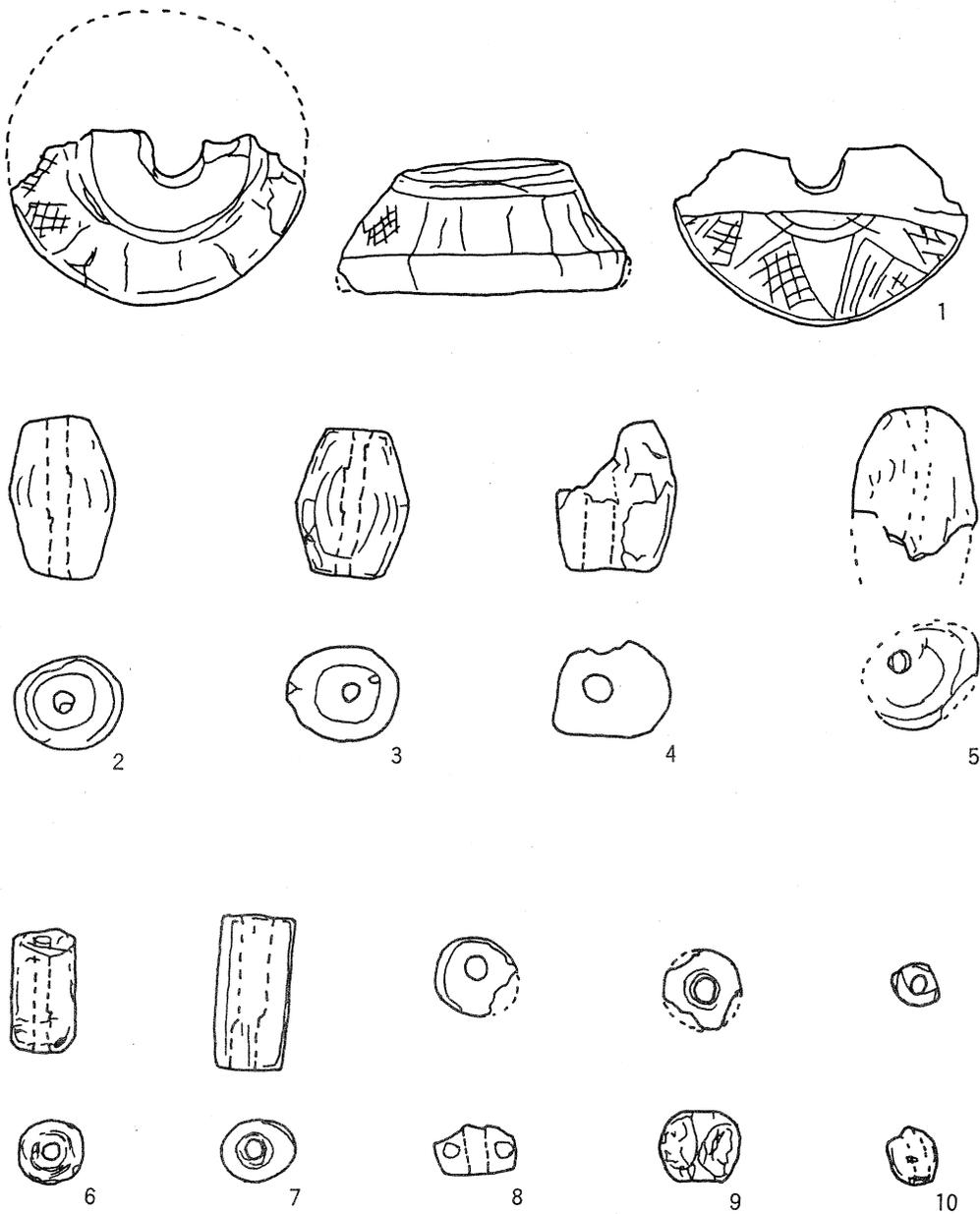
第24図 2号墳第1石室出土鉄鎌



第23図 2号墳第1石室出土太刀



第25图 2号墳第1石室出土耳環小玉



第26图 2号墳第1石室出土紡錘車、玉類

棗玉 (第26図)

2・3は炭化木(埋もれ木)製で、長さ2~2.2cm、径1.4~1.5cm、孔径2~2.2mmを測る。表面は丁寧に磨かれており、木目が認められる。4・5は琥珀製で、大半を欠くが、長さ3cm前後、径1.6cm程度の大きさと考えられる。孔径は約2mmを測る。琥珀製棗玉は、この他破片で約7個体分が出土している。

管玉 (第26図)

6はガラス製で、色調は水色を呈する。1部欠損しているが、長さ1.7cm、径0.9cm、孔径約2mmを測る。7は碧玉製で色調は明緑灰色を呈する。長さ2.1cm、径1cm、孔径は約2.8mmを測る。

トンボ玉・琥珀玉 (第26図)、ガラス玉、ガラス小玉 (第25・27図) 土玉 (第28図・第3表)

8・9はトンボ玉である。明緑灰色のガラスに、黄色のガラスを三方から貼り付けている。10は琥珀製の玉で、1個のみの出土である。ガラス玉は総数33個出土しており、濃紺色と緑色のものがある。ガラス小玉は総数33個出土しており、水色、黄色、紺色、緑色のものがある。法量については、第2・4表を参考にしていただきたい。

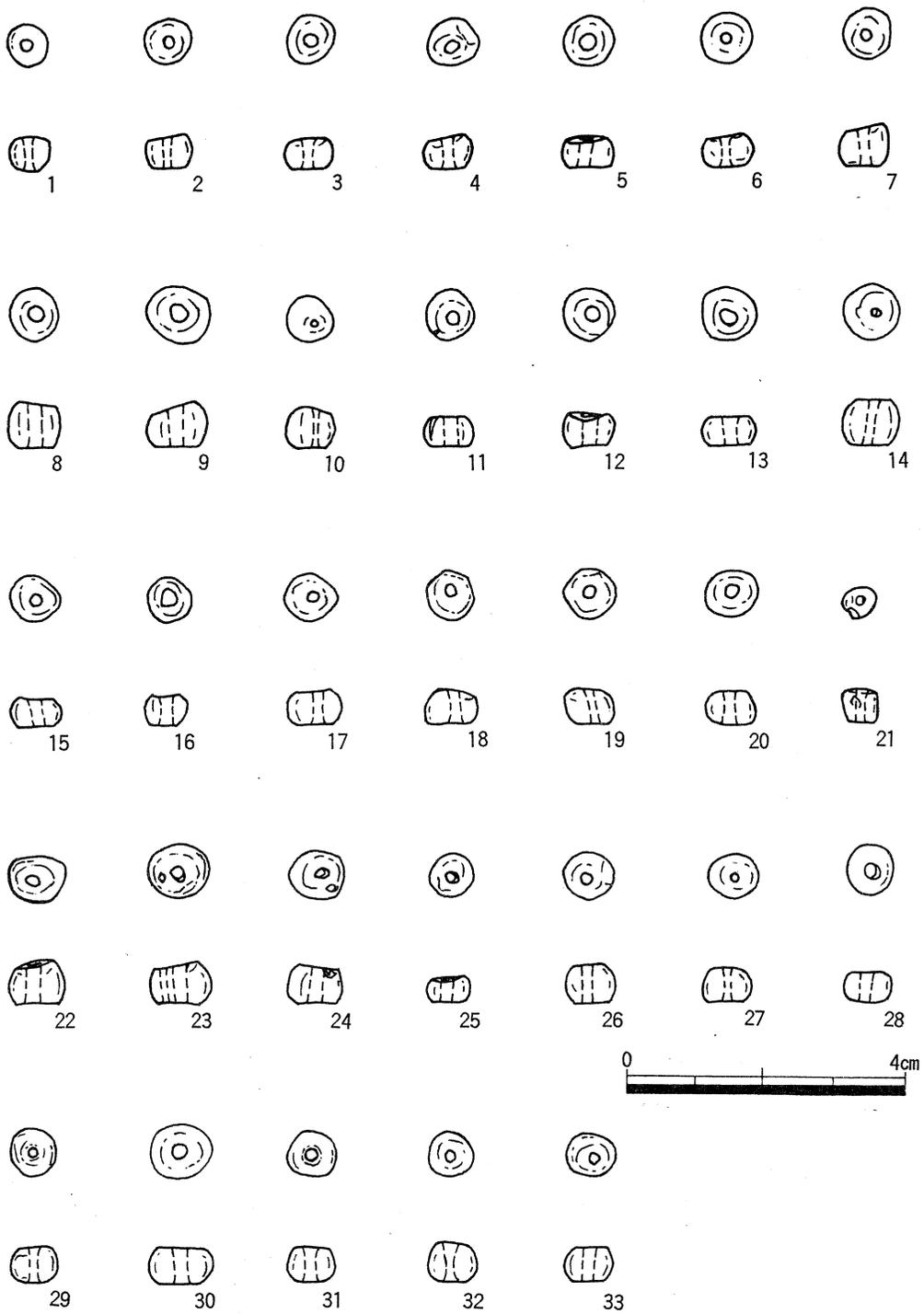
紡錘車 (第26図)

径約4cm、厚さ1.8cmを測る。滑石製で、表面に線刻が施されている。

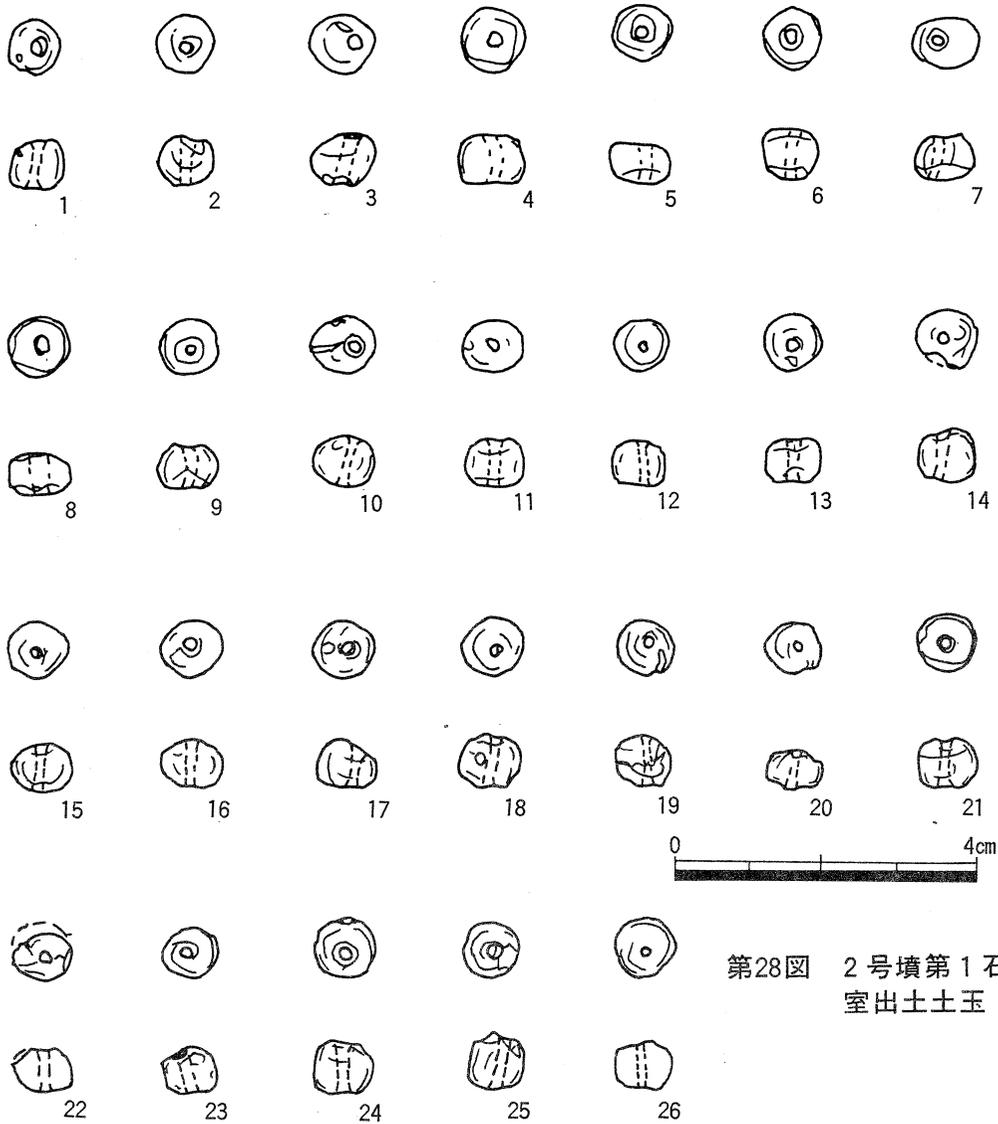
第2表 2号墳第1石室ガラス玉計測値

(単位ミリメートル)

番号	全長	直径	番号	全長	直径	番号	全長	直径
1	4.9	6.3	12	5.15	7.55	23	6.0	9.0
2	4.9	6.95	13	4.4	8.4	24	5.85	8.1
3	4.6	7.4	14	6.65	8.5	25	5.0	6.4
4	5.2	7.5	15	4.0	7.2	26	5.8	7.35
5	4.3	7.7	16	4.9	6.9	27	4.9	7.3
6	4.6	7.55	17	5.6	7.9	28	4.5	7.3
7	6.0	8.35	18	4.6	7.5	29	5.65	7.35
8	7.15	8.0	19	5.6	7.2	30	4.9	9.0
9	6.3	9.3	20	5.0	7.2	31	5.3	7.2
10	6.2	7.25	21	5.1	5.35	32	5.9	7.15
11	4.1	7.35	22	6.75	8.35	33	4.9	7.15



第27図 2号墳第1石室出土ガラス玉



第28図 2号墳第1石室出土土玉

第3表 2号墳第1石室土玉計測値

(単位ミリメートル)

番号	全長	直径	番号	全長	直径	番号	全長	直径
1	6.45	7.4	10	6.9	8.3	19	6.65	7.3
2	6.45	7.9	11	6.2	8.3	20	5.55	7.4
3	6.9	8.65	12	6.25	7.0	21	6.9	7.9
4	6.5	8.7	13	5.8	7.35	22	6.15	7.9
5	5.7	7.6	14	7.1	8.0	23	6.45	7.0
6	6.5	7.6	15	6.35	7.85	24	7.0	8.0
7	5.85	8.2	16	6.55	8.1	25	7.65	7.3
8	5.5	7.95	17	6.2	8.0	26	6.15	7.9
9	5.7	7.8	18	6.8	8.0			

第4表 2号墳第1石室小玉計測値

〈単位ミリメートル〉

番号	全長	直径	番号	全長	直径	番号	全長	直径
1	1.8	3.3	12	2.25	4.3	23	2.1	3.5
2	2.3	3.85	13	2.25	4.75	24	2.35	3.55
3	2.7	3.3	14	2.8	4.35	25	2.8	3.5
4	1.65	2.8	15	2.1	4.1	26	2.3	3.7
5	1.8	3.4	16	2.0	3.6	27	2.95	4.75
6	1.8	3.4	17	2.4	4.1	28	2.1	4.2
7	2.45	3.55	18	1.7	3.6	29	2.0	3.4
8	1.9	3.25	19	1.9	3.9	30	2.0	3.3
9	2.3	3.65	20	2.0	3.7	31	1.85	3.75
10	2.0	3.55	21	2.1	3.5	32	2.5	4.7
11	2.05	3.65	22	1.9	3.5	33	1.7	3.75

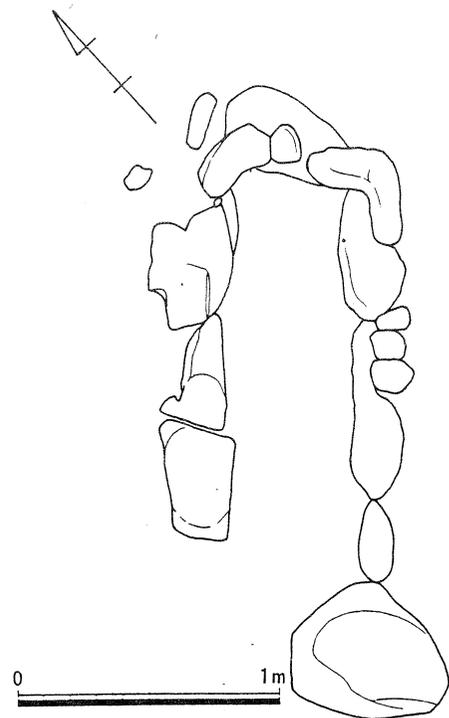
第2石室（第29・30図）

第2石室は、第1石室より南東へ40mの距離で検出している。主軸はN42°Wで石室の規模は、長さ1.7m、幅0.5m、50～60cm大の花崗岩の石材によって四方を囲むようになっていた。石材は1段のみで、天井石が存在していたらしいが、検出時には認められなかった。石室内は土砂で埋まっていたが、床面まで掘り下げたところ、須恵器埴瓶が1点、石に立て掛けるように置かれた状態で出土していた。石室内から出土したのは、この1点のみで、また、人骨も遺存していなかった。石室内埋土はすべて洗浄したが、玉類等の遺物は検出されなかった。

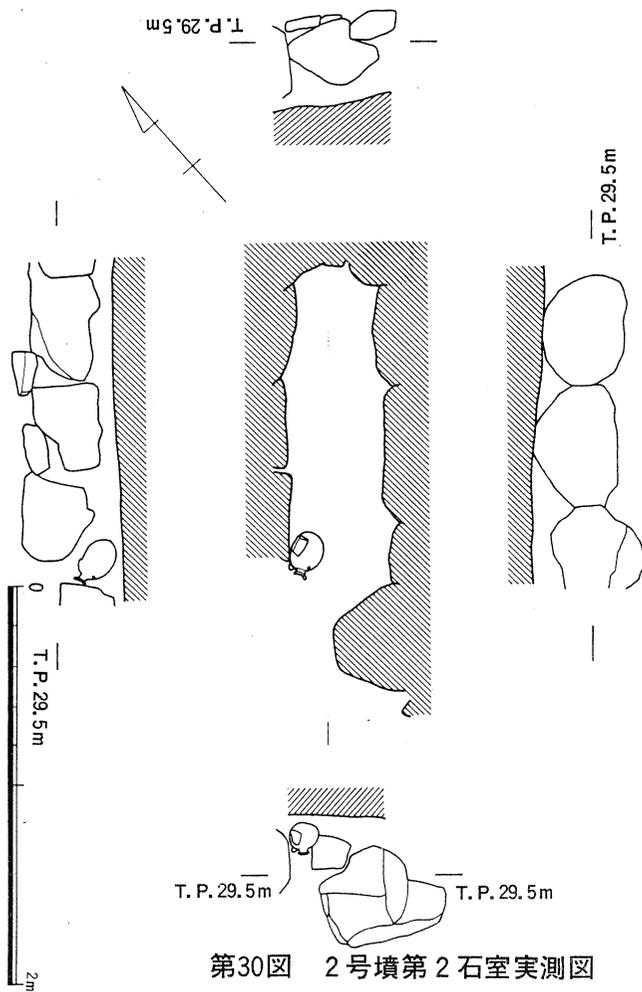
出土遺物

埴瓶（第31図・遺物観察表）

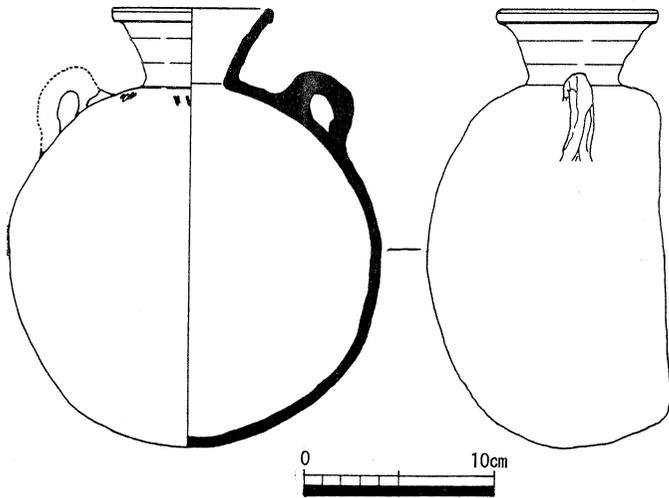
第2石室より出土した唯一の遺物で、比較的大型の須恵器埴瓶である。



第29図 2号墳第2石室平面図



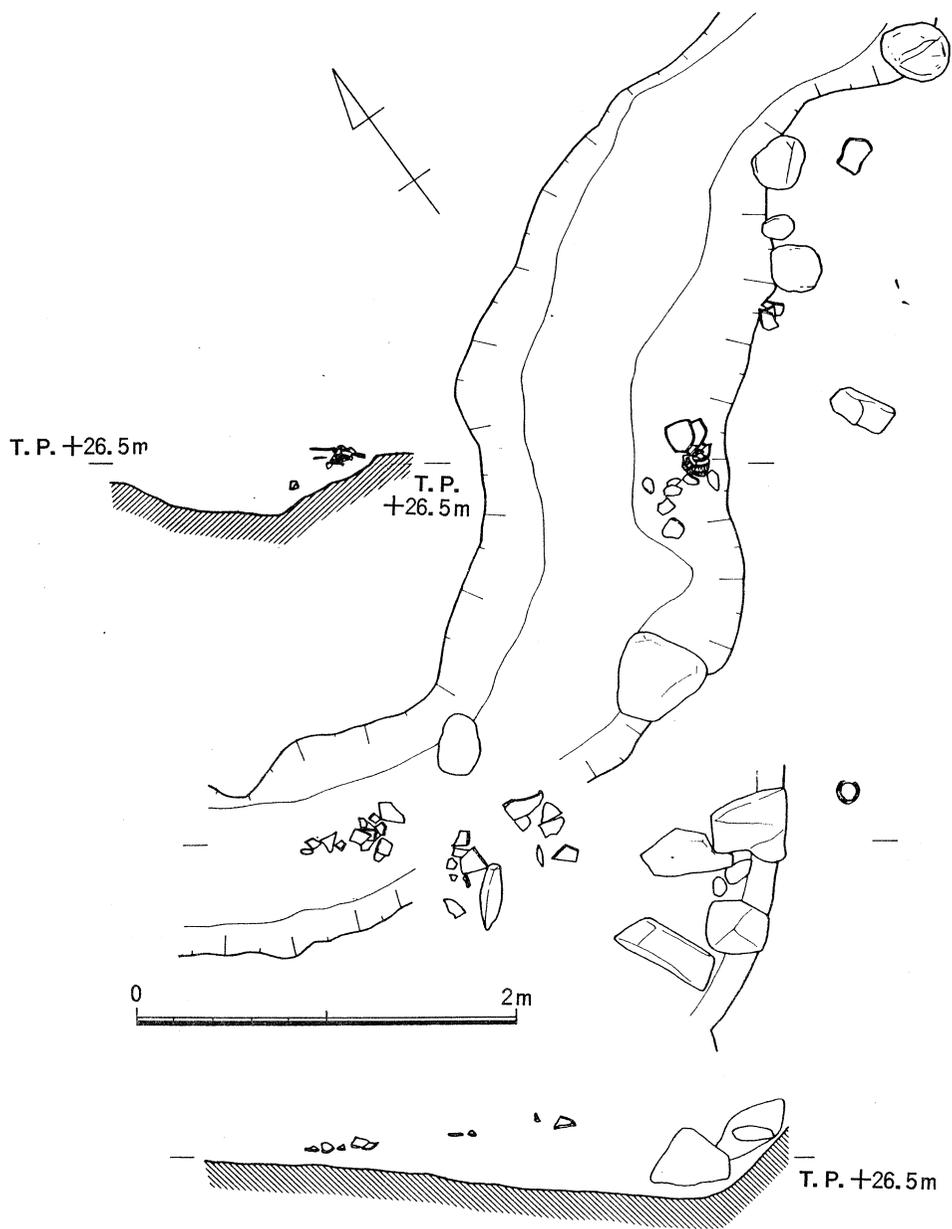
第30図 2号墳第2石室実測図



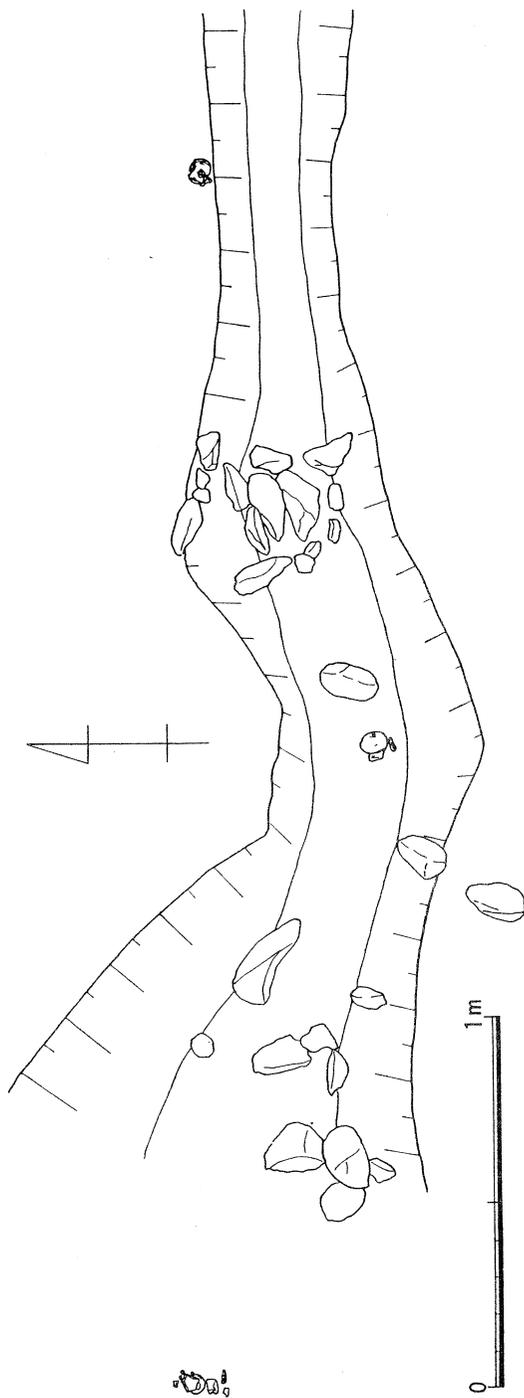
第31図 2号墳第2石室出土土器

周溝（第32・33図）

第1石室と第2石室を取り囲むようにして、円弧状に回る溝を検出している。2号墳の周溝と考えられ、幅0.6～2.2m、深さ9～41cmを測り、断面は緩やかなU字状を呈している。周溝は地山の土である黒褐色砂混じり土まで掘り込まれており、埋土は暗褐色砂混じり土で、砂が多く堆積している部分も認められた。周溝は、斜面上部の1・2・3区から下部の8区にかけて検出しているが、第1石室開口部から4mの地点で途絶えていたことから、斜面上部に限定して掘り込まれていたものと考えられる。墳丘の土は既に流失していたが、周溝から推定すると、2号墳は径15m程度の円墳であったと考えられる。周溝からは須恵器広口壺、壺、杯、高杯、甗の他、大甕と推定される破片が出土している。広口壺は、2区の周溝肩で破碎された状態で出土しており、そこから約2mの距離に大甕の破片が散乱していた。8区では、周溝底より完形の壺が、周溝縁辺部から高杯が出土している。甗は周溝



第32図 2号墳周溝 土器出土状況図(1)



第33図 2号墳周溝土器出土状況図(2)

が途絶えた地点、さらに少し離れた前庭部ともいふべき場所で壺が出土している。これらの土器は墓前において、何らかの儀礼的、祭祀的行為を執り行うなかで、使用されたものであろう。

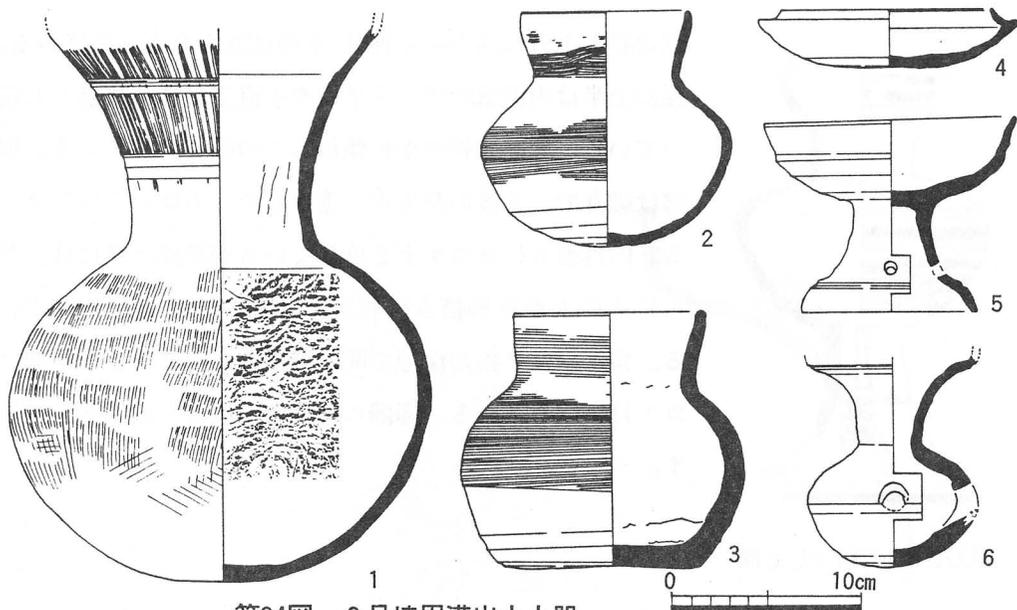
出土遺物 (第34図)

1は広口壺、2・3が壺、4が杯、5が高杯、6が甕である。いずれも完形に近い状態で出土した。その他図化し得なかったが、大甕の破片が出土している。

その他の遺構遺物

SK-6 (第35・36図)

2区で検出している平面不定形の土坑である。検出規模は1.1×1.3mで、深さは後世の削平の影響を受けているため17cmと浅い。遺物は、土坑肩より須恵器蓋1と土師器片が、すぐ近くで蓋2と高杯が出土している。

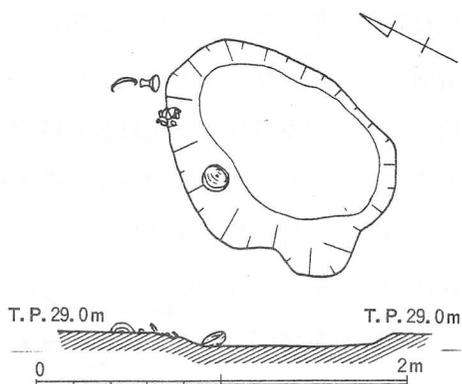


第34図 2号墳周溝出土土器

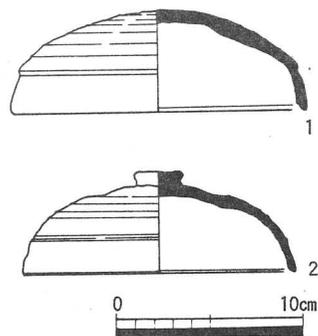
台付壺 (第37図)、須恵器大甕 (第38・39図)

13区では、須恵器大甕が単独で出土している。出土状況は、口縁部をやや斜め下にした状態で、その周りに体部がまともって出土した。破片は広範囲に散乱しておらず、ここに置かれていたと考えられる。台付壺は12区で出土している。

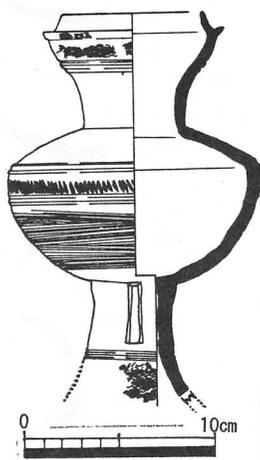
大甕は口径約16cm、器高46.2cmを測る。口縁から肩部にかけて、自然釉が付着する。口縁部は内面がやや内傾しながら直立し、端部は肥厚し、内側へ傾斜する面をもって終わる。体部は肩部の張りは弱く、底部は丸底である。肩部に4個の把手が付く。外面は、口縁部がヨコナデを施した後、上からカキ目を施し、体部は肩部から底部までは格子目タタキを施している。内面は口縁部がヨコナデ、体部には同心円タタキが認められる。台付壺は、裾部を欠くが、口径7.3cm、現存器高21cmを測る。立ち上がりは内反し、端部はやや丸みをもって終わる。受



第35図 SK-6 土器出土状況図



第36図 SK-6 出土土器

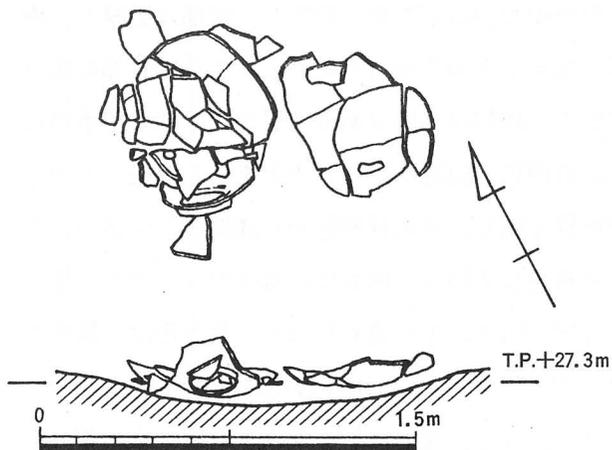


第37図 12区出土土器

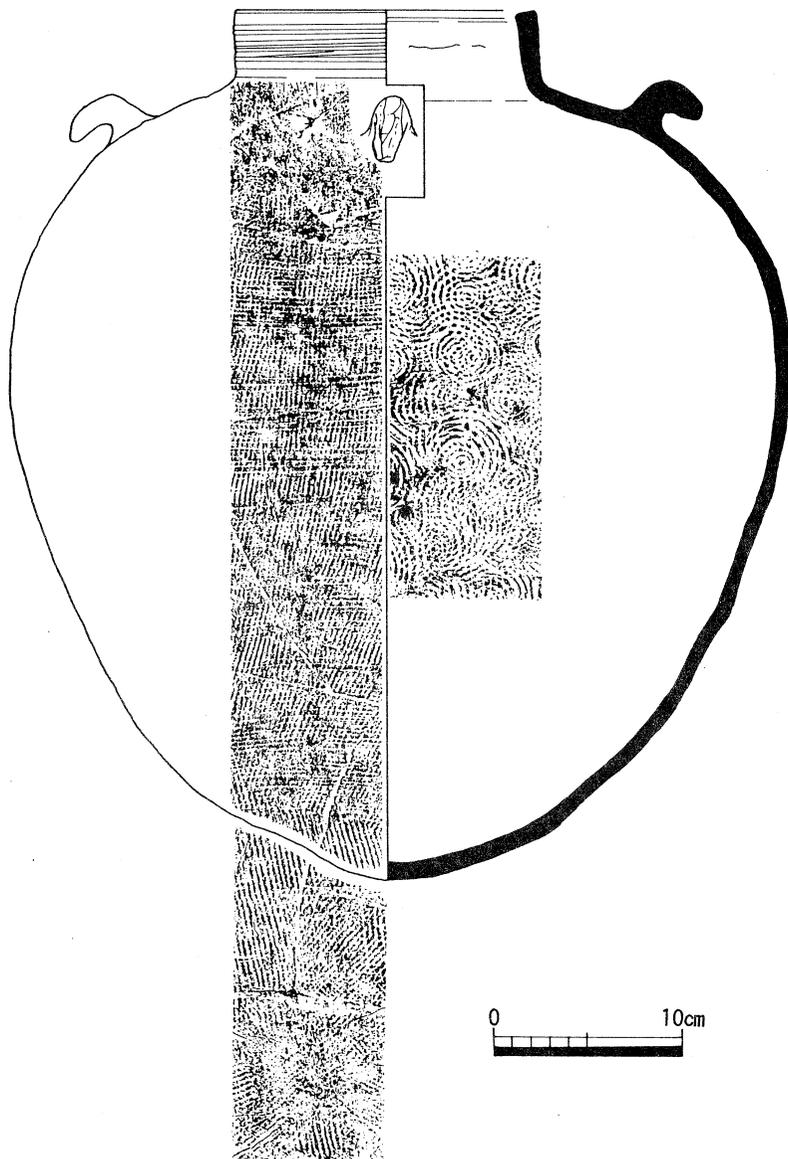
部は斜め上方に向かって伸び、端部は丸みをもって終わる。頸部上半は内湾気味で、下半はやや直立気味に体部へと続いている。肩部は緩やかに傾斜しつつ張り出している。脚部は細身で、1段の長方形の透かしを3方向から施している。内外面共にヨコナデを施しているが頸部上半には、さらにその上から櫛描き波状文と2条の沈線を巡らしている。体部には2条の沈線の間には櫛描き烈点文を、下半部にカキ目を施している。脚部には2条の沈線と波状文を巡らす。

(3)奈良時代～平安時代 (第40・41図)

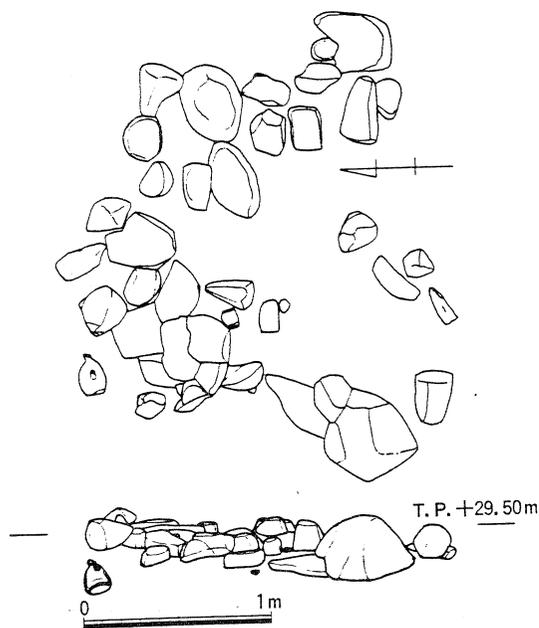
遺構としては目立ったものはないが、2号墳の周溝上面で石の集積が認められ、そこから白瓷製の片把手付瓶1と須恵質の壺の口縁部2が出土している。瓶の内部には人骨は確認できなかったが、蔵骨器であると考えられる。周溝が完全に埋まった段階で置かれたらしく、いずれも10～11世紀時代のものであろう。1は口縁部と把手が欠損しているが現存器高18.2cmを測る。頸部は細く、肩部はあまり張らないで緩やかな丸みを帯びて底部へと続く。肩部から体部にかけて緑釉を施す。2は口縁部のみが残存。復元口径2.8cmを測る。頸部は斜め上方に向かって伸び、口縁部は屈曲した後短く外反し、外側へ傾斜する丸みを帯びた面を持つ。口縁端部の内部に自然釉が付着する。



第38図 A-13区土器出土状況図



第39图 13区出土土器



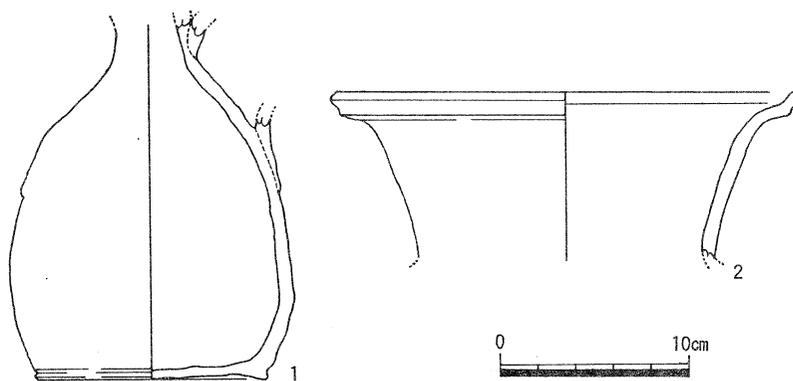
第40図 2号墳周溝上面土器出土状況図

(4)中世～近世 (第42図)

中世から近世の遺構としては、杭列、溝、段状遺構、集石遺構の他、井戸、土坑、ピット、礎石等を検出している。

杭列

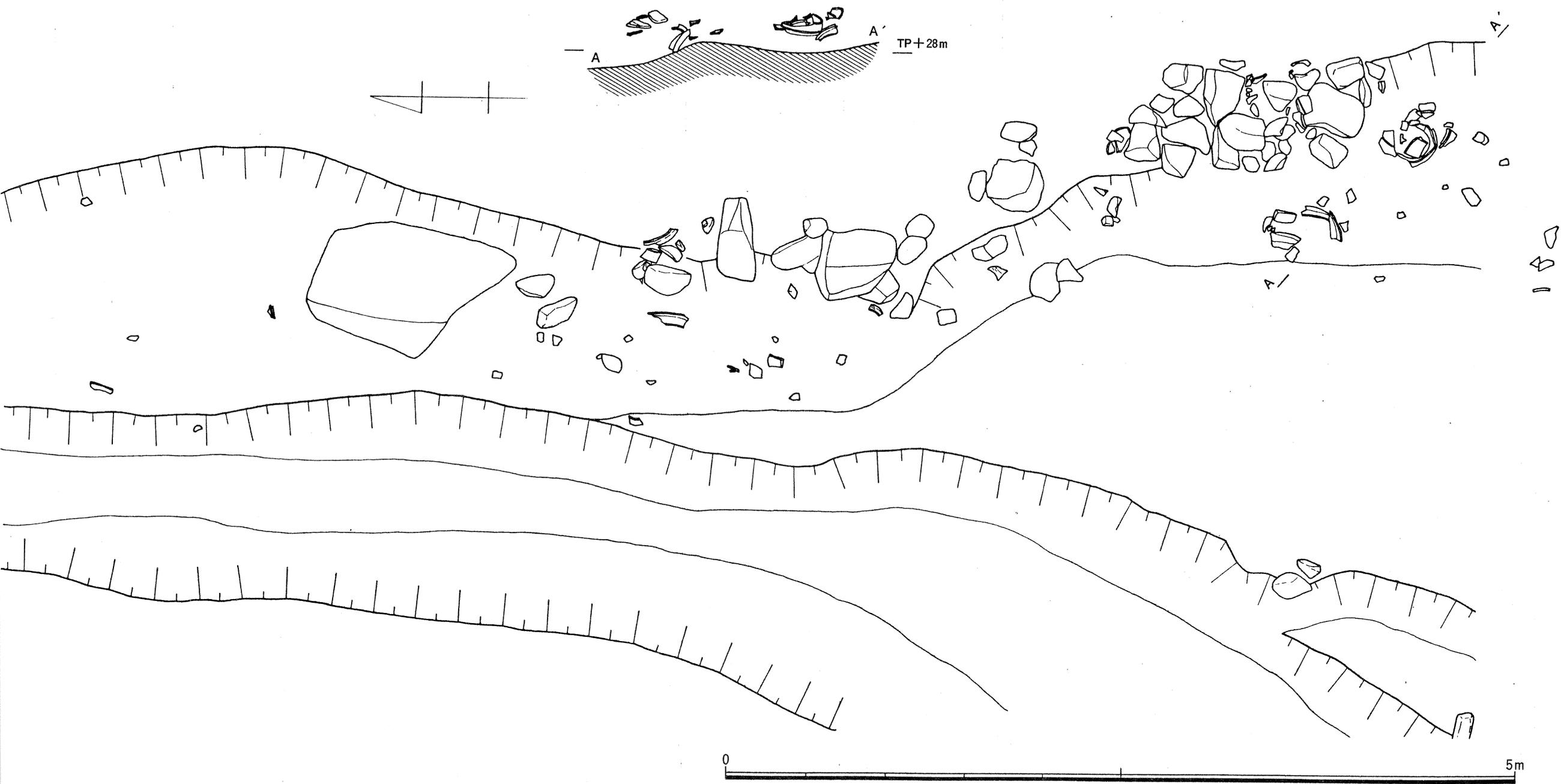
7～11区と12～14区で検出しており、北東から南西方向に走る。7～11区では杭列に並行して段状遺構-1、SD-3・4が走り、6区では杭と共に集石遺構-4を検出している。12～14区ではSD-1・2が並行して走る。傾斜地に打ち込まれた土留め用の杭と考えられる。



第41図 2号墳周溝上面出土土器

溝 (第43図)

溝は合計4条を検出しているが、そのうちSD-1～4までが杭列と並行して走る。4条とも検出幅は0.5m前後、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色砂質土で、遺物は出土していない。7～9区ではSD-5を検出している。幅1.1～1.7m、深さ0.9mを測るが、9区では徐々に浅くなり途絶えている。埋土は黄褐色砂質土で、溝内より瓦質羽釜、三足が出土している。



SD-5・段状遺構土器出土状況図

段状遺構 (第44~47図)

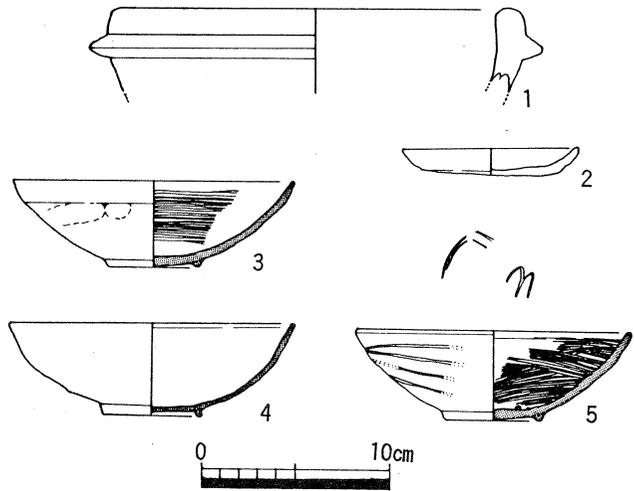
段状遺構には、7~11区で杭列、SD-3・4と平行して走る段状遺構と7・8区で南北方向に走る段状遺構-2、8・9区で北東から南西方向に走る段状遺構-3がある。段状遺構-2・3は、8区で杭列、SD-3・4、段状遺構-1を切っており、西側へハの字状に開く地形を形成している。段状遺構-2・3には、杭列が認められなかったが、斜面上からは瓦器碗、滑石製石鍋、瓦質羽釜、三足が出土している。

集石遺構

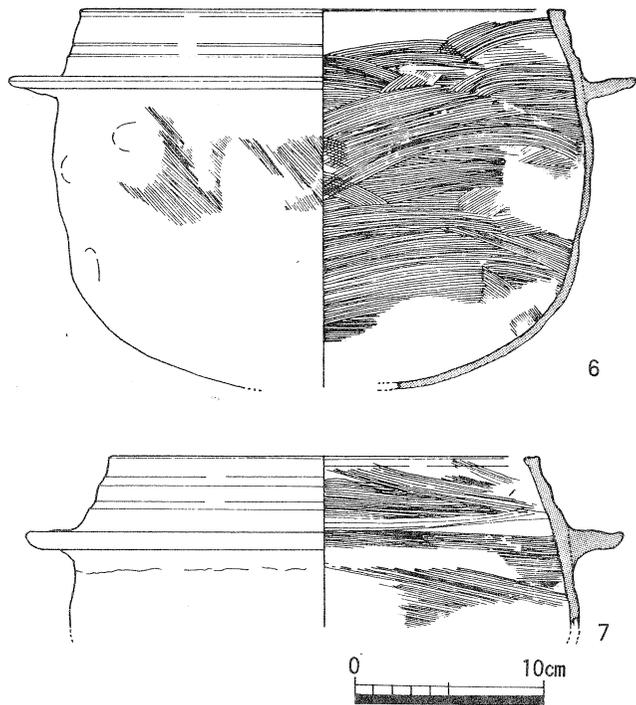
調査を進めていく課程において、調査区全域でも花崗岩石が出土するが自然に散在するものではなく、人為的に石を集めたと考えられるものがあり、集石遺構とした。

集石遺構-1 (第48図)

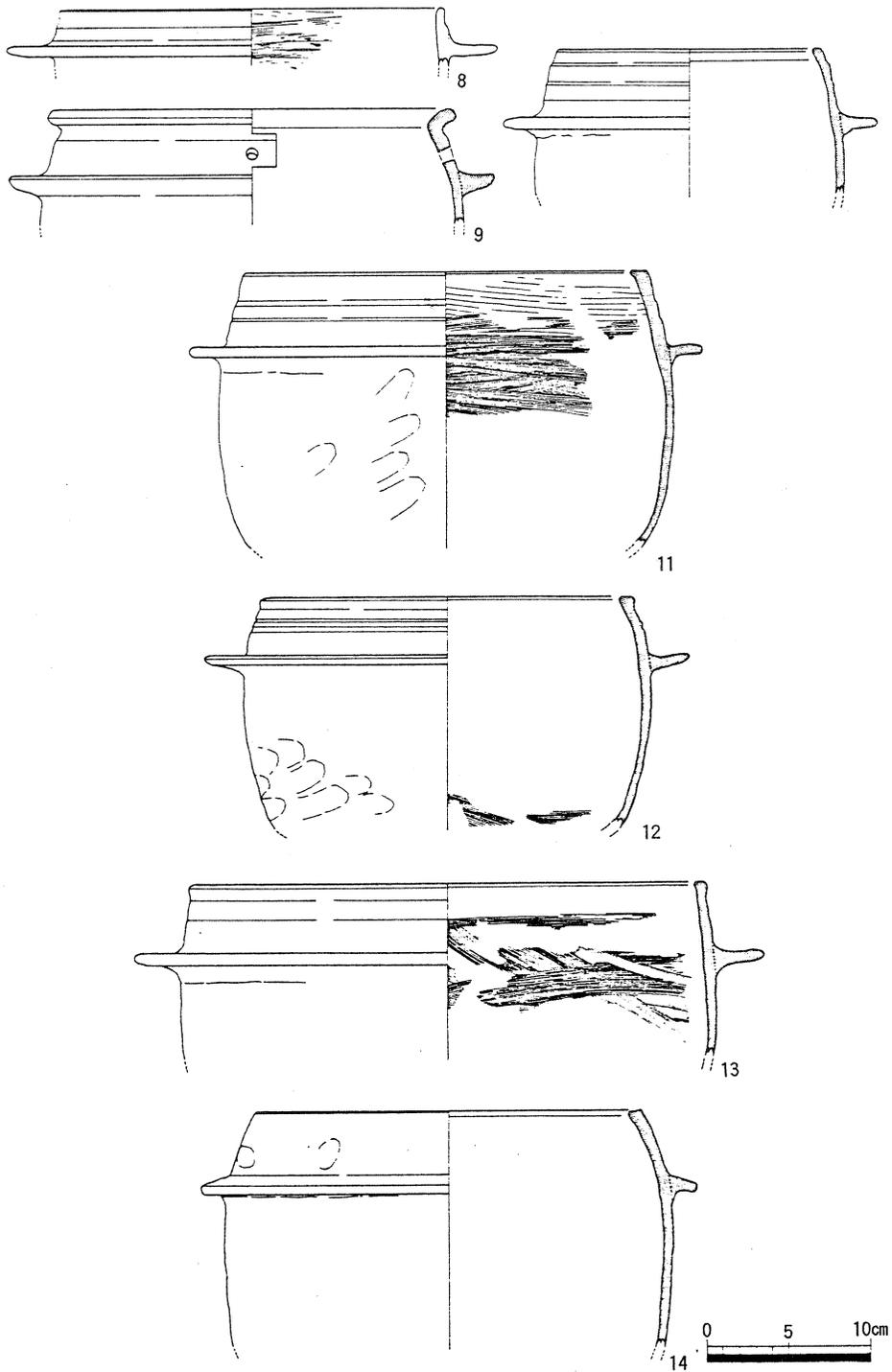
9区のSD-5内で検出している。平面の規模は約1.7mの円形で、15~40cm大の石を約40cmの高さまで積んでいる。遺構の性格は不明である。



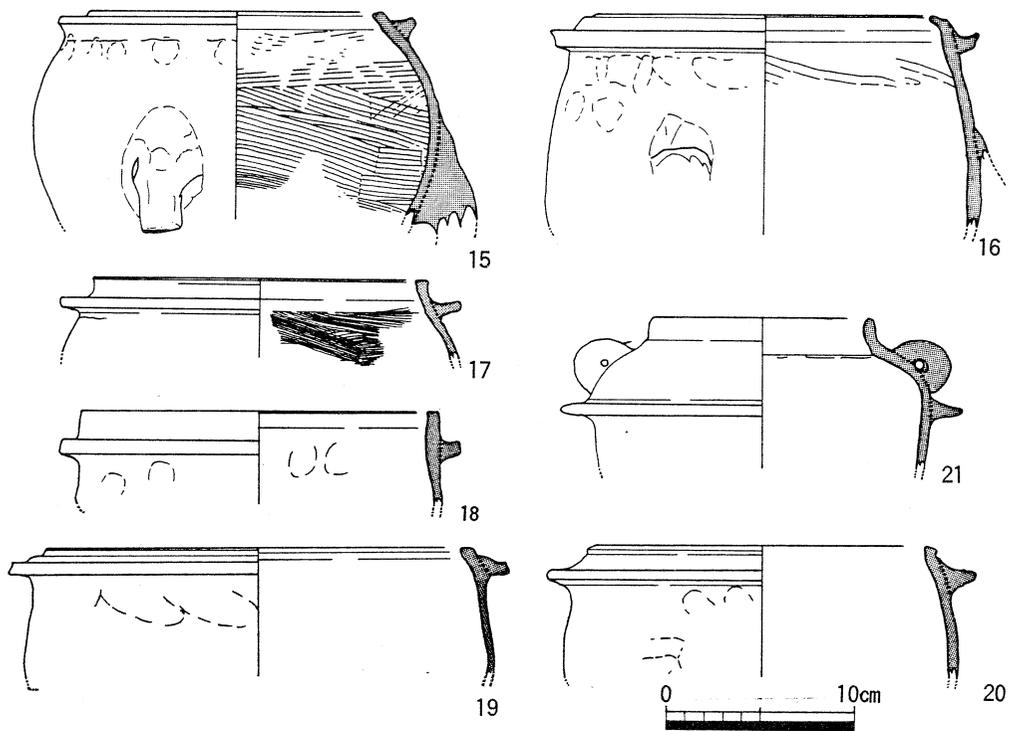
第44図 SD-5 段状遺構出土土器(1)



第45図 SD-5 段状遺構出土土器(2)



第46図 SD-5段状遺構出土土器

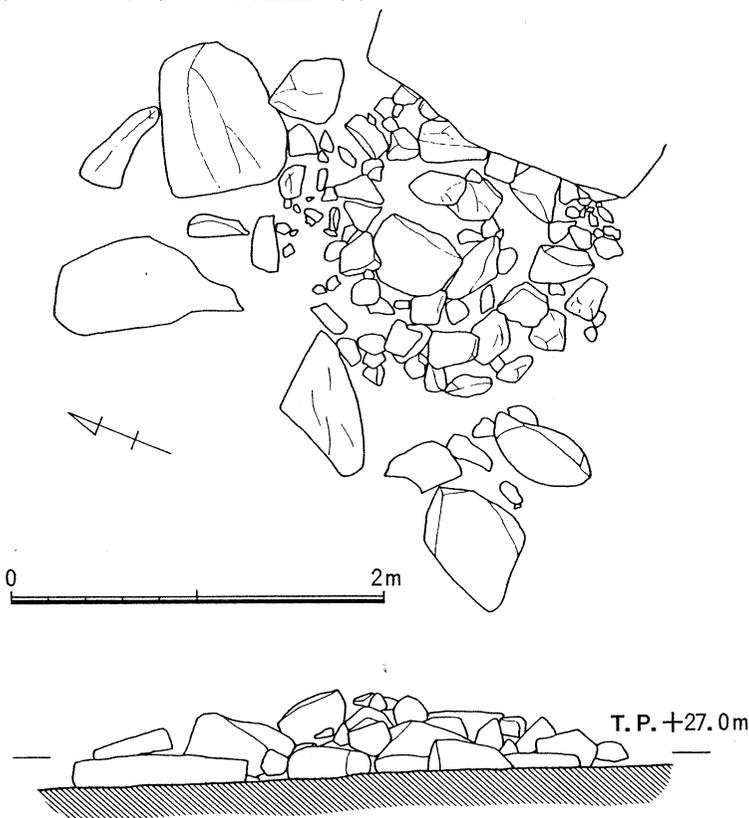


第47図 SD-5段状遺構出土土器(4)

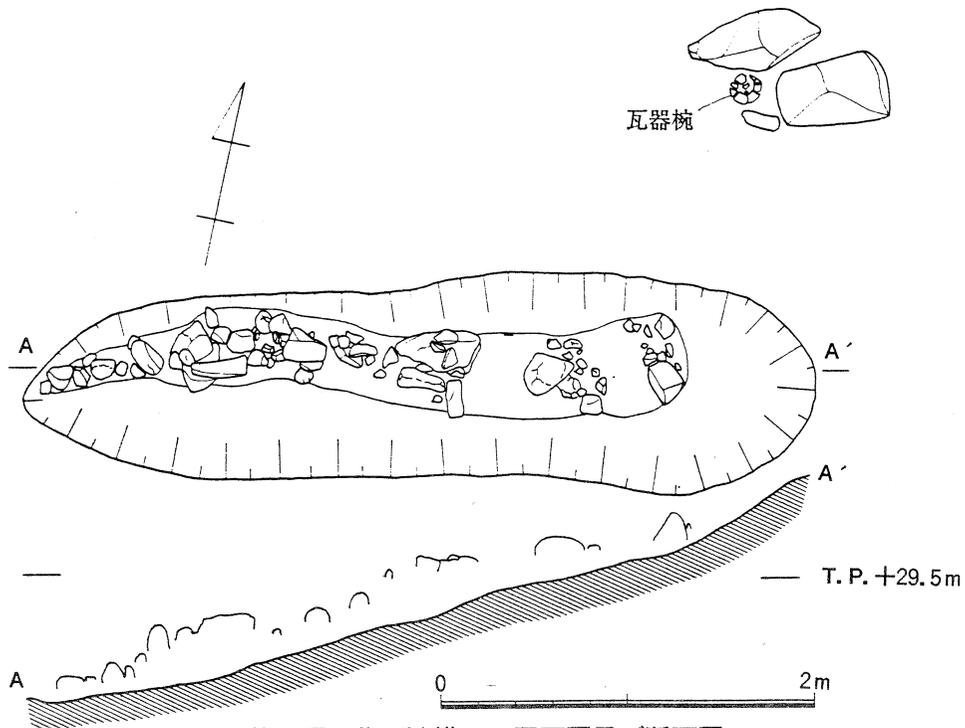
集石遺構-3

(第49図)

3～8区の斜面上で検出している。10～40cm大の石が、1×4.2mの掘り形内に集中していた。どのような性格のものか不明である。近くで50cm大の石の間から瓦器碗が底部を上にして伏せた状態で出土している。



第48図 集石遺構-1 平面図及び立面図



第49図 集石遺構-3 平面図及び断面図

集石遺構-4 (第50図)

5・6区で検出している。1mを越える比較的大型の石が多い。南側断面を観察した限りでは、さらに南の調査区外へ続くものと考えられる。同時に杭列を検出している。

集石遺構-5

13区で検出している。1.5×2mの範囲で10~50cm大の石を40cmの高さに積んでいる。

SE-1 (第51・52図)

3区で検出している素掘りの井戸である。平面径1.9mの円形で、深さは0.45mを測る。底では瓦器椀が内面を上に向けた状態で出土している。瓦器椀は口径15.7cm、器高5.9cmを測る。器壁は厚手で、内湾しながら上方へ伸びる。口縁部はやや肥厚し、1条の沈線を巡らす。底部には断面三角形の高台を貼り付ける。外面はナデの後、上半部1/2に丁寧なヘラミガキを施す。内面は口縁部から見込みにかけて緻密なヘラミガキを施し、感覚の狭いジグザグ平行線状の暗文が認められる。

SE-2 (第53図)

2区で検出している平面円形の素掘りの井戸である。検出規模は0.9×1m、深さは0.5m測る。底には曲物が置かれており、傍らには7~30cmの石が数個置かれてあった。



第50図 集石遺構-4、杭列 平面図及び立面図

SE-3

2区で検出しているが、後世の削平のため上部は消失していた。曲物のみを検出している。

礎石 (第55図)

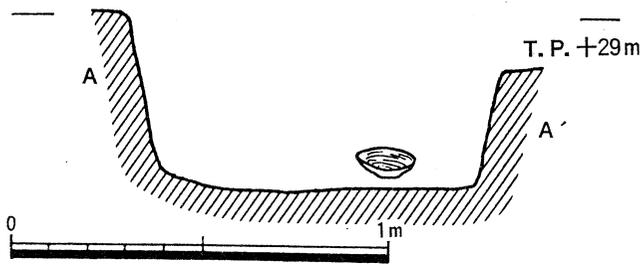
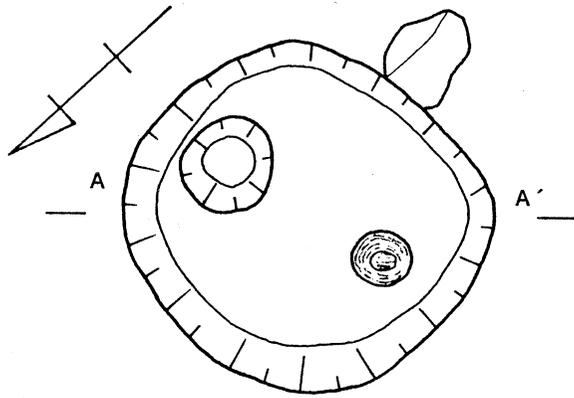
10区で検出している。1辺45cm程度の正方形に近い花崗岩の石2個を1.9cmの間隔をおいて検出している。石は2個のみで建物には復元できなかったが礎石のようである。石と石の間には炭の混じる焼土が認められた。

土坑・ピット

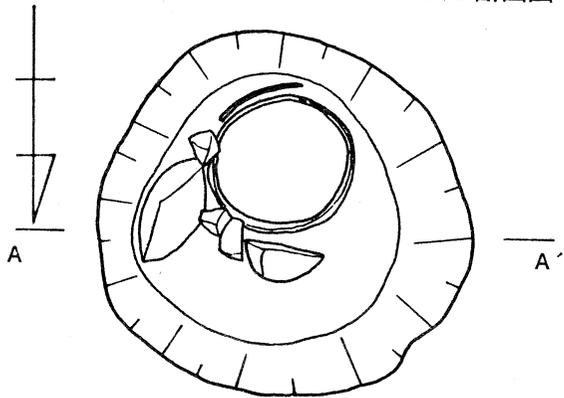
9~11区で土坑、ピットを検出しているが遺物は出土していない。

銅銭 (第54図)

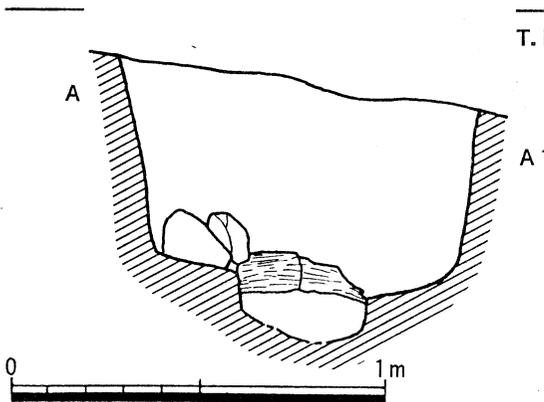
7区では銅銭が2枚遺物包含層中から出土しているが、1枚は腐食が激しく文字は読み



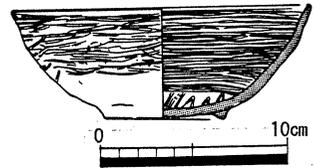
第51図 SE-1 平面図及び断面図



T.P. +30m



第53図 SE-2 平面図及び断面図

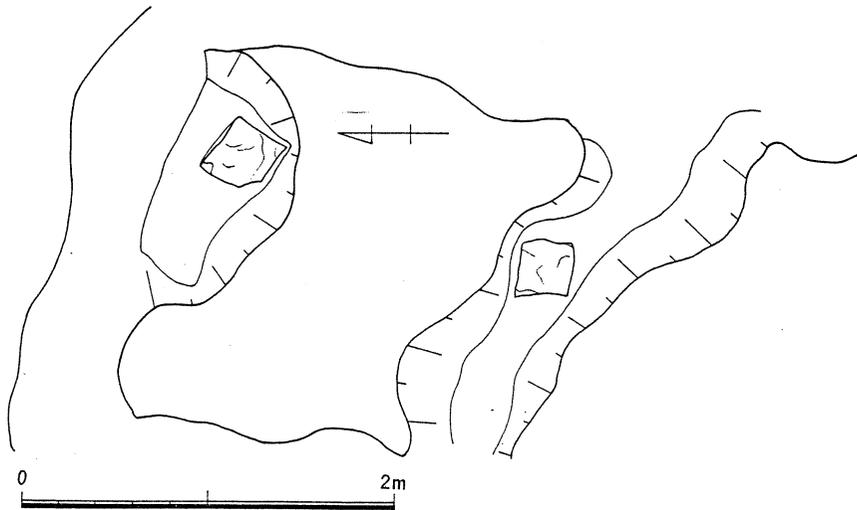


第52図 SE-1 出土土器

取れないが、もう1枚は辛うじて「熙寧元宝」と判読できる。熙寧元宝は、宋代（1068）の初鑄で、日本へは平安時代以降輸入されている。近世になると国内でも模倣銭が多量に造られ全国に流通した。出土したものは径2.3cm、文字は篆書体で順読（右回りに読む）である。字体から判断すると、模倣銭ではなく基本銭（実際に輸入されたもの）であろう。



第54図 7区出土銅銭

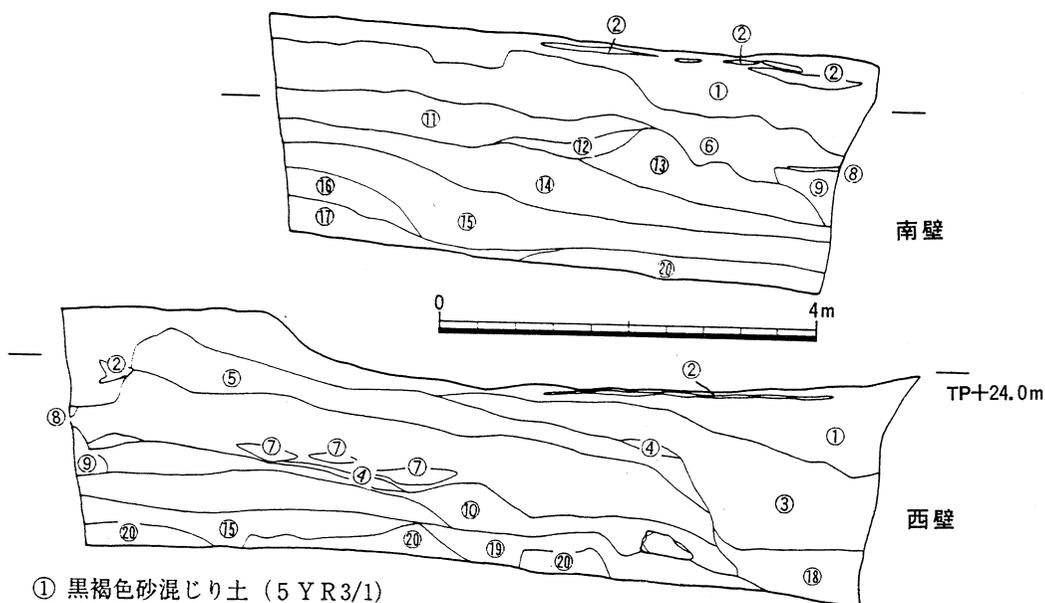


第55図 礎石平面図

B区

1. 層位 (第56図)

B区は、A区と同一尾根上に位置し、調査前は東から西への緩やかな傾斜地で、標高は約25mを測る。断面図をみると、原地形は南東から北西への傾斜を成していたことがわかる。西壁断面図の北側でみられる落ち込みは、当地を造成する以前に流れていた水路の肩の断面である。1層の黒褐色砂混じり土及び、西壁断面でみられる3層の灰オリーブ砂混じり粘質土は造成時の盛土で、3層は川の大半を埋めている。これを除去すると6層のにおい黄褐色砂混じり粘質土で、5層のにおい黄褐色砂混じり土が現われるが、5層は調査区の西側で部分的に堆積している層であり、その下に6層が堆積している。遺物は6層及び5層上面で杭列、ピットを検出しており、第1遺構面とした。6層を除去すると、調査区の南側では11層の暗褐色砂混じり土、12・13層の黒褐色砂レキ混じり粘質土が堆積しており、西側では4層の黒褐色砂混じり土、10層の暗灰黄色砂混じり土が堆積している。これらの層には、須恵器、埴輪片等が含まれている。これらの層を除去すると14層の暗青灰色砂レキ混じり粘質土が現われ、南東から北西に傾斜する斜面上に埴輪群、須恵器群を検出している。第2遺構面とした。14層を除去すると、以下最下層の20層である黄褐色砂レキ土まで遺物は含まれておらず、遺構も検出されなかった。20層は花崗岩質で硬くしまっており、当地域では地山と考えられている層である。



- | | |
|------------------------------|--|
| ① 黒褐色砂混じり土 (5 YR 3/1) | ⑫ 黒褐色砂レキ混じり粘質土 (7.5 YR 3/1) |
| ② 黄褐色砂レキ土 (10 YR 5/6) | ⑬ 黒褐色砂レキ混じり粘質土 (5 YR 2/2) |
| ③ 灰オリーブ砂混じり粘質土 (7.5 Y 4/2) | ⑭ 暗青灰色砂レキ混じり粘質土 (5 P B 3/1) |
| ④ 黒褐色砂混じり土 (10 Y R 5/1) | ⑮ 灰オリーブ色粘質土 (5 Y 5/2) |
| ⑤ にぶい黄褐色砂混じり土 (10 Y 4/3) | ⑯ にぶい黄褐色粘質土 (10 Y R 5/3) |
| ⑥ にぶい黄褐色砂混じり粘質土 (10 Y R 4/3) | ⑰ 暗青灰色粘質土 (5 B 4/1) |
| ⑦ 緑灰色砂混じり粘質土 (10 G Y 5/1) | ⑱ 灰オリーブ砂混じり粘質土 (7.5 Y 4/2) 黄褐色粘土のブロックを含む |
| ⑧ 暗赤褐色砂混じり土 (5 Y R 3/2) | ⑲ 黄褐色砂レキ土 (10 Y R 5/6) |
| ⑨ 暗緑灰色砂レキ混じり粘質土 (5 G 4/1) | |
| ⑩ 暗灰黄色砂混じり土 (2.5 Y 4/2) | |
| ⑪ 暗褐色砂混じり粘質土 (10 Y R 3/3) | |

第56図 B区西壁・南壁土層断面図

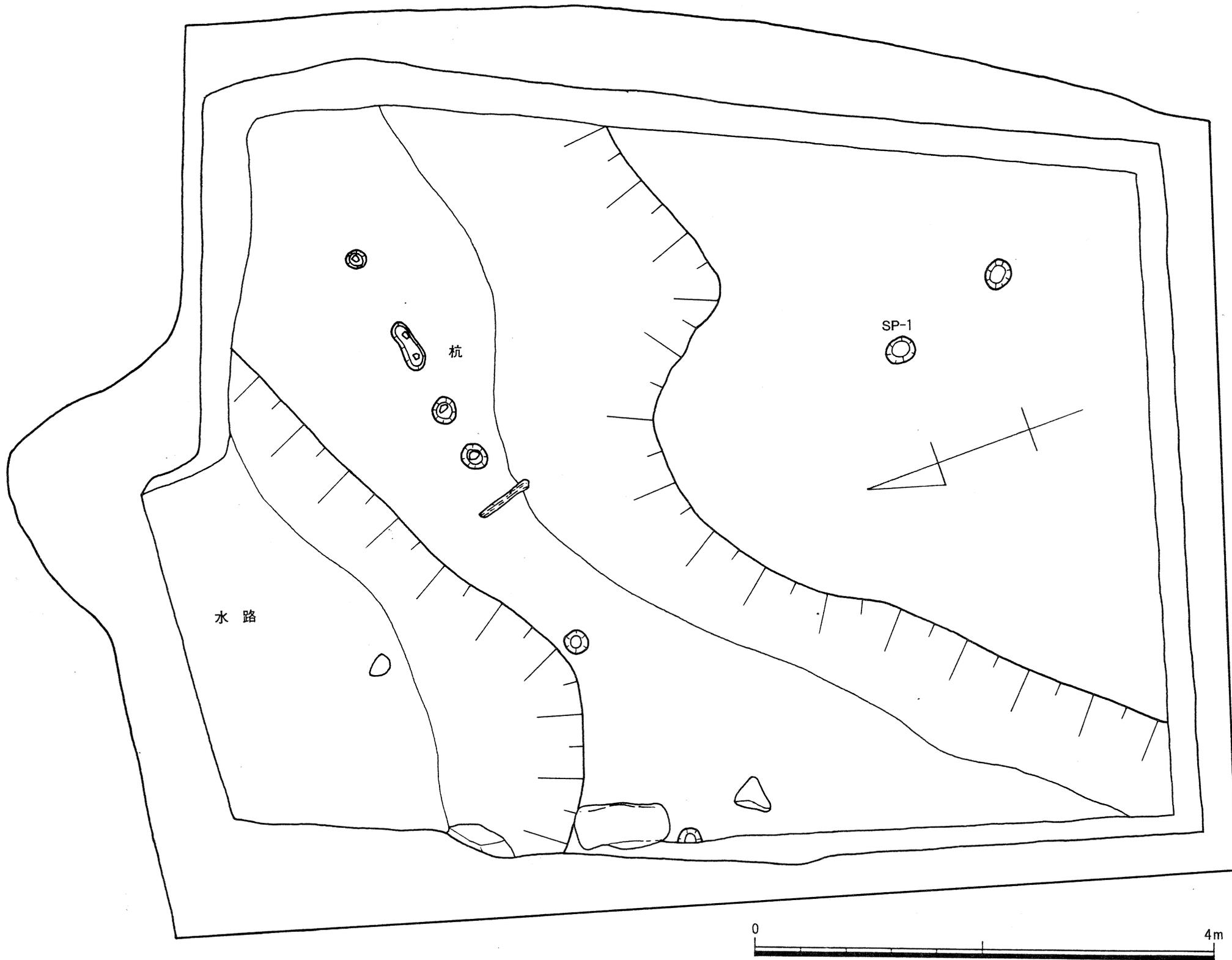
2. 遺構と遺物

第1遺構面 (第57図)

南から北へ傾斜する地形が現われ、杭列とピットを検出している。検出した斜面は3段より成り、上段でピットを2個、中段で杭列を検出している。最下段の落ち込みは盛土される以前に東から西に流れていた水路で、灰オリーブ砂混じり粘質土と灰オリーブ砂質土が堆積していた。杭列は、この水路の肩に沿って打ち込まれており、護岸用の杭と考えられる。上段で検出したピットはいずれも径30cm程度の円形を呈し、深さは約10cmを測る。遺物は出土していない。第1遺構面の時期であるが、杭自体の残りが良好で、しっかりしていることから、近世以降の新しい時期と考えられる。

第2遺構面 (第58・59図)

第2遺構面では第1遺構面と同様に、南から北へ傾斜する地形がそのまま残り、やはり段状の地形を形成するが、その斜面上で形象埴輪を含む、埴輪群及び須恵器群を検出している。埴輪群、須恵器群は約1.5×5mの範囲で検出しているが、そのうち破片が集中しているのは東半分で、円筒埴輪1体が倒壊した状態で、須恵器大甕1個体分の破片がまと



第57図 第1遺構面平面図



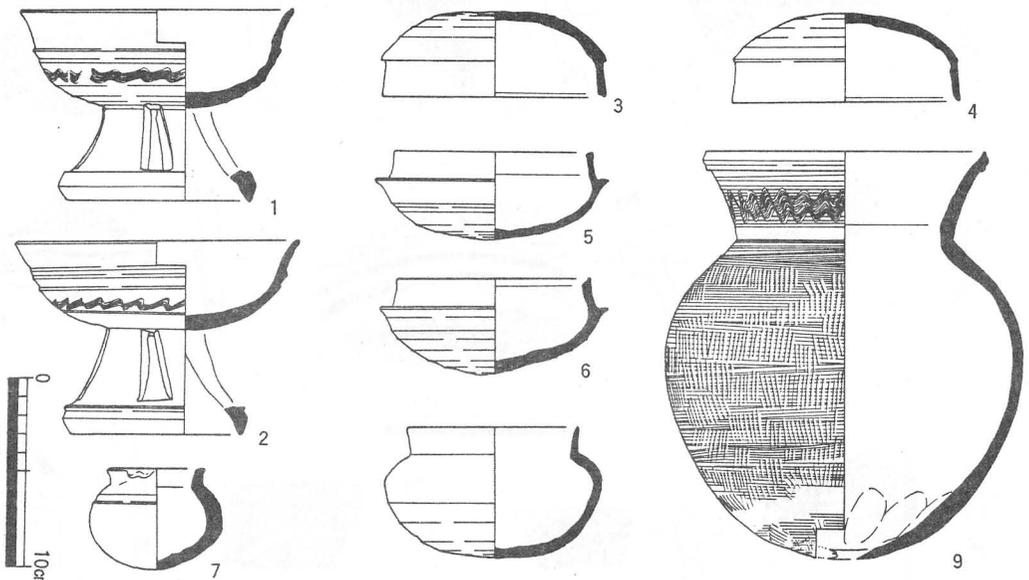
第58図 第2遺構面平面図

とまって出土している。埴輪群の下からは、須恵器蓋、杯、高杯が完形品で出土している。これらの遺物出土状況から推定すると、何らかの墓前祭祀に伴うものと考えられる。

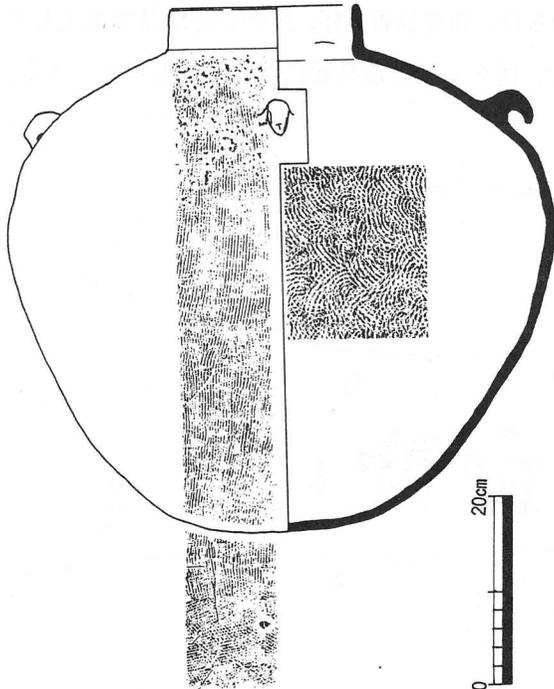
B区出土遺物



第59図 第2遺構面下層遺物出土状況図



第60図 第2遺構面下層出土土器



第61図 第2遺構面出土土器

もの（3・4・12）と斜め上方に開くものがあり、タガは低く、断面は不整台形状を呈する。すべての埴輪は外面がタテハケによる1次調整のみである。

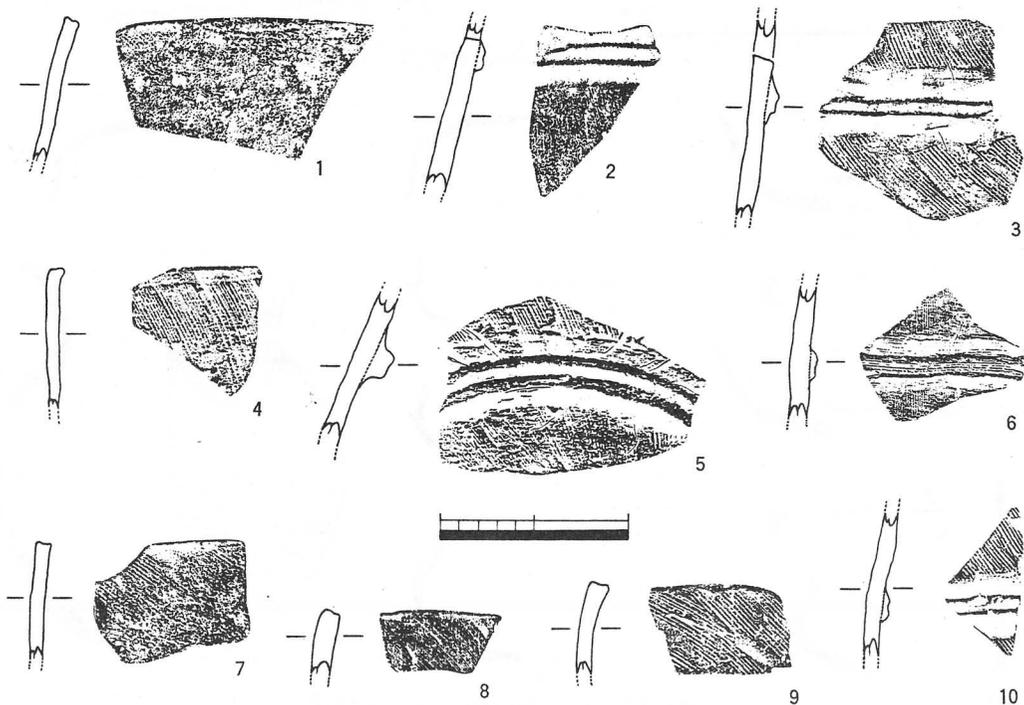
土器（第60・61図 遺物観察表）

いずれも第2遺構面出土遺物で、須恵器大甕1点、蓋2点、杯2点、高杯2点、短頸広口壺2点、壺1点がある。大甕以外はほぼ完形で出土している。

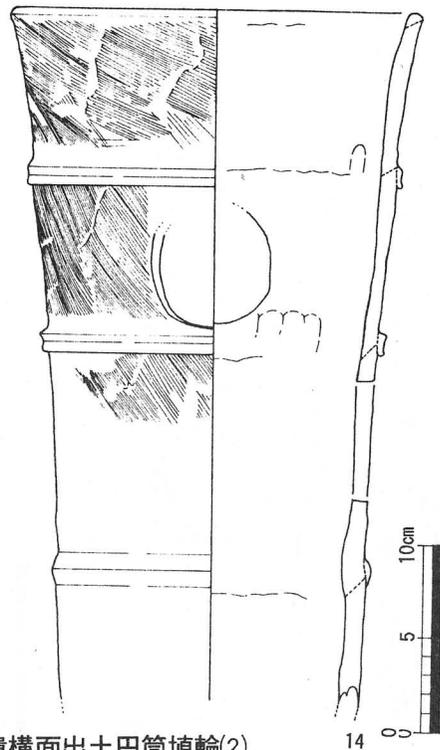
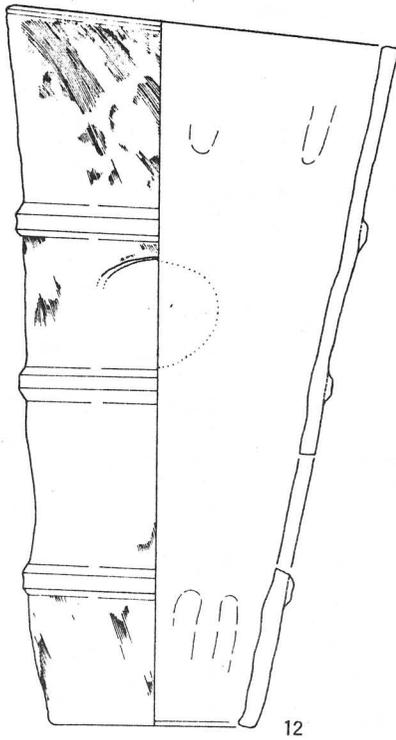
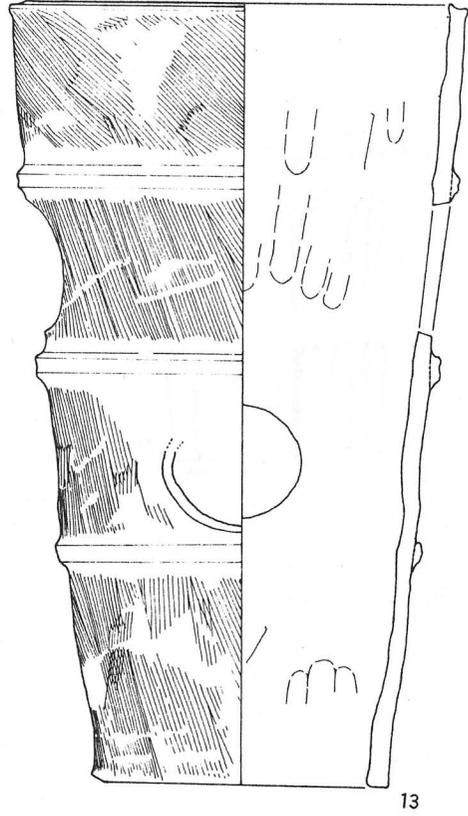
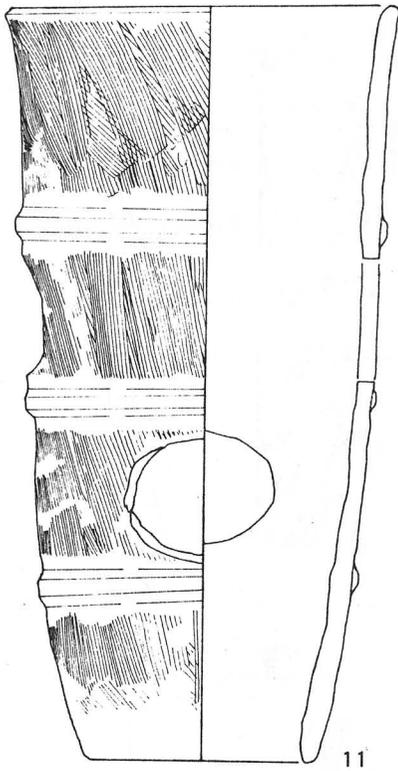
円筒埴輪

（第62・63・64図 遺物観察表）

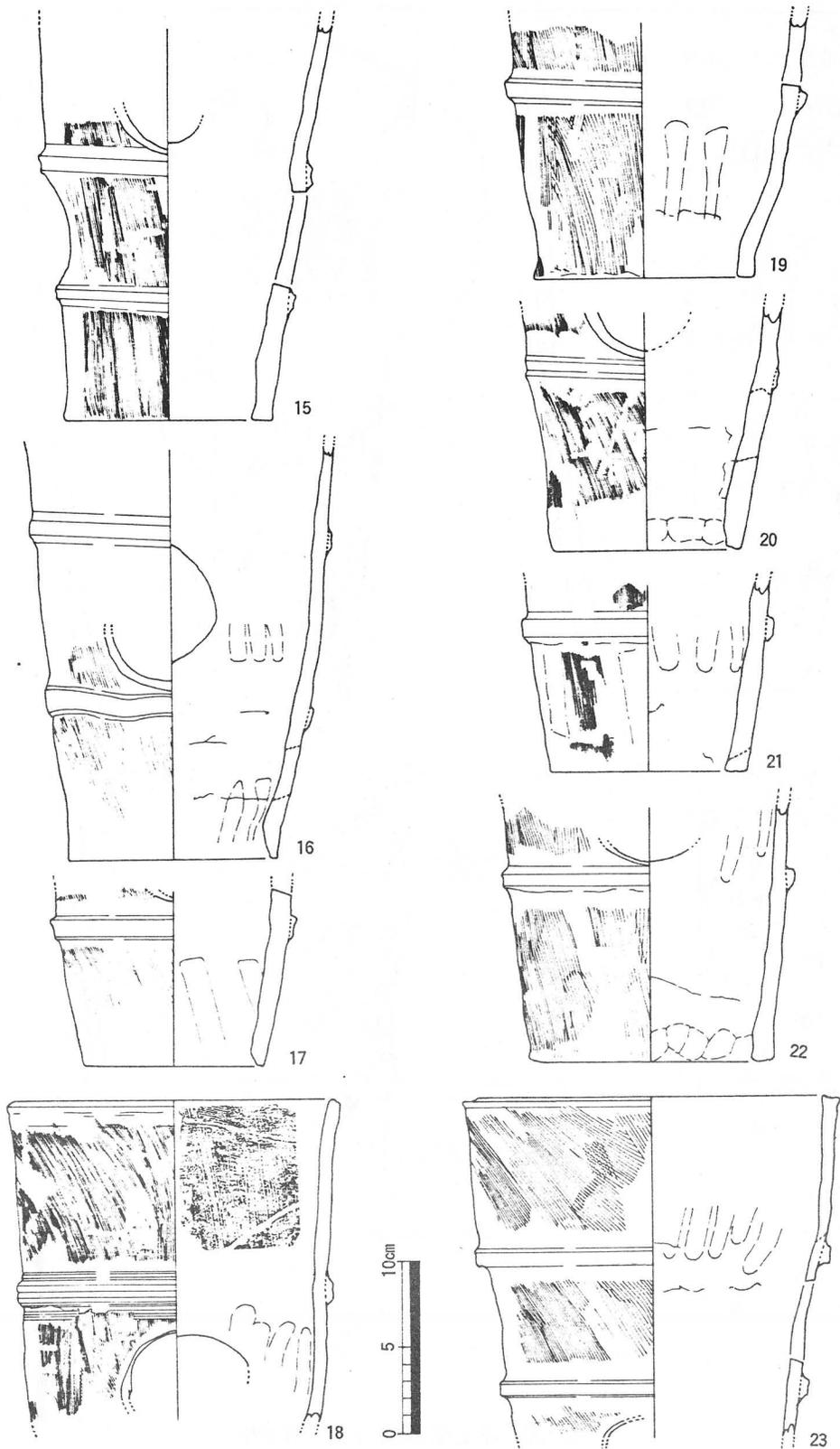
須恵質の堅緻なものと土師質の軟質なものがある。このうち基底部の残存するものは5～7、9～12の7点であった。基底部径が10～14.6cmの小型のものばかりで、基底部から垂直に近い状態で立ち上がる



第62図 第2遺構面出土円筒埴輪(1)



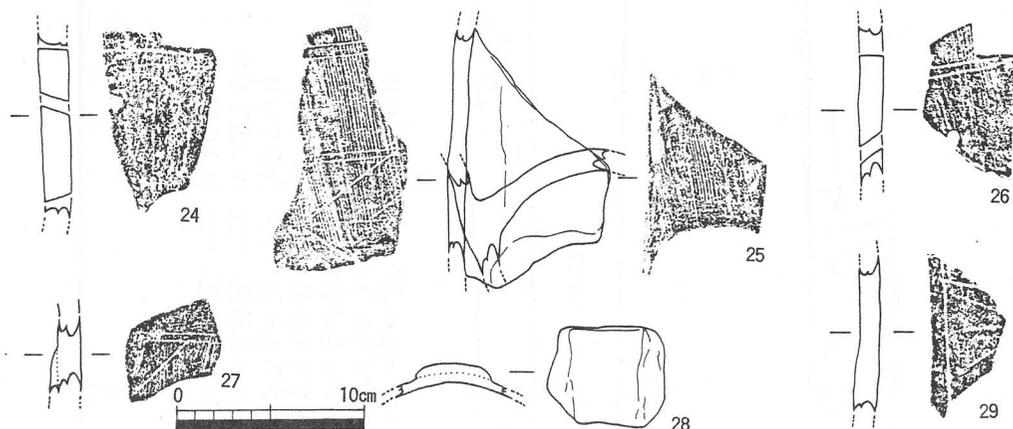
第63図 第2遺構面出土円筒埴輪(2)



第64図 第2遺構面出土円筒埴輪(3)

形象埴輪 (第65図)

24～27、29は盾形埴輪の破片である。25は盾を支える円筒部分である。いずれも外面はハケ目による調整の後、直弧文を施している。内面は指ナデを施す。色調は橙色を呈し、胎土は密、焼成も堅緻である等、共通点が多い。28は形種不明。長さ5.2cm、幅6.3cm、厚さ1.1cmを測る。形状は全体に緩やかに湾曲し、断面は凸状を呈している。



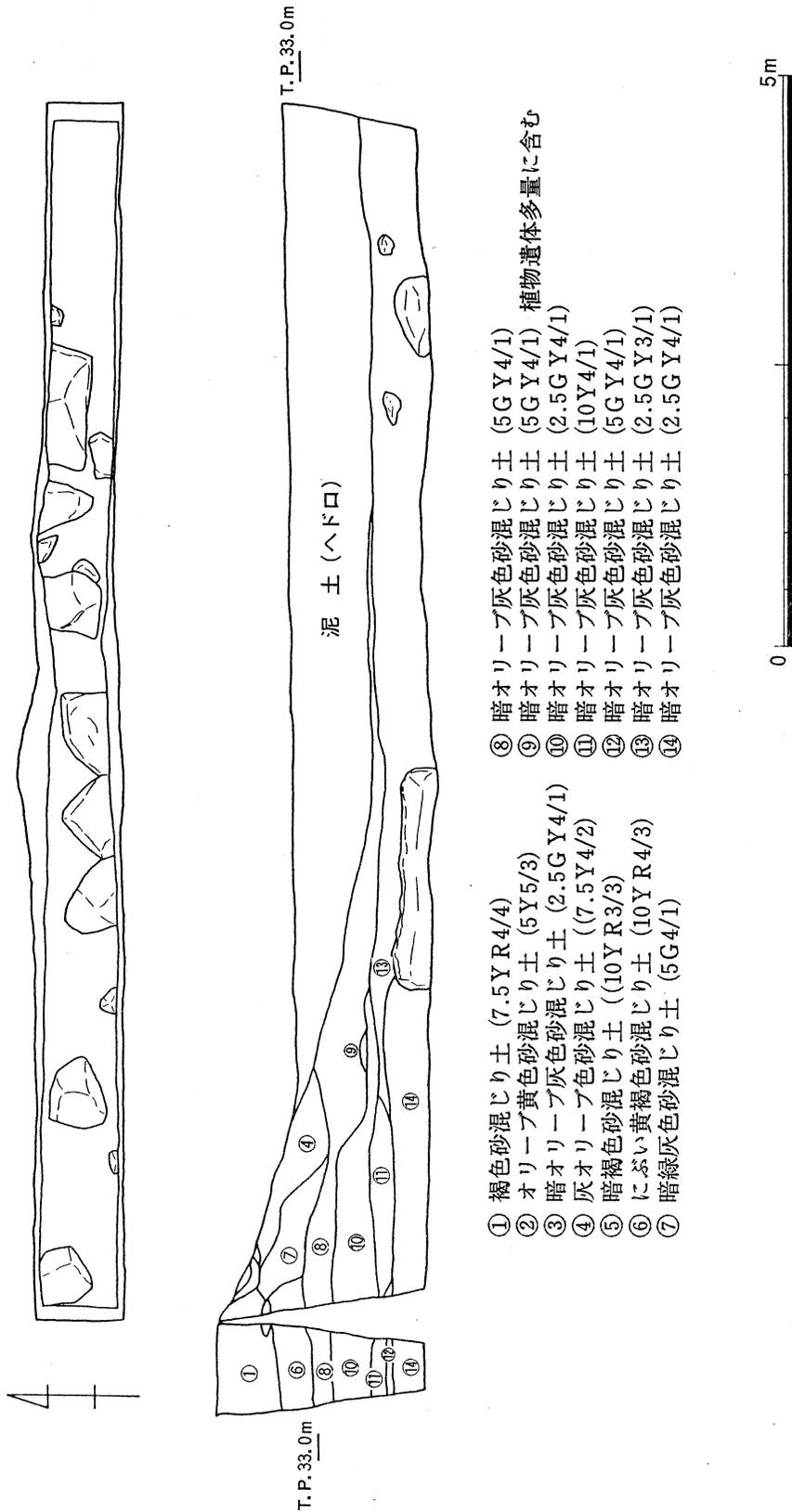
第65図 第2遺構面出土円筒埴輪(4)

C区の調査 (第66図)

C区は敷地の東側にある池に、東西方向に設定した調査トレンチである。A区とは人工的に築かれたと思われる堤によって画されている。常時は池の水位は、堤の上部まできているのであるが、調査時は2月の渇水期のため、水深は50cmと浅かった。池の水は、農業用に使用されており、北側の岸に樋門がある。調査は樋門を開き、残りの水を抜いた状態で実施した。トレンチは池の西側から中央部に向かって、東西方向に設定した。

層序は、最上部にあるのがヘドロ状の泥土で、約70cmの厚さで堆積しているが、これを除去した面が実際の池の底である。堤部分の土層の堆積は、水平堆積を示しているが、断面を観察した限りでは、人工的に築かれたのものではなさそうである。池の底の土である灰オリーブ色砂混じり土、暗オリーブ灰色砂混じり土を除去すると50cm～1m大の花崗岩の石が存在していたが、人工的なものではなく自然石であった。

調査の過程では、遺構、遺物は検出されず、池がいつ頃から存在していたのか明らかにすることはできなかった。



- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| ① 褐色砂混じり土 (7.5YR4/4) | ⑧ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (5GY4/1) |
| ② オリーブ黄色砂混じり土 (5Y5/3) | ⑨ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (5GY4/1) |
| ③ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (2.5GY4/1) | ⑩ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (2.5GY4/1) |
| ④ 灰オリーブ色砂混じり土 ((7.5Y4/2) | ⑪ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (10Y4/1) |
| ⑤ 暗褐色砂混じり土 ((10YR3/3) | ⑫ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (5GY4/1) |
| ⑥ にぶい黄褐色砂混じり土 (10YR4/3) | ⑬ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (2.5GY3/1) |
| ⑦ 暗緑灰色砂混じり土 (5G4/1) | ⑭ 暗オリーブ灰色砂混じり土 (2.5GY4/1) |
- 植物遺体多量に含む

第66図 C区平面図及び北壁土層断面図

第4章 ま と め

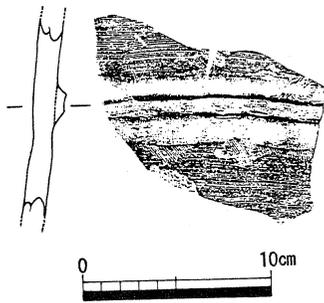
調査を実施した結果、城ヶ谷遺跡では、縄文時代～中近世に至る各時代の遺物が出土、遺構では古墳2基（城ヶ谷1号墳、2号墳）、中世の井戸、杭列、溝等が検出され、古くから営まれた複合遺跡であることが判明した。以下各時代ごとにまとめを記すことにする。

1. 縄文時代～弥生時代

A区で縄文土器、弥生土器が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。縄文土器は晩期の船橋式で、市内では初めての出土である。遺構は検出されなかったが、土器を出土した地点の土には、炭が多く混じていたことから、近くに生活場所の存在することが推定される。今後の周辺地域での調査に期待したい。弥生土器はいずれも後期のV様式に属するものである。周辺の北条遺跡、宮谷古墳群、墓谷古墳群でも同時期の遺物が出土しており、北条遺跡では堅穴住居、土杭等の遺構が検出されている。これらの遺構は、城ヶ谷遺跡とは立地条件も類似しており、弥生時代後期になると山手の丘陵地に遺跡が営まれたようである。

2. 古墳時代

A区では城ヶ谷1号墳・2号墳の2基の古墳が検出され、B区では丘陵斜面上に埴輪群、須恵器群が検出された。1号墳は、墳丘が完全に流失していたため墳形や規模は不明であるが、築造時期は、石室内の須恵器が陶邑TK10～TK43号窯並行期を示すことから、6世紀中頃～後半と考えられる。一方、2号墳は、周溝から推定すると径約15.0mの円墳であったと考えられる。第1石室出土の須恵器が陶邑TK43～TK209～217号窯並行期を示しており、耳環が4対も出土していることを考え合わせると、6世紀後半～7世紀の早い時期までの間に順次追葬が行われたことが推定される。また、第2石室の須恵器埴瓶は、陶邑TK43号窯並行期を示していることから、第2石室は、第1石室の1次埋葬とはほぼ同時期に造られたと考えられる。B区で出土している円筒埴輪は、すべて川西編年のV期に属し、須恵器は陶邑TK47号窯並行期を示していることから、6世紀前半の時期が考えられる。他に、盾形形象埴輪片が数点出土しているが、近くの宮谷1号墳でも、同様の埴輪を大量に出土している。埴輪群、須恵器群の出土状況は、古墳の墳丘裾部でのそれと類似しており、古墳の1部を検出した可能性が高い。これらの埴輪群、須恵器群を古墳に伴うものとするならば、A区で検出した城ヶ谷1号墳・2号墳も含めて、同一丘陵上に営まれた古墳群として、理解することができる。古墳時代後期になると、市内では山手の丘陵地



第67図 調査区外採集埴輪

に古墳群が形成され始めるが、城ヶ谷遺跡で検出された古墳も、このような後期古墳群の1つとして位置付けることができる。また、A区の南側の調査区外で、円筒埴輪片（第67図）が採集されている。須恵質で焼成は堅緻であり、外面は1次調整のタテハケの後、2次調整のヨコハケを施し、内面はナデを施している。川西編年のIV期に属するものと考えられ、B区で出土している埴輪よりも古い。周辺に、この時期の古墳の存在が推定される。

3. 奈良時代～平安時代

A区では白瓷瓶、壺が出土しているが、出土地点は2号墳の周溝の直上であり、周溝が完全に埋没した段階で置かれたものである。白瓷瓶はほぼ完形で、瓶の中に人骨は認められなかったが、蔵骨器として使用されていた可能性が強い。時期は10～11世紀のものである。周辺の北条遺跡では、奈良時代末～平安時代の火葬墓が確認されており、飯盛山中の太鼓山遺跡でも平安時代の須恵器、白瓷製の蔵骨器が出土していることから、当地周辺は、奈良時代以降になっても墓域になっていたことを示している。

4. 中世～近世

中近世の遺構としては、A区で検出した杭列、溝、段状遺構、集石遺構、井戸、土杭、ピット等がある。これらの遺構は、土杭、ピットを除き、出土遺物から13～14世紀の時期が考えられる。杭列は段状遺構に関連して、斜面上に土留め用に打ち込まれたものであろう。このように、当地は中世に大規模な開発が行われたらしく、古墳の墳丘もその時の削平によって消失したと考えられる。A区で検出した遺構の性格は明らかではないが、井戸を検出していることから、中世の頃に居館が存在していたことが推定される。尚、調査地の背後にそびえる飯盛山は中世の頃より城が築かれたとされ、戦国時代には、一時畿内支配に成功した三好長慶の拠点となった。調査地の字名「城ヶ谷」もこれに関連すると考えられるが、今回検出した遺構が飯盛山城に関係するものであるのかは明らかではない。

註

- (1) 三宅正浩・黒田淳他『寺川・北条遺跡発掘調査概要』大東市教育委員会（1987）
- (2) (1)に同じ。
- (3) 『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』大東市北新町遺跡調査会（1986）
- (4) 辻本武『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会（1987）
- (5) 1959年、関西電力株式会社東大阪変電所建設工事の際に発見された。
東宏「弥生時代」『大東市史』大東市教育委員会（1973）
黒田淳『大東市埋蔵文化財発掘調査概報・1988年度』大東市教育委員会（1989）
- (6) 黒田淳『宮谷古墳群調査報告書Ⅰ』大東市教育委員会（1988）
- (7) (1)に同じ。
- (8) 1987年より北新町遺跡調査会が実施した、府営住宅建替工事に伴う第2次発掘調査による。
- (9) 1987年に実施した、大阪産業大学校舎増築工事に伴う発掘調査による。掘立柱建物の他、堅穴住居も検出され、大量の古墳時代前期の土器と共に、直弧文入木製品、小型素文鏡、管玉等が出土しており、祭祀的色彩が濃い。
- (10) 1989年に実施した、大阪産業大学クラブハウス新築工事に伴う発掘調査による。
- (11) 田代克巳・瀬川健『堂山古墳群発掘調査概要』大阪府教育委員会（1973）
- (12) (1)に同じ。
- (13) 1987年の調査による。
- (14) (1)に同じ。三宅正浩・黒田淳 付載「墓谷古墳群採集遺物」
- (15) (8)に同じ。
- (16) (1)に同じ。
- (17) (1)に同じ。
- (18) (13)に同じ。横穴式石室の再利用という形で、中世の遺構を検出している。
- (19) 浄謙俊文「三好長慶と飯盛山」『大東市史』大東市教育委員会（1973）
- (20) 浄謙俊文「三箇のキリシタン」『大東市史』大東市教育委員会（1973）
- (21) 遺物出土状況で述べた、須恵器埴瓶、短頸壺、土師器壺は、調査担当者の管理不行届により、盗難に遭い実物はない。従って、ここでは図化し得なかった。ご了解願いたい。
- (22) 表面に何かを塗っているようでもある。
- (23) (1)に同じ。

- (24) (6)に同じ。
- (25) 田辺昭三『陶邑古窯址群』(1966)
- (27) (26)に同じ。
- (28) (26)に同じ。
- (29) 川西宏幸「円筒埴輪総編」『考古学雑誌』64巻2号(1978)
- (30) (26)に同じ。
- (31) 直弧文が配されており、石見型盾形埴輪と考えられる。
- (32) 本文第1章参照。
- (33) (29)に同じ。市内ではこの他、寺川瓦堂遺跡で川西編年Ⅱ期の円筒埴輪、堂山1号墳で川西編年Ⅳ期の円筒埴輪が出土している。(1)に同じ。河内一浩 付載「大東市の埴輪」
- (34) 1987年度の調査で出土。土師器の壺が伏せた状態で置いてあり、中に火葬された人骨が入っていた。
- (35) 飯盛山城は、飯盛山の地形を利用して造られた山城であり、山頂には、本丸そのほかの施設が、また、西へ張り出す尾根上にも、城を防御するための廓(くるわ)と呼ばれる平坦地を各所に設けていた。

遺物観察表

1号墳出土土器(第13図)

番号	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
1	須恵器壺	17-1	口径 16.2 器高 15.2	平底。口縁端部は段状をなし、外側に面をもつ。頸部から体部上半にかけてヨコナデ、下半はヘラケズリ。灰白色。焼成堅緻。	
2	須恵器長頸壺	17-2	口径 19.3 器高 26.5	口縁端部は上下に拡張し、尖って終わる。頸部は凹線によって2段に区分され、各段には櫛描き波状文を施す。体部はカキ目。青灰色。堅緻。	
3	土師器壺	17-3	口径 10.0 器高 12.7	球形の体部に外傾する短い頸部を有し、口縁端部は丸く終わる。外面に不定方向のハケ目、頸部にヨコナデを施す。内面にヨコハケ。にぶい橙色。	
4	須恵器高杯	17-4	口径 9.6 器高 13.7	脚部に1段の長方形の透かし窓を3方向から施す。口縁部は内湾気味に端部は尖らせて終わる。杯部下半に凹線と雑な波状文を巡らす。灰白色を呈する。	
5	須恵器短頸壺蓋	17-5	口径 9.9 器高 4	天井部外面1/2は回転ヘラケズリ、口縁端部内側にかえりを有する。内面はナデ調整。緑灰色。焼成堅緻。	
6	須恵器蓋	17-6	口径 13.9 器高 4.0	天井部が扁平で外面2/3に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は鈍い段をなす。天井部に砂粒が目立つ。青灰色。焼成は堅緻。	
7	須恵器蓋	17-7	口径 14.9 器高 5.2	天井部が深い。天井部外面2/3に回転ヘラケズリ、口縁端部は肥厚し、段をなす。灰色を呈す。焼成はやや軟。	
8	須恵器蓋	17-8	口径 15.1 器高 5.0	天井部外面の2/3に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は丸く終わる。器壁に凹凸が少ないが、焼き膨れが見られる。灰色。焼成はやや軟。	
9	須恵器蓋	17-9	口径 15.1 器高 4.4	扁平な天井部の2/3に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は内傾気味で段をもつ。灰白色を呈する。焼成堅緻。	
10	須恵器杯	17-10	口径 13.3 器高 4.6	たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に終わる。受部はわずかに外上方に伸びる。底部外面1/3に回転ヘラケズリ。灰色を呈す。焼成堅緻。	
11	須恵器杯	17-11	口径 12.7 器高 5.0	たちあがりは内傾し端部に鈍い段を有する。受部は肥厚し水平にのびる。底部外面3/4に回転ヘラケズリを施す。灰色。焼成堅緻。	
12	須恵器杯	17-12	口径 12.8 器高 5.2	うすいたちあがりは内傾し、端部は尖り気味に終わる。受部は斜め上方に向かっている。天井部1/2に回転ヘラケズリ。灰色。焼成堅緻。	

2号墳出土土器(第21図)

番号	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
1	須恵器蓋	18-1	口径 13.7 器高 4.5	丸い天井部1/4に回転ヘラケズリを施す。焼成は軟。浅黄橙色を呈す。焼成は軟。	
2	須恵器蓋	18-2	口径 14.7 残存器高 4.4	天井部からなだらかな円弧を描き1/2に回転ヘラケズリを施す。口縁端部は丸く終わる。オリーブ灰色を呈す。焼成は堅緻。	
3	須恵器蓋	18-3	口径 14.7 器高 4.3	口縁内外面に段をなし、端部は丸く終わる。天井部は未調整。天井部1/2に回転ヘラケズリを施す。灰黄色。焼成はやや軟。	
4	須恵器蓋	18-4	口径 14.6 器高 4.3	扁平な天井部と口縁部の境に稜を有し、口縁端部は内側に段をなして丸く終わる。焼成はやや軟。オリーブ灰色を呈する。	
5	須恵器蓋	18-5	口径 15.4 器高 4.5	丸みのある天井部から口縁への境と口縁内側とに段をなす。焼成はやや軟。色調は赤灰色を呈す。	
6	須恵器蓋	18-6	口径 14.4 器高 4.5	天井部外面1/2に回転ヘラケズリを施す。残る部分はナデによる調整。口縁内側に段をなし、端部は丸く終わる。灰色。焼成は堅緻。	石室上部埋土より出土
7	須恵器杯	18-7	口径 13.2 器高 4.1	丸みのある低部から受部は斜め外上方にのび、たちあがりは内傾して肥厚したのち、端部は尖り気味に終わる。灰色を呈す。焼成は堅緻。	

8	須惠器 杯	18-8	口径 13.6 器高 4.5	未調整の底部から受部はわずかに斜め外上方にのびる。たちあがり は内傾して短い。灰白色を呈する。焼成は堅緻。
9	須惠器 杯	18-9	口径 11.7 器高 3.8	偏平な底部から受部は水平にのび、たちあがりはうすく、端部は 内傾して平坦面を有する。回転ヘラケズリは風化している。灰オ リーブ色。堅緻。
10	須惠器 短頸壺	18-10	口径 6.7 器高 7.3	平底より内湾する体部の1/3下半にヘラケズリを施す。口縁端 部は肥厚し上方に幅広い面をもつ。灰色を呈す。焼成は堅緻。
11	須惠器 短頸壺	18-11	口径 7.5 器高 9.2	釉のかかった肩部が張り出し、口縁部は直立して短く丸みをもっ て終わる。体部1/2に回転ヘラケズリ、その他はナデ調整。灰 色。焼成は堅緻。
12	須惠器 高杯	19-12	口径 11.4 器高 14.3	杯部はゆるやかに外傾し、端部は丸く終わる。杯部外面1/2に 回転ヘラケズリ。脚部1/2に段をなし、長方形のスキャン窓を三 方向に穿つ。底部は水平にのび肥厚する。
13	土師器 把手付碗	19-13	口径 12.1 残存器高 8.4	平底から外反して続く体部にハケ目が施される。把手に孔が穿た れる。浅黄橙色。焼成良好。
14	土師器 把手付碗	19-14	口径 13.2 器高 8.1	把手の下半が欠損している。平底から外反して体部が続く。端部 はわずかに内傾する。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目調整 10本/cm 橙色。焼成良好。
15	土師器 皿	19-15	口径 11.9 器高 2.8	丸みのある底部からゆるやかに内湾して体部が続く。口縁部内側 で段をなし。端部は丸く終わる。内面にハケ目が残存。橙色。焼 成良好。
16	土師器 皿	19-16	口径 13.2 器高 3.6	底部より内湾して口縁端部が続く。口縁部内側で段をなし、端部 は丸く終わる。内面にハケ目が残存。橙色。焼成良好。
17	須惠器 甗	19-17	体部径 9.3 残存器高 7.0	頸部が欠損、穿孔は外→内。肩部、体部に段をなし、櫛描列点文 が左→右へ周回する。体部下半は回転ヘラケズリ。灰オリーブ色。 焼成堅緻。

2号墳第2石室出土土器 (第31図)

	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
	須惠器 埴 瓶	2 0	口径 6.0 器高 23.2	口縁部は基部から逆ハの字に開き、端部近くで直立している。端部 は丸く終わる。体部は内湾して下がっている。肩部に2個一対の把 手を有する。オリーブ灰色。	

2号墳周溝出土土器 (第34図)

番号	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
1	須惠器 長頸壺	22-1	体部径 22.3 残存器高 29.8	頸部はゆるやかに外反し、外面はヘラ描線を緻密に施し、一部ナデ を消す。肩部から底部にかけて全面タタキ、内面は頸部にナデ、体 部にタタキを施す。青灰色	
2	須惠器 短頸広口壺	22-2	口径 8.8 器高 12.5	内湾する体部からやや外反して口縁部がのびる。端部近くで内湾し 丸みをもって終わる。肩部はゆるやかに傾斜し丸底へ続く。口頸部 体部にカキ目、体部下半にヘラケズリ。	
3	須惠器 短頸広口壺	22-3	口径 9.8 器高 13.6	口頸部はわずかに外反し、端部は直立し丸みをもって終わる。肩部 はあまり張らず、ゆるやかに底部へ続く。体部上半、口頸部にカキ 目、体部下半に回転ヘラケズリ。	
4	須惠器 杯	22-4	口径 11.1 器高 3.0	口縁は大きく内傾してたちあがり、うすく仕上げられる。受部はや や肥厚し、上方にのびる。底部1/2に回転ヘラケズリ。かなり浅い ものである。灰色を呈す。	
5	須惠器 高杯	22-5	口径 13.4 器高 10.4	短い脚部に円形の孔を4方向から穿つ。裾部は内湾し端部は丸い。 口縁部は外反し、外面に鈍い稜線をもつ。内外面ともヨコナデ、灰 白色、焼成堅緻。	
6	須惠器 甗	22-6	体部径 9.0 残存器高 11.2	口縁部は基部に細く、外反してたちあがる。体部は外下方に外傾し、 円孔が内傾して穿たれる。体部1/4にヘラケズリ。底部は丸い。灰 色を呈する。焼成堅緻。	

S K - 6 出土土器 (第36図)

番号	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
1	須恵器 蓋	23-1	口径15.7 器高 5.4	丸い天井部と口縁部の境に稜線を有し、その下部にナデによる凹線を巡らせる。天井部2/3に回転ヘラケズリ、内面はナデ調整、わずかに釉がかかる。灰白色。	
2	須恵器 蓋	23-2	口径15.6 器高 5.6	端部は内傾して段をなし、尖り気味に終わる。天井部1/2に回転ヘラケズリ、残り部分を内面はヨコナデ、宝珠つまみはナデ調整。灰色を呈す。焼成堅緻。	

S D - 5 段状遺構出土土器 (第44・45・46図)

番号	器種	図版番号	法量	形態・調整	備考
1	石鍋	24-1	口径 21.8 残存器高 4.5	口縁部のみ残存。口縁部は内椀気味で端部は丸味をおびた面をなしで終わる。外面に煤付着。暗紫色。滑石製。	A-3区 出土
2	土師器 皿	24-2	口径 9.3 器高 1.4	平底より内湾して体部がたちあがる。端部は丸みをもって終わる。体部に強いナデによる段をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。灰白色を呈す。焼成良好。	A-2区 〃
3	瓦器 椀	24-3	口径 14.8 器高 4.6	体部はやや内湾気味に斜め方向へかなり開く形でのびる。口縁は外反する。端部は沈線ナシ。断面三角形の貼りつけ高台。内面2/3に緻密なヘラミガキ。見込みに暗文。	A-3区 〃
4	瓦器 椀	24-4	口径 15.0 器高 5.0	体部は内湾して口縁へ続く。端部内部に沈線が1条巡る。底部に台形の貼りつけ高台。器壁内面のみ煤を吸着。風化がひどく内面調整不明。	A-2区 〃
5	瓦器 椀	24-5	口径 14.6 器高 4.7	体部は斜め上方に伸び、口縁部に1条の沈線を巡らせる。底部に断面三角形の高台、外面ナデ調整の後、粗いヘラミガキ、見込みに螺旋状暗文を施す。	A-2区 〃
6	瓦質 羽釜	24-6	口径 25.8 残存器高20.1	口縁から鑊にかけヨコナデで段状に調整、口縁は体部から内傾し肥厚した端部は上方に面を有する。体部は指おさえの後斜めハケを施す。内面は横方向のハケ目調整。灰色を呈する。	A-8区 〃
7	瓦質 羽釜	25-7	口径 22.9 残存器高 9.0	口縁部は内傾しながら端部は平坦面を有し上方に向かう。たちあがりにはナデによる段、凹線を巡らす。やや長い鑊の端は丸くわずかに上に反る。外面はナデ、内面ハケ目調整。オリブ灰色。	A-8区 〃
8	瓦質 羽釜	25-8	口径 23.7 残存器高 3.5	たちあがりにはナデによる凹線が見られる。鑊は体部から水平にのび厚みはなく、端部がわずかに反る。内面にハケ目が残る。にぶい橙色を呈す。焼成やや軟。	A-8区 〃
9	土師質 羽釜	24-9	口径 25.0 残存器高 7.1	内湾する体部から大きくくの字に屈曲する口縁を有する。たちあがりに径8mmの紐孔が残る。鑊部は上方に反る。体部調整は不明、内面はナデ調整橙色。焼成やや軟。	A-8区 〃
10	瓦質 羽釜	24-10	口径 16.2 残存器高 9.1	内湾する体部から、平坦面をもつ口縁が続く。たちあがりにはナデによる凹線が巡る。鑊は水平にやや短い。体部外面に煤が密に付着。調整不明。淡黄色を呈す。	A-8区 〃
11	瓦質 羽釜	25-11	口径 24.9 残存器高 17	鍋形に近い体部から内傾して口縁が続き、その先端は上方に面をもつ。たちあがりにはナデ調整による段・凹線が巡る。鑊は短く、水平にのびる。内面はハケ目調整。灰色を呈す。	A-7区 〃
12	瓦質 羽釜	25-12	口径 23.0 残存器高14.3	内湾する体部から巾広い面をもつ口縁先端部が続く。鑊部はほぼ水平にその先端は丸く納められる。体部に煤が密に付着し、調整不明。内面下方にハケ目が残る。黒色を呈す。	A-8区 〃
13	瓦質 羽釜	25-13	口径 32.0 残存器高10.8	大ぶりのもので口縁は体胴部よりほぼ直立した形で続く。端部は上方に面をもつが中央部に丸みをもつ。たちあがりにはナデによる段、凹線を巡らす。内面に細かいハケ目、緑灰色を呈する。	A-8区 〃
14	瓦質 羽釜	24-14	口径 23.7 残存器高14.7	口縁は体部より内傾し、巾のある面が上方に向かう。鑊は短く先端は下方に向かい丸みをもって終わる。浅黄橙色を呈す。焼成は普通。	A-8区 〃

15	瓦 三 足	質 足	25-15	口 径 15.6 残存器高 11	球形に近い体部から内傾して続く口縁からすぐ短い鐔が外上方に反り、その端部は平坦面を有する。棒状の脚部が残存。外面調整不明。内面ハケ目調整。暗灰黄色。	A-8区
16	瓦 三 足	質 足	25-16	口 径 19.3 残存器高 11	鍋形の体部から逆くの字に内傾する口縁をもつ。鐔が大きく外上方に反る。内面にナデのあとが溝状に残る。外面に脚部根幹部が残る。灰色を呈す。焼成良好。	A-8区
17	瓦 三 足	質 足	25-17	口 径 16.7 残存器高 4.2	口縁部は内湾する体部より直立して続く。端部は平坦面を有する。短い鐔が口縁からすぐ続きその端部も平坦面を有する。内面にハケ目調整が残る。オリブ灰色。焼成良好。	A-7区
18	瓦 三 足	質 足	25-18	口 径 18.8 残存器高 4.9	口縁部は体部から直立し、中央部がやや凹み、上方に向かう。たちあがりは低く鐔は短く、鐔先端部も口縁同様に仕上げられる。内側にナデによる凹線が巡る。灰白色。焼成良好。	A-7区
19	瓦 三 足	質 足	25-19	口 径 22.6 残存器高 6.3	口縁は内湾する体部から内傾して続き、端部は平坦面を有し、上方に向かう。鐔は下方に向かったのちわずかに上方に反る。内面はナデ調整。灰オリブを呈する。焼成は良好。	A-8区
20	瓦 三 足	質 足	25-20	口 径 18.6 残存器高 7.0	内湾する体部に直立した口縁部が続き、端部は外に巻き込む。鐔は短く、厚みをもって丸い。体胴部に煤付着。内面はナデ調整。鐔上部に沈線が一条めぐる。暗灰黄色。	A-8区
21	瓦 三 足	質 足	25-21	口 径 21.1 残存器高 8.0	口縁は球形の体部から直立して続く。端部は肥厚し丸い。耳が一方のみ残る。鐔は水平にとりつけられ、先端上下に布目を残す。煤付着。内面はナデ調整。オリブ灰色を呈す。	A-8区

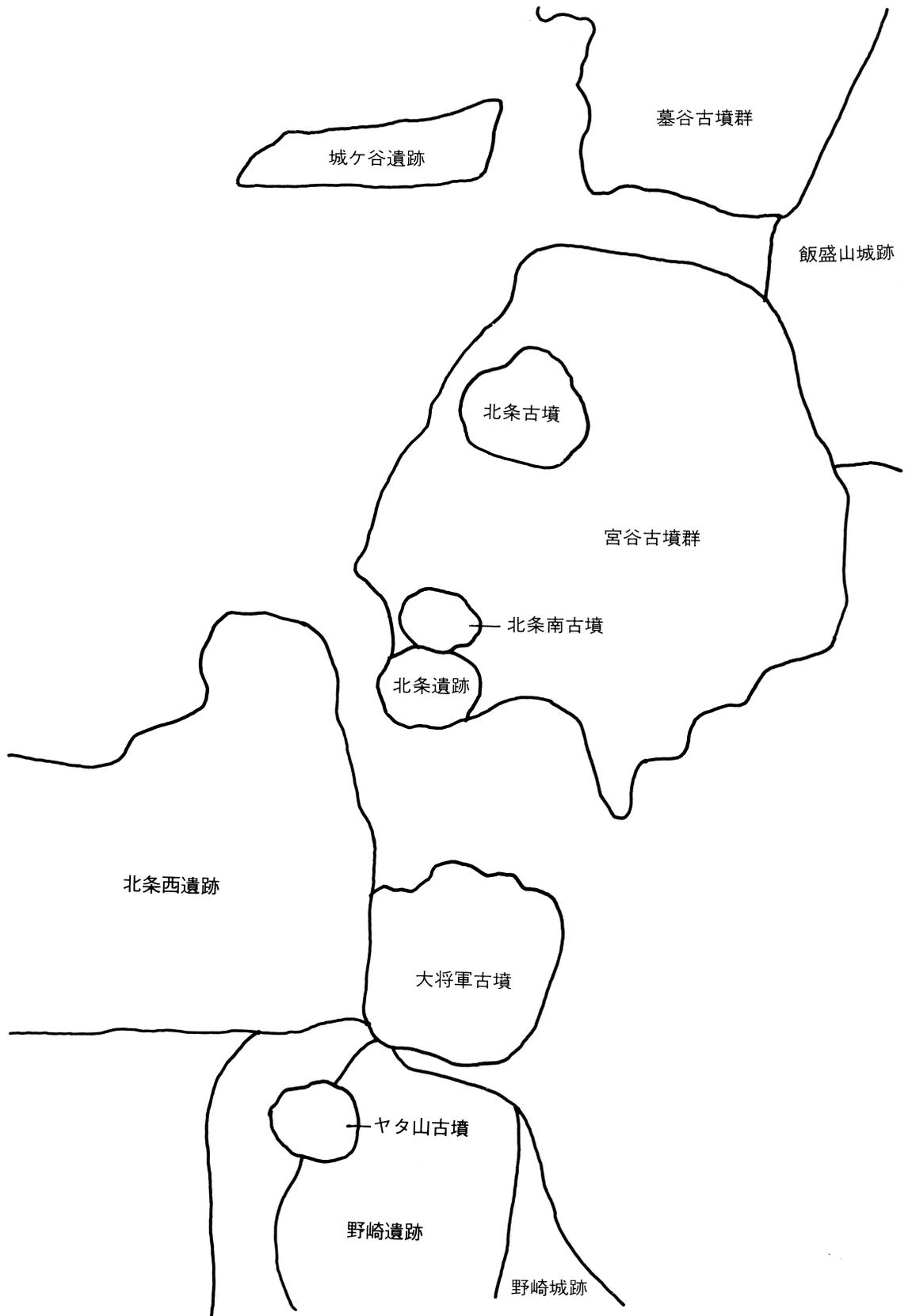
B区第2遺構面出土土器（第60図）

番号	器 種	図版番号	法 量	形 態 ・ 調 整	備 考
1	須 惠 器 高 杯	27-1	口 径 14.2 器 高 10.2	丸底から内湾してたちあがり口縁部は外反する。外面に段をなし、8条の波状文が巡る。脚部四方向に透し窓が外→内に穿たれる。杯部1/3に回転ヘラケズリ。におい赤褐色を呈す。	
2	須 惠 器 高 杯	27-2	口 径 14.7 器 高 10.4	口縁部はゆるやかに外反する。外面に段をなし、杯部1/2下半に回転ヘラケズリを施す。杯部に8条の波状文が巡る。脚部四方向に透かし窓を穿つ。オリブ灰色。焼成堅緻。	
3	須 惠 器 蓋	27-3	口 径 11.6 器 高 4.5	口縁高は高く、端部は内傾する。稜が鋭く、口縁部にかけて丁寧なナデ調整。天井部2/3に回転ヘラケズリを施す。灰白色を呈す。焼成堅緻。	
4	須 惠 器 蓋	27-4	口 径 12.0 器 高 4.7	丸い天井部のほぼ3/4に回転ヘラケズリ。稜から口縁までは外反し内傾した面を有する。灰白色 焼成はやや軟。自然釉がかかる	
5	須 惠 器 杯	27-5	口 径 器 高	口縁端部は上方に向かって面を有する。受部からほぼ直立してたちあがりのがのびる。部1/2に回転ヘラケズリ。内面たちあがりは丁寧なナデ調整。灰色を呈す。	
6	須 惠 器 杯	27-6	口 径 10.2 器 高 5.1	深みのある底部から内湾して体部が続く。たちあがりは肥厚が内傾し面を有する。杯部3/4に回転ヘラケズリを施す。内面はナデ調整。灰白色。焼成は堅緻。	
7	須 惠 器 ミニ壺	27-7	口 径 4.9 器 高 5.4	口縁端部はやや外反し、頸頸部から内湾して下り底部へと続く。体部に段をなす。自然釉がかかる。	
8	須 惠 器 広口壺	27-8	口 径 9.0 器 高 6.9	やや平らな底部から体部が内湾して続く。口縁部は外反し尖り気味に終わる。体部1/2に回転ヘラケズリを施す。内面はナデ調整。オリブ灰色。焼成堅緻。	
9	須 惠 器 壺	27-9	口 径 14.7 器 高 21.6	底部に穿孔がひとつ、ゆるやかに内湾して口頸部はくの字に屈曲し端部はやや内側に向かう。頸部に13条の波状文、体部はカキ目の上にタタキ目、内面は丁寧にナデ消す。灰色。焼成やや軟。	
	須 惠 器 大 甕	26	口 径 19.4 器 高 56.0	口縁部直立してのび、端部は丸みをもって終わる。肩部四方向に把手が付く。体部外面は縦方向に施す。内面は、同心円文タタキ、青灰色、焼成は堅緻。	

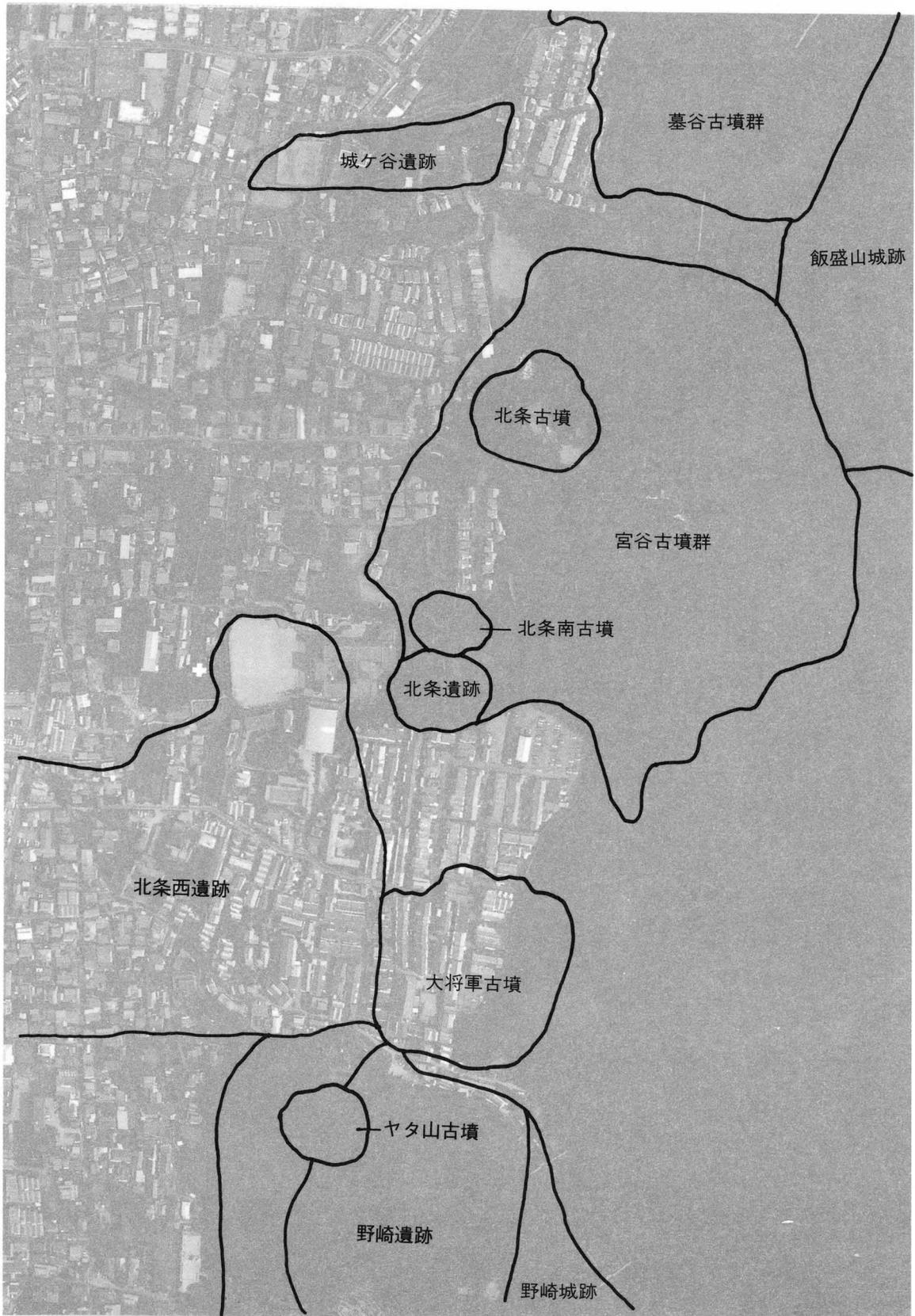
B区出土円筒埴輪（第63・64図）

番号	図版番号	法 量	内 外 面 の 寸 法	焼 成	色 調	備 考
11	28-11	口 径 18.9 器 高 40.4 底 径 11.3	外面はタテハケ6～7本/cm 内面 ナデ	良 好	橙 色	台形の突帯
12	28-12	推定口径20.9 器 高 38.2	外面 タテハケ10本/cm 内面 ナデ	良 好	浅黄橙色	くさり礫多量含む
13	28-13	推定口径23.6 器 高 41.6	外面タテハケ6本/cm 内面 ナデ	良 好	橙 色	金雲母少量含む
14	28-14	推定口径21.8 残存器高36.8	外面 ナナメハケ7本/cm 内面 ナデ	や や 軟	淡黄色～橙色	台形の突帯
15	29-15	底部径 12.2 残存器高23.0	外面 タテハケ9本/cm 内面 ナデ	良 好	浅黄橙色	金雲母を少量含む
16	29-16	底部径 12.2 残存器高24.0	外面 タテハケ6本/cm 内面 ナデ	良 好	浅黄橙色	金雲母を少量含む
17	30-17	底部径 10.4 残存器高10.0	外面 タテハケ6本/cm 内面 ナデ	や や 軟	浅黄橙色	金雲母を少量含む
18	29-18	推定口径19.5 残存器高18.9	外面 タテハケ10本/cm 内面 ヨコハケ、タテハケ	良好・堅緻	にぶい橙色	突帯上に荒いハケ目を施す
19	29-19	底部径 13.0 残存器高15.0	外面 タテハケ6本/cm 内面 ナデ	良 好	黄 橙 色	
20	29-20	底部径 11.0 残存器高13.1	外面 タテハケ9本/cm 内面 ナデ	や や 軟	浅黄橙色	金雲母少量含む
21	30-21	底部径 11.4 残存器高11.0	外面 タテハケ12本/cm 内面 ナデ	良 好	にぶい橙色	台形の突帯
22	29-22	底部径 14.4 残存器高15.0	外面 タテハケ6本/cm 内面 ナデ	良 好	橙 色	胎土はやや粗
23	30-23	推定口径22.0 残存器高20.0	外面 タテハケ6本/cm 内面 ナデ	良好・堅緻	にぶい橙色	須恵質埴輪

版 図







城ヶ谷遺跡

墓谷古墳群

飯盛山城跡

北条古墳

宮谷古墳群

北条南古墳

北条遺跡

北条西遺跡

大將軍古墳

ヤタ山古墳

野崎遺跡

野崎城跡



自然流路全景



A-11.14区. 自然流路セクションNo.1東壁断面



A-11.14区. 自然流路セクションNo.2東壁断面



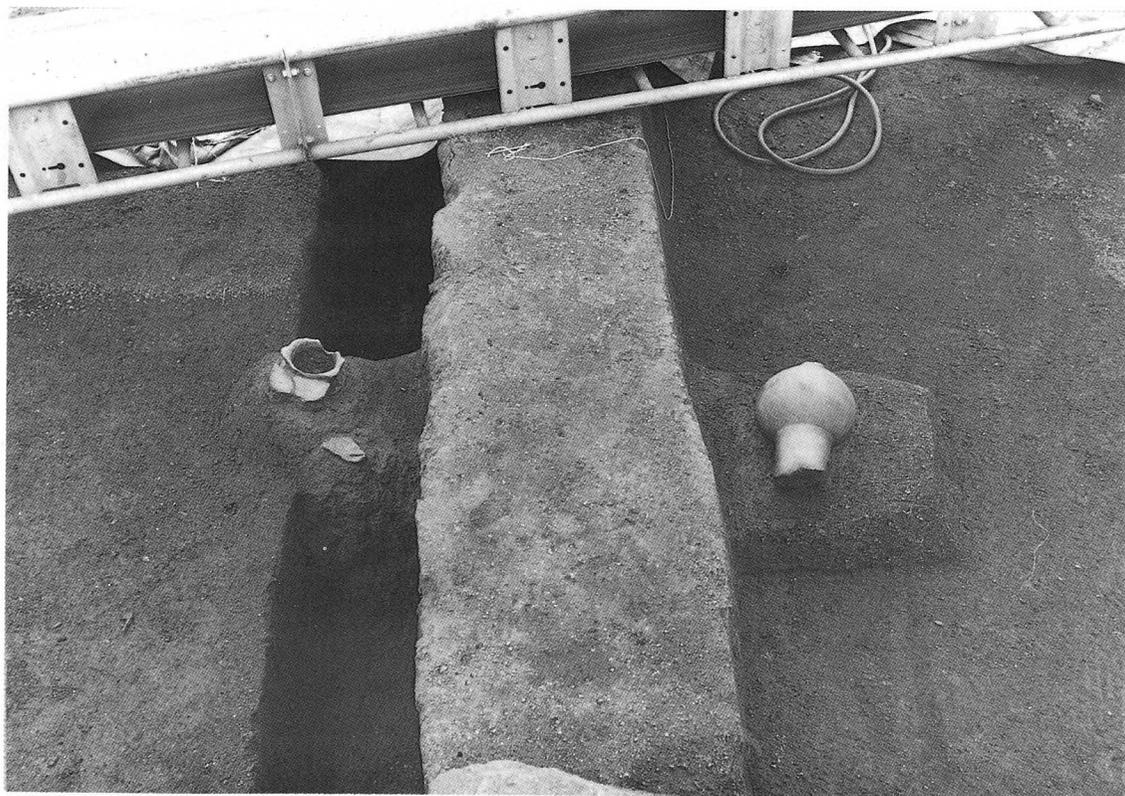
A-13区. 集石遺構-5



縄文土器出土状況



A-13区. 集石遺構-5



A-4区. 弥生土器出土状況



A-4区. 弥生土器出土状況



1号墳 石室



1号墳石室土器出土狀況



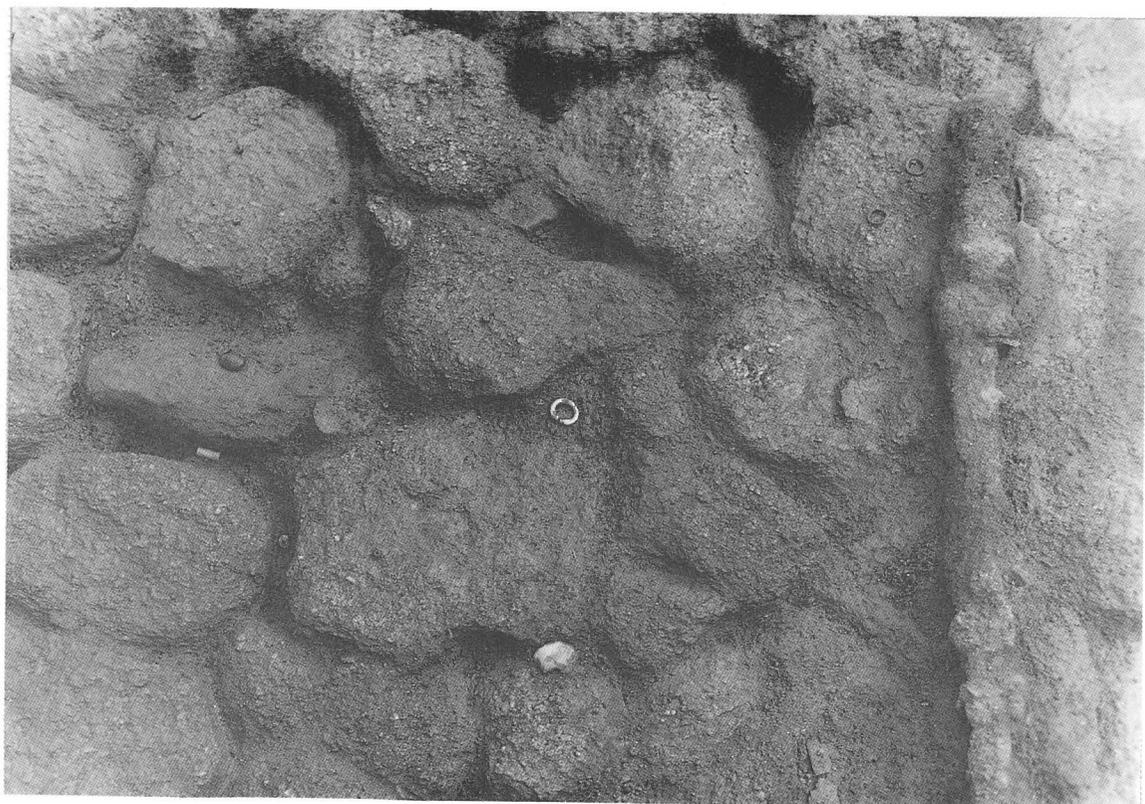
2号墳第1石室・第2石室



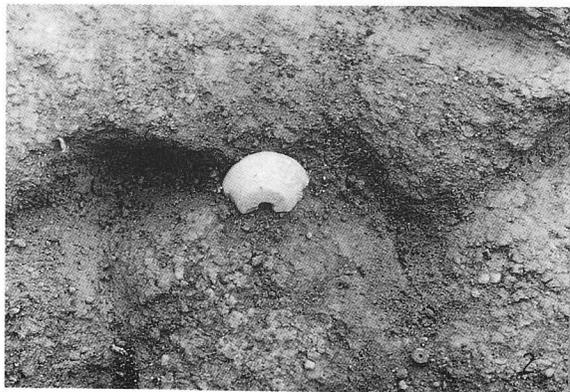
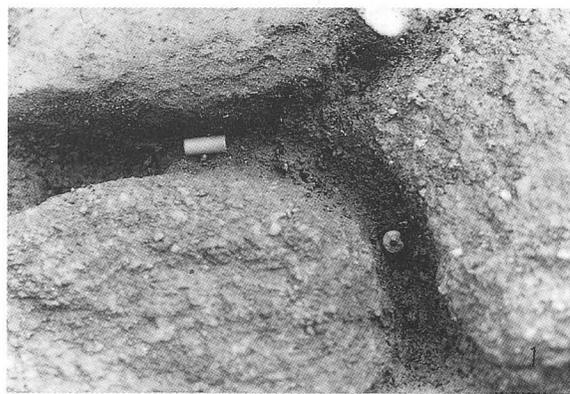
第1石室玄室土器出土状況



第1石室羨道土器出土状況



玄室床面遺物出土状況



1. 管玉 トンボ玉
2. 紡錘車

3. 耳環
4. 鉄鍬



2号墳第2石室



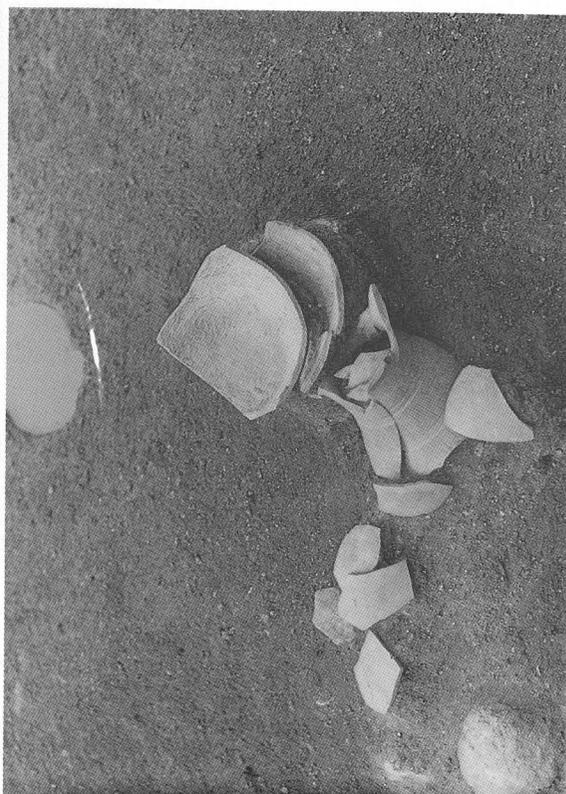
第2石室土器出土状況



2号墳周溝



2号墳周溝



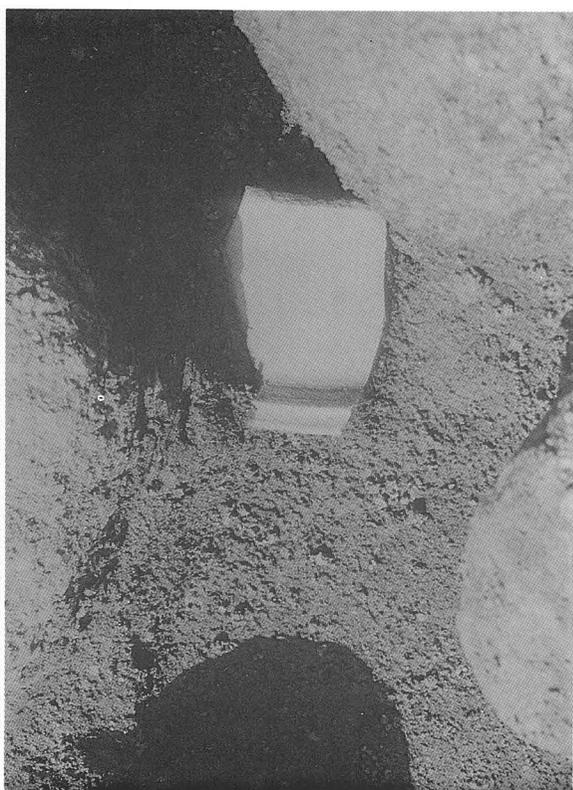
2号墳周溝土器出土状況



2号墳周溝上面



2号墳周溝上面土器出土状況



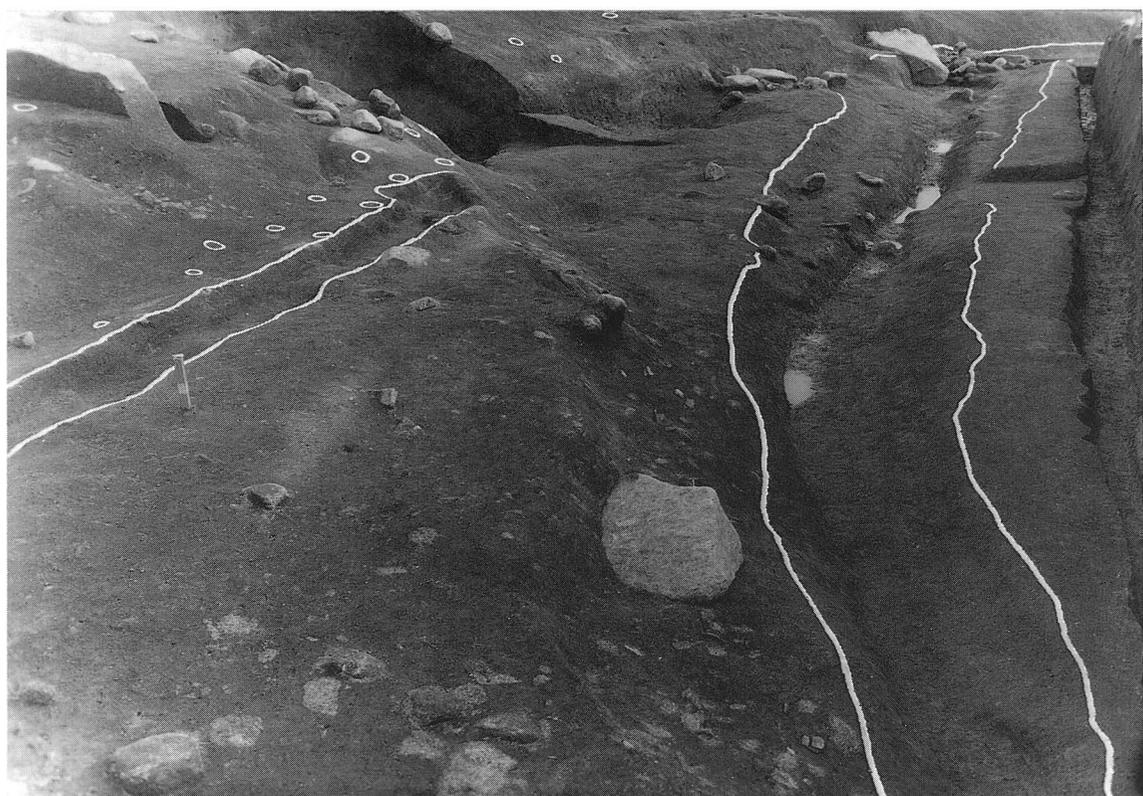
2号墳周溝上面土器出土状況



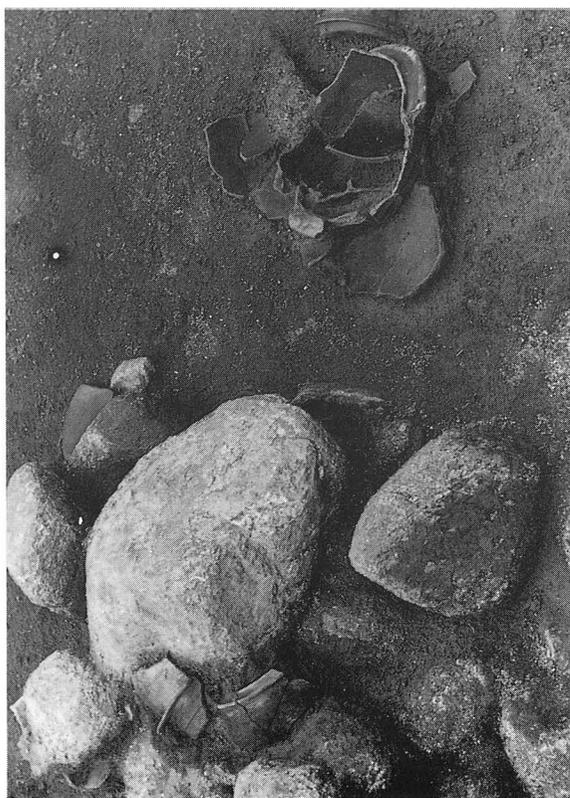
中近世遺構



中近世遺構



左から杭例・SD-3. 段状遺構. SD-5



SD-5. 段状遺構土器出土状況



同左



SE-2



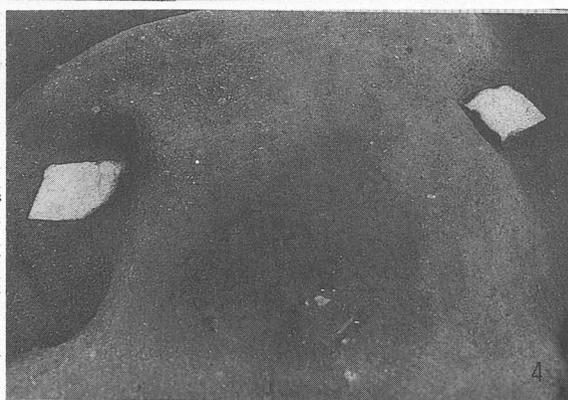
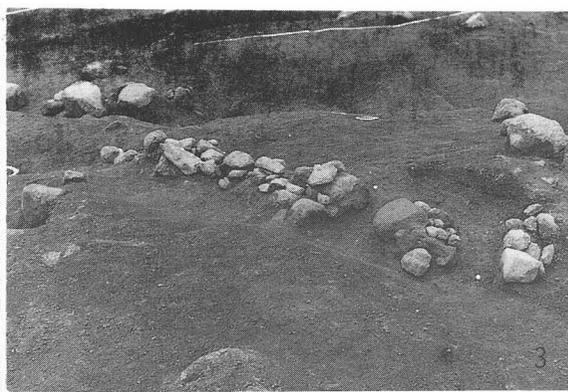
同左



SE-1



SE-3. 曲物



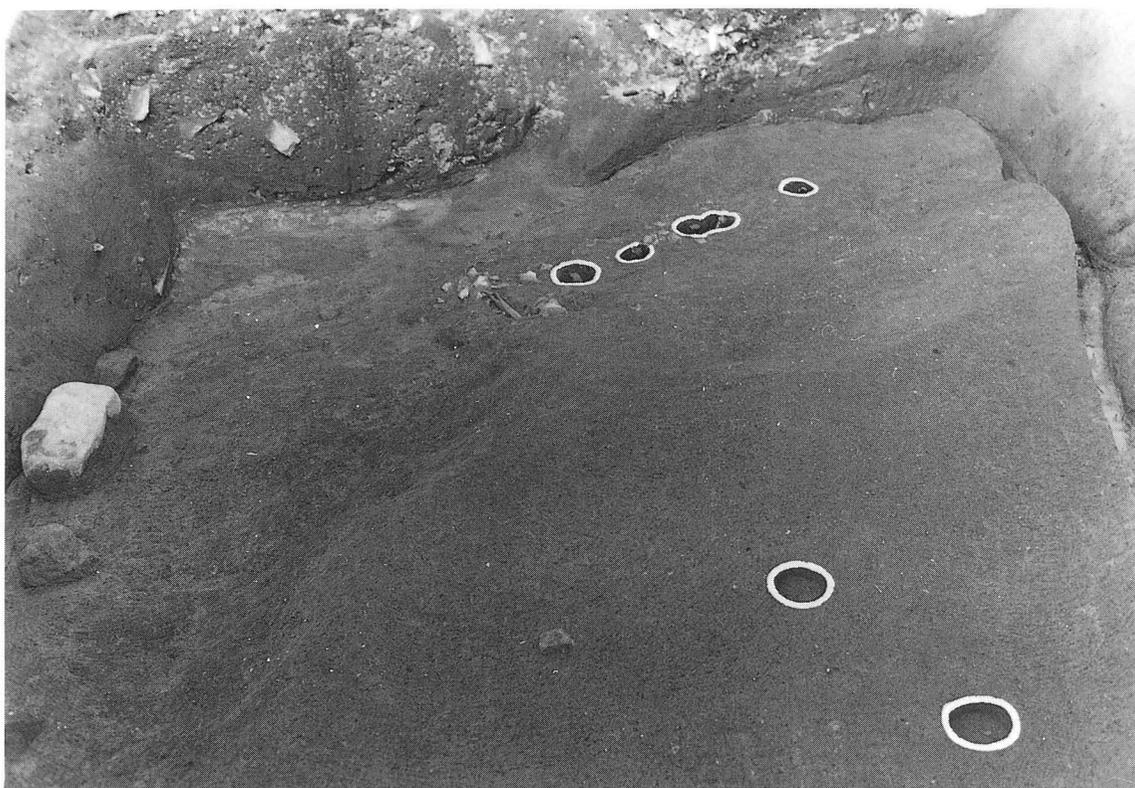
1. 集石遺構-1
2. 集石遺構-2

3. 集石遺構-3
4. 礎石と焼土坑

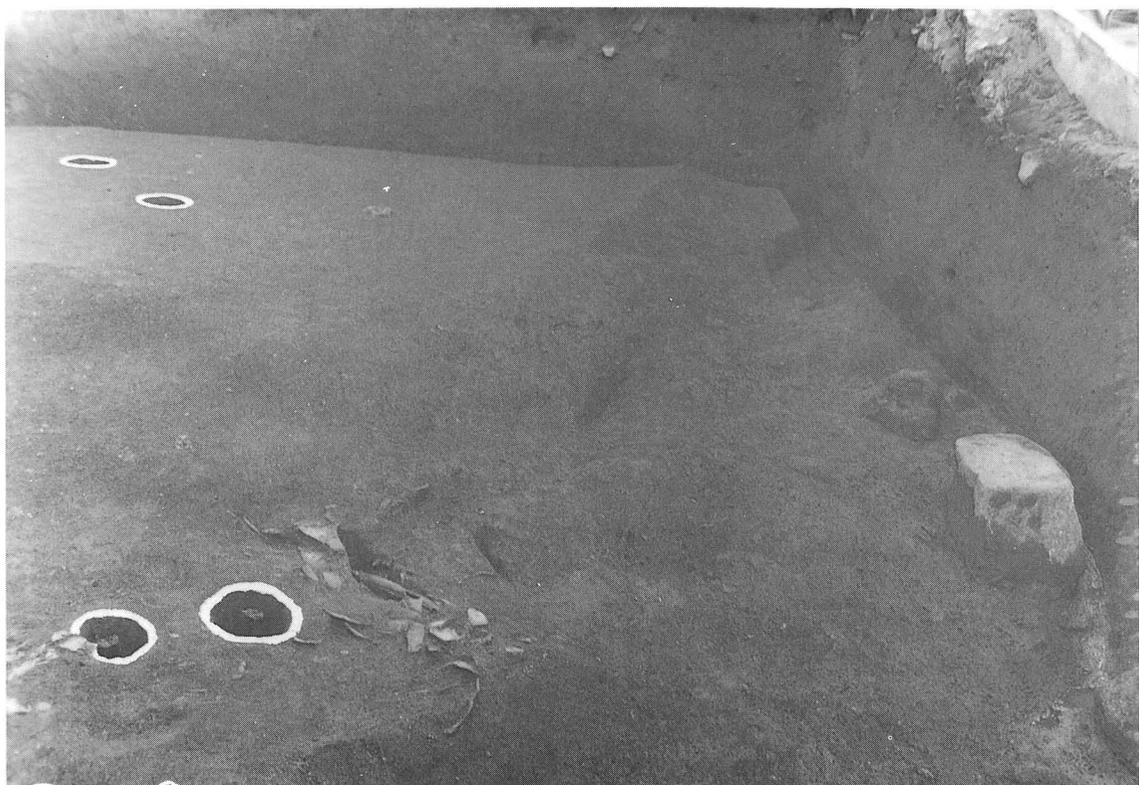


1. 杭列、集石遺構-4
2. 杭列、集石遺構-4

3. 杭列、集合遺構-4
4. 杭列断面



第1遺構面



同上



第2遺構面埴輪群、須恵器群



同上



第2遺構面埴輪、須恵器検出状況



第2遺構面下層、埴輪・須恵器検出状況



池のトレンチ



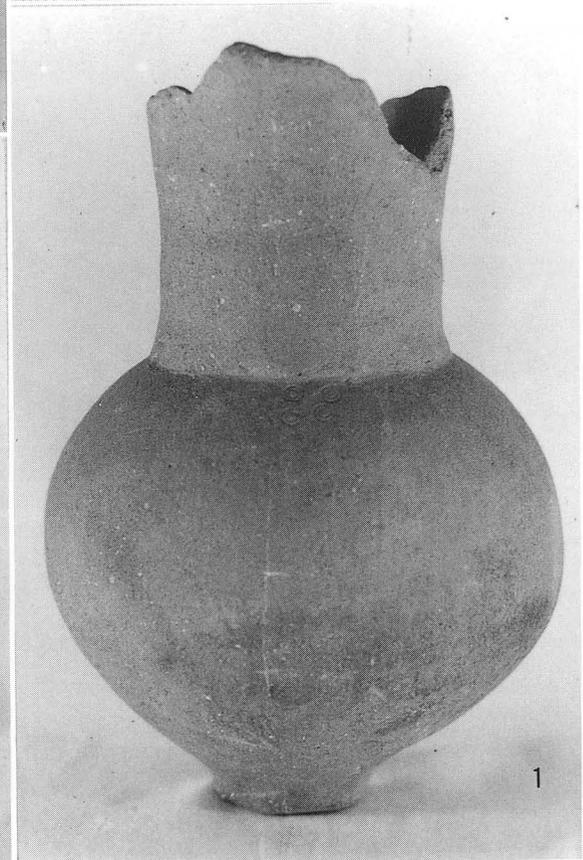
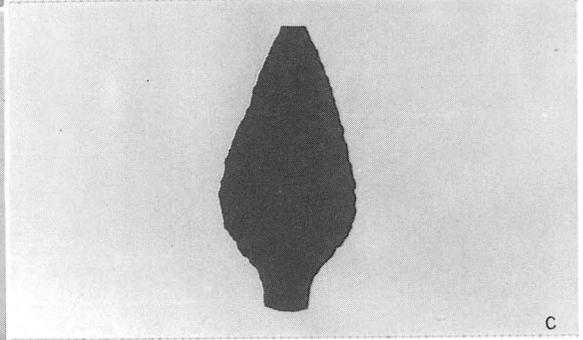
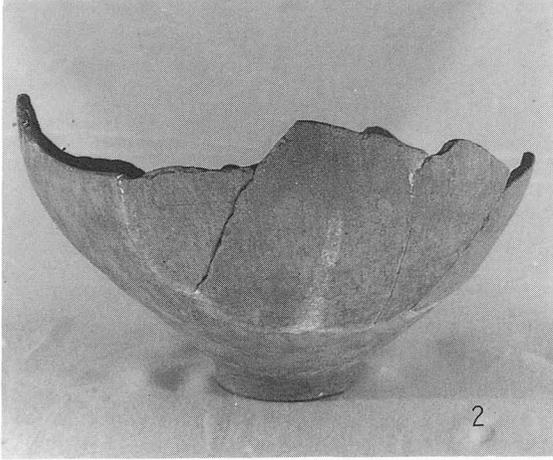
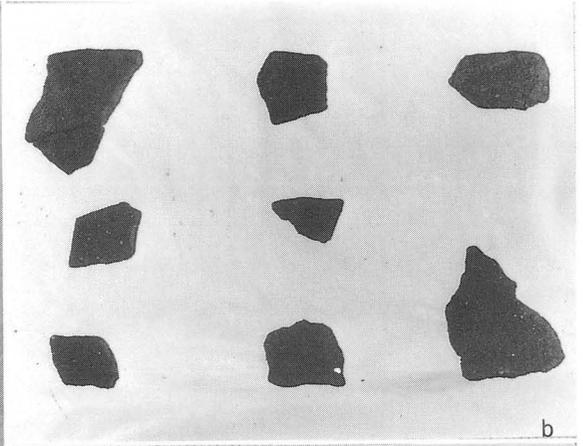
同上



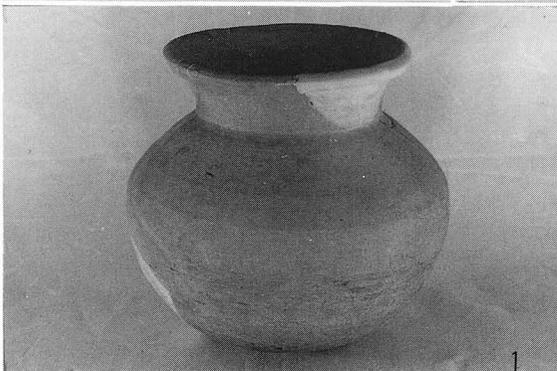
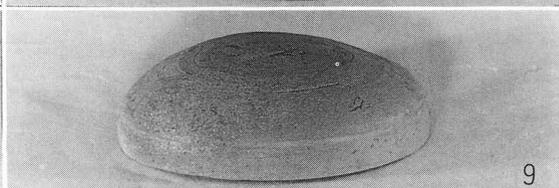
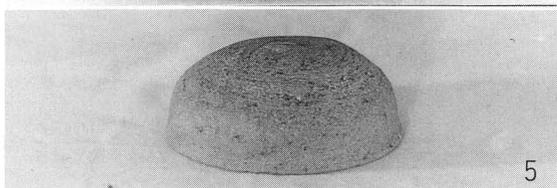
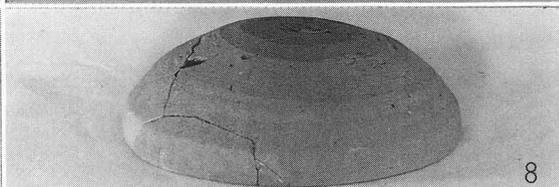
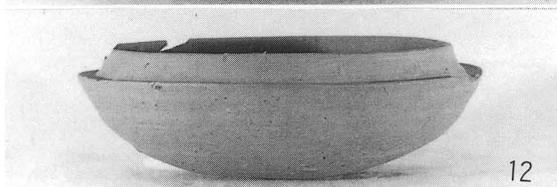
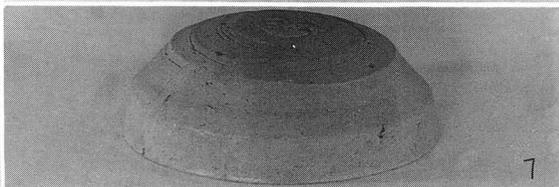
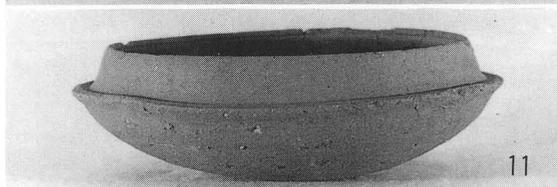
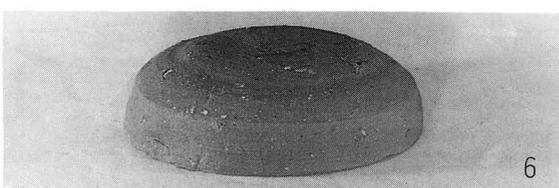
池のトレンチ、西壁

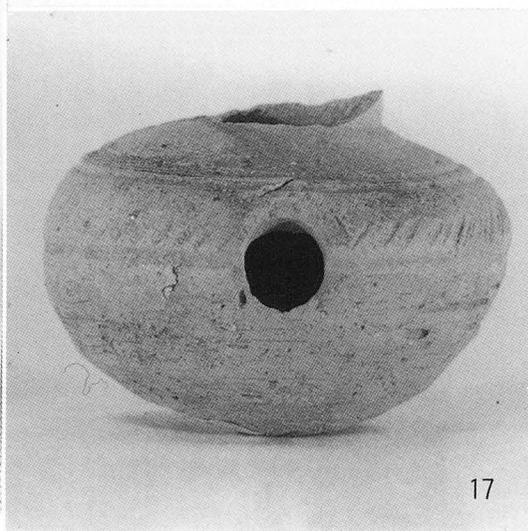
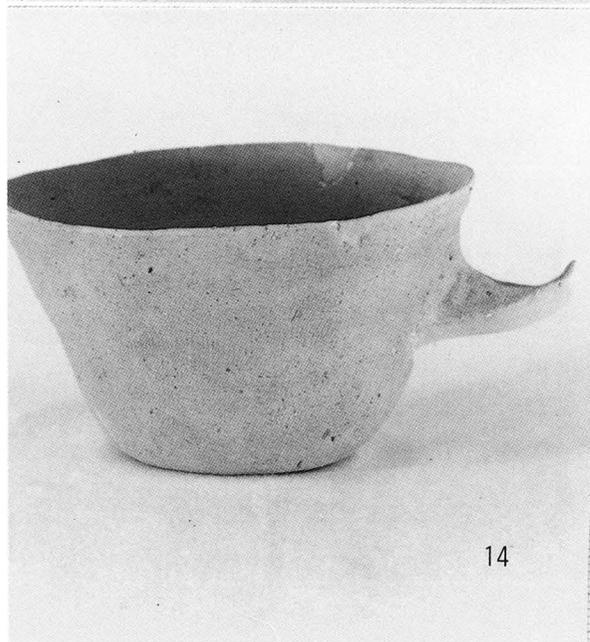
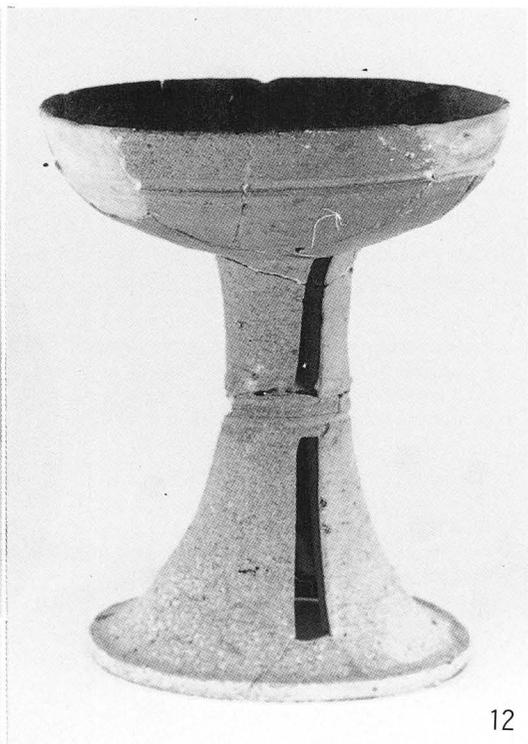


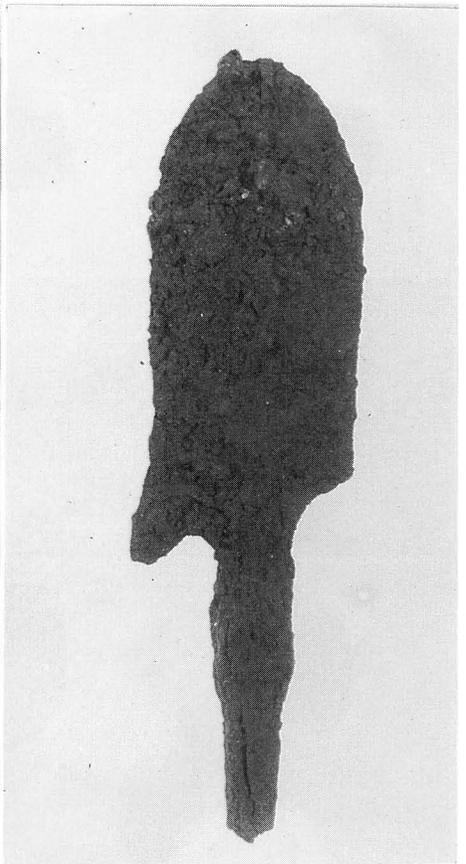
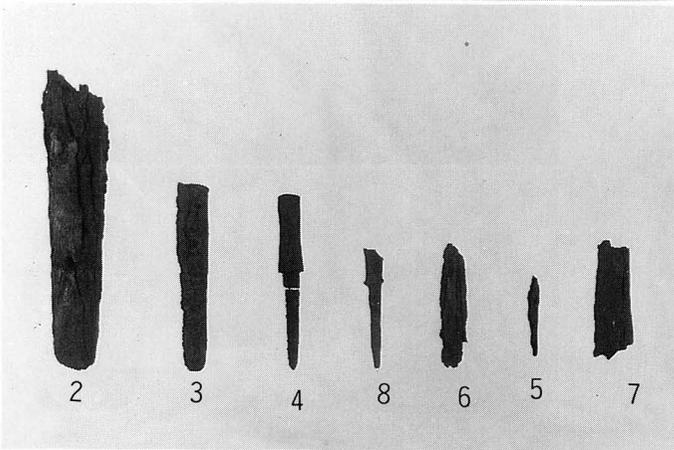
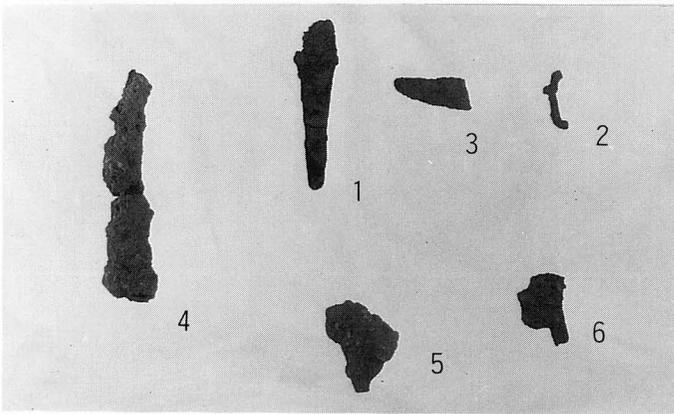
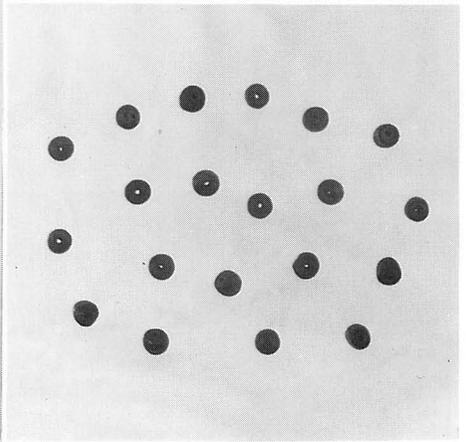
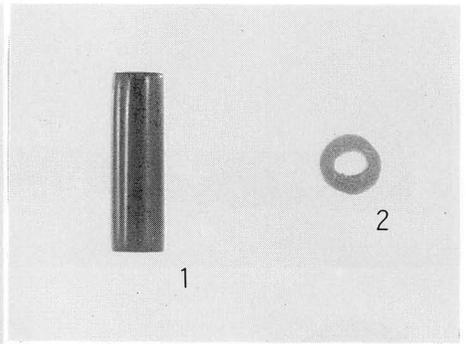
池のトレンチ、北壁

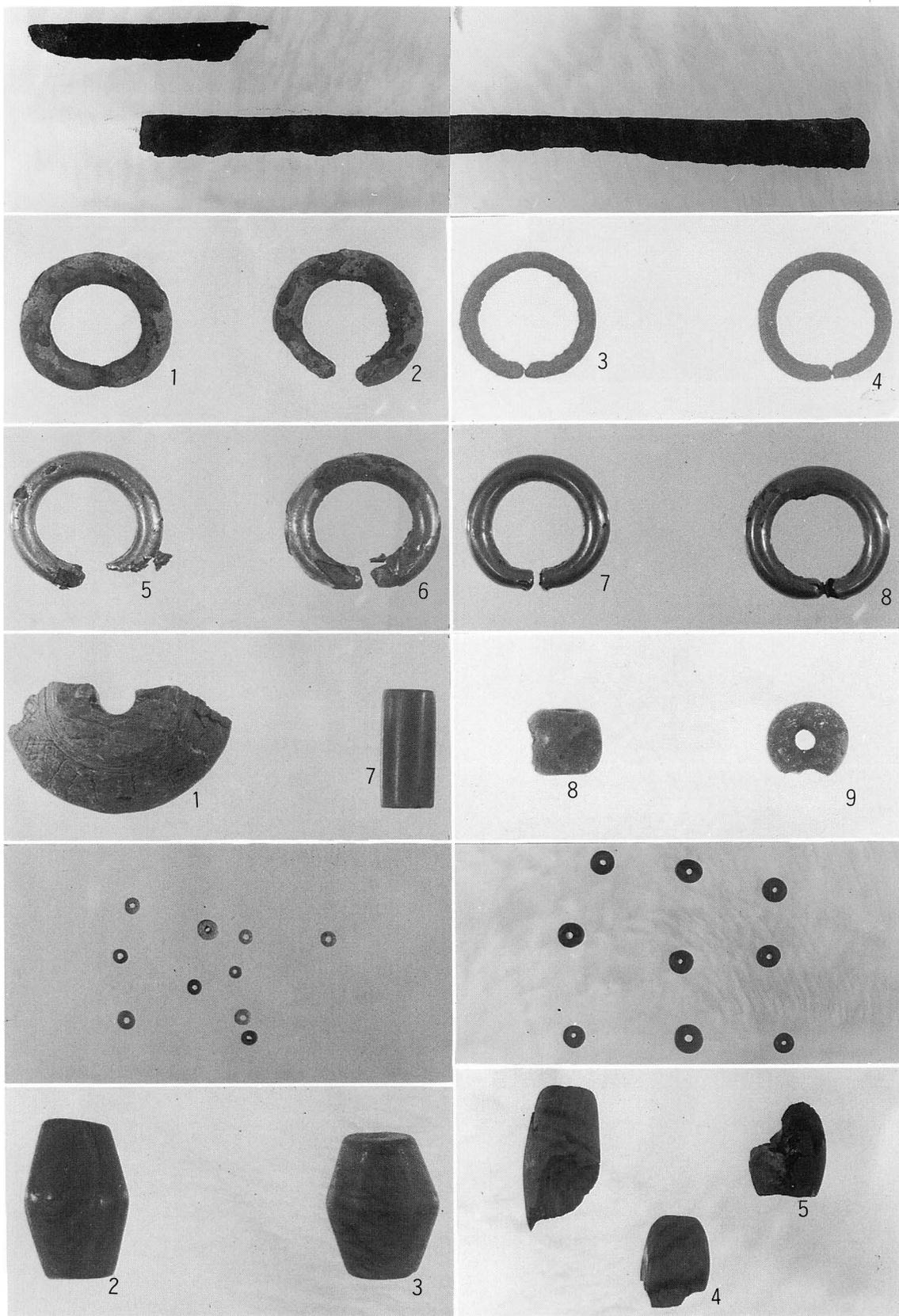


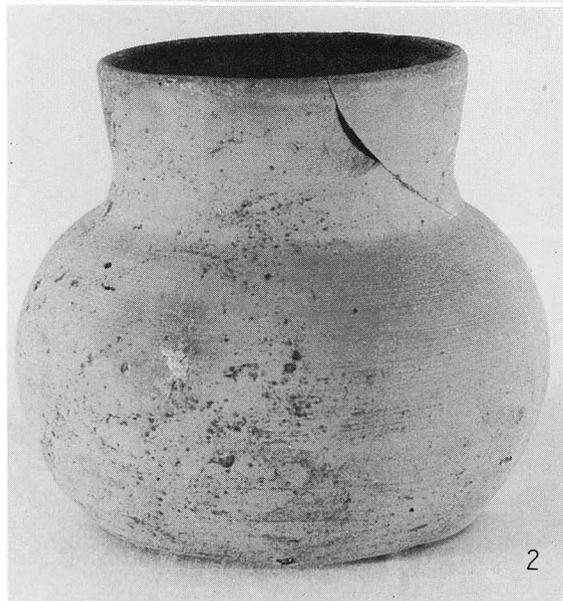
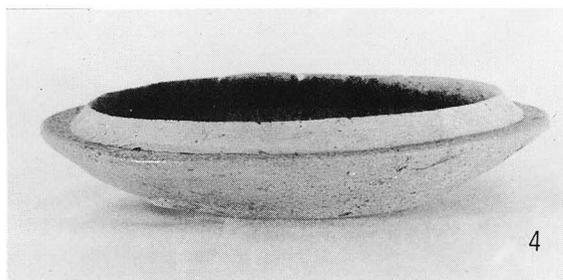
a, b 縄文式土器 c 石鏃



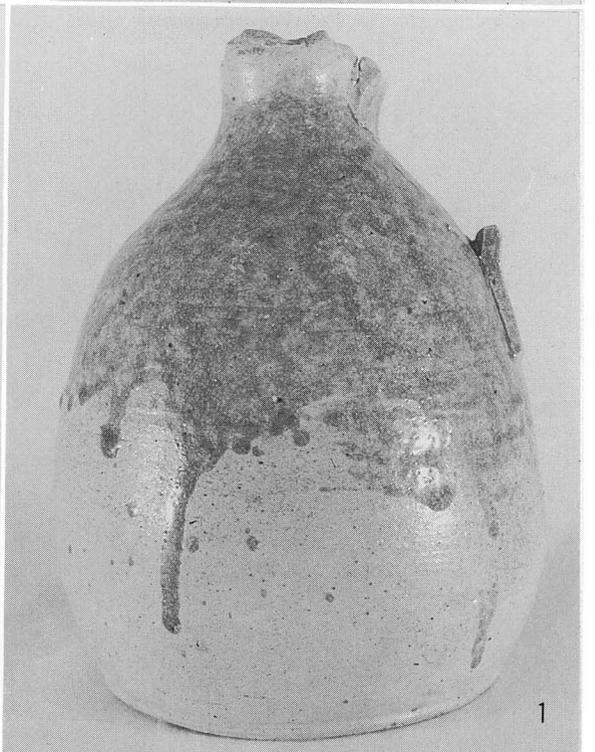
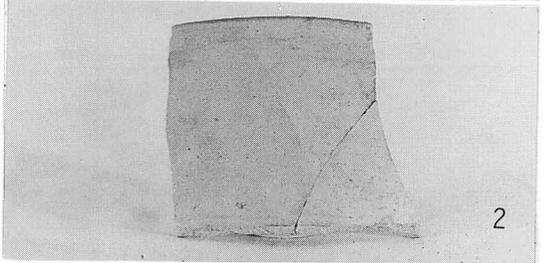
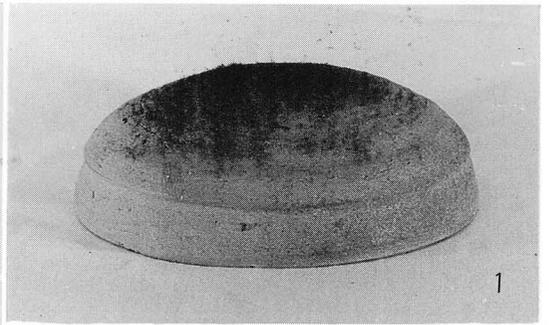


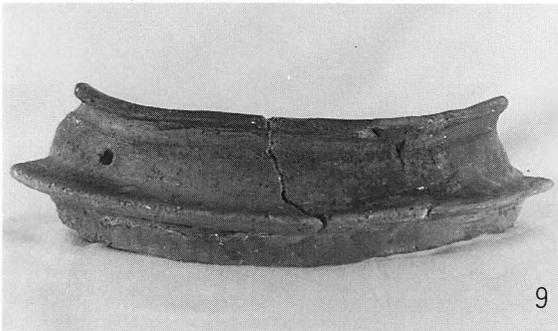
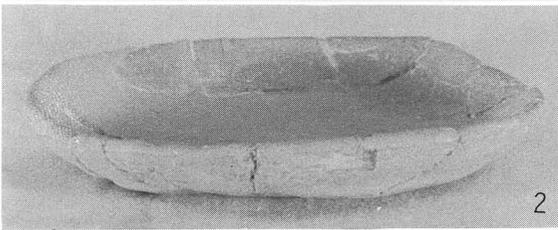
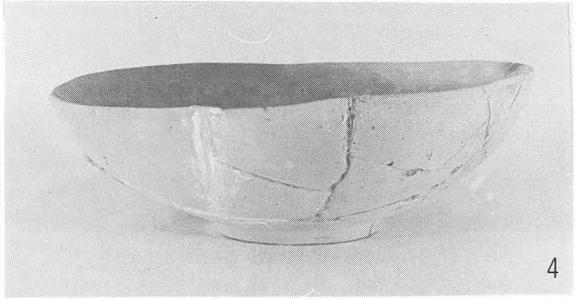
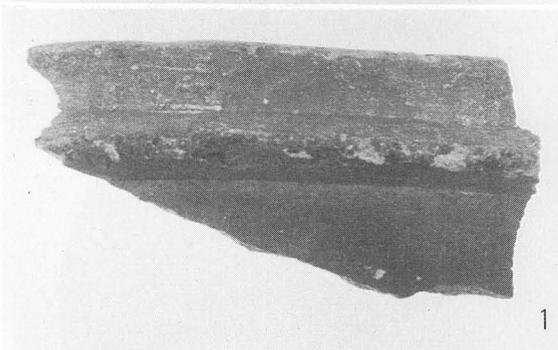






図版二十七 A区 古墳時代遺物(SK-6、大甕)及び周溝上面出土遺物





1

3

4

2

5

6

14

9

10



11



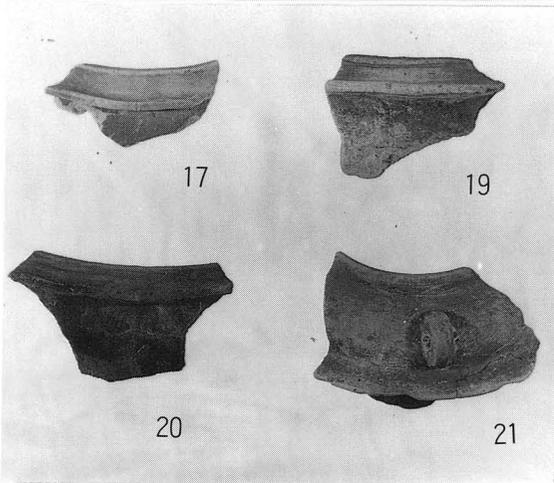
12



15



16

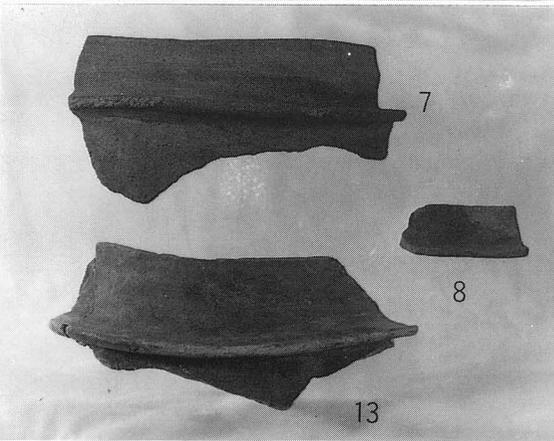


17

19

20

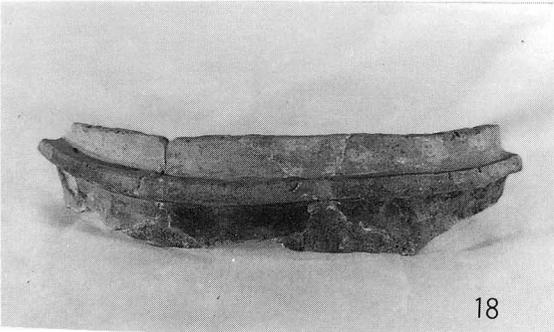
21



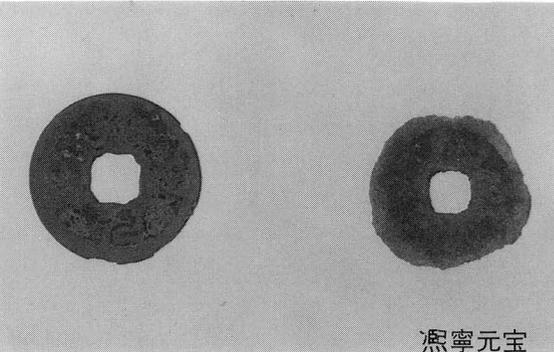
7

8

13



18



熙寧元寶



須恵器大甕

